

第2章 研修内容の摘要

第2章 研修内容の摘要

1. 合同研修前期

期間：平成29年9月25日（月）～9月29日（金）

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

図表 4（合同研修前期 研修日程表）

平成29年度 アウトリーチ（訪問支援）研修【合同研修一前期】
日程表

※ 国立オリンピック記念青少年総合センター

平成29年9月25日（月）	
13:30～	開会の辞
13:35～13:50	施設説明：「困難を有する子供・若者に対する施設説明」 内閣府政策統括官（共生社会政策担当）付青少年支援担当
13:50～15:30	平成28年度受講生 「アウトリーチ（訪問支援）研修から学び得られた事柄」 富古島市役所 福祉部 児童家庭課 家庭支援係 相談室 社会福祉士 下地 慶司氏 株式会社 九州コミュニティカレッジ みやざき若者サポートステーション 総括コーディネーター 小原 尚美氏 一般社団法人 彩の園子ども・若者支援ネットワーク 学習支援員 渡会 真琴氏 独立行政法人 国立重慶知的障害者総合施設 のぞみの園 発達支援課 課長補佐 俣科 幸氏
15:40～17:30	各研修生「5分間の自己紹介」
17:40～	事務連絡
18:30～	懇親会
9月26日（火）	
9:00～16:00 講義・演習①	「地域の関係機関・社会資源を活用した支援とソーシャルワーク論」 久留米大学 文学部 社会福祉学科 教授 門田 光司氏
16:10～18:30 講義・演習②	「過去研修生における現職の支援」 特定非営利活動法人 沖縄青少年自立援助センター ちゅらかい 代表理事 金城 隆一氏 一般社団法人 福島県精神保健福祉協会 ふくしま心のケアセンター 基幹センター 業務部長 山下 和彦氏 公益財団法人 さつぽる青少年女性活動協会 札幌市若者支援協会センター 副館長（主任指導員） 田中 基康氏 山陽小野田市教育委員会 心の支援室 支援員 白石 貴美氏
9月27日（水）	
9:30～17:00 講義・演習③	「各団体におけるケース演習」 子ども若者みらい相談プラザ sorae 統括責任者 仲間 玲子氏 特定非営利活動法人 ヒアサポートネットしぶや 総括リーダー 石川 隆博氏 特定非営利活動法人 青少年自立援助センター 常務理事 河野 久志氏 特定非営利活動法人 教育研究所 平塚月自立塾 理事／寮長 牟田 光生氏
17:10～18:00	「実地研修に伴う変入団体との情報交換」
9月28日（木）	
9:00～18:00 講義・演習④	「アウトリーチと重層的な支援ネットワークを活用した多面的アプローチ①」 特定非営利活動法人 NPOスチューデント・サポート・フェイス 代表理事 谷口 仁史氏
9月29日（金）	
9:00～13:00 講義・演習⑤	「アウトリーチと重層的な支援ネットワークを活用した多面的アプローチ②」 特定非営利活動法人 NPOスチューデント・サポート・フェイス 代表理事 谷口 仁史氏
13:00～	閉会の辞

9月25日(月):「アウトリーチ(訪問支援)研修から学び得られた事柄」

宮古島市役所福祉部児童家庭課家庭支援係相談室 社会福祉士
下地 慶司 氏

株式会社九州コミュニティーカレッジ みやざき若者サポートステーション
総括コーディネーター 小原 尚美 氏

一般社団法人彩の国子ども・若者支援ネットワーク 学習支援員
渡会 真琴 氏

独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園 発達支援課
課長補佐 保科 華 氏

資料

* 次頁を参照

9月26日(火):「地域の関係機関・社会資源を活用した支援とソーシャルワーク論」
久留米大学文学部社会福祉学科 教授 門田 光司 氏
資料

* 次頁を参照

9月26日(火):「過去研修生における現職の支援」

特定非営利活動法人沖縄青少年自立援助センター ちゅらゆい 代表理事
金城 隆一 氏

一般社団法人福島県精神保健福祉協会 ふくしま心のケアセンター 基幹センター
業務部業務課 主任専門員(臨床心理士) 山下 和彦 氏
(掲載不可)

公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会 札幌市若者支援総合センター
副館長(主任指導員) 田中 基康 氏

山陽小野田市教育委員会 心の支援室 支援員
白石 貴美 氏

資料

* 次頁を参照

9月27日(水):「各団体におけるケース演習」

子ども若者みらい相談プラザ sorae 統括責任者
仲間 玲子 氏

特定非営利活動法人ピアサポートネットしづや 総括リーダー
石川 隆博 氏

特定非営利活動法人青少年自立援助センター 常務理事
河野 久忠 氏

特定非営利活動法人教育研究所 宇奈月自立塾 理事/寮長
牟田 光生 氏

資料

* 次頁を参照

9月28日(木)、29日(金):

「アウトリーチと重層的な支援ネットワークを活用した多面的アプローチ」

特定非営利活動法人 NPO スチューデント・サポート・フェイス

代表理事 谷口 仁史 氏

資料

* 次頁を参照 (一部掲載不可)

合同研修前期の講義・演習で学んだ事柄について研修生が提出したレポートを以下に抜粋する。

図表 5 (合同研修前期 研修生レポートノ一部抜粋)

「地域の関係機関・社会資源を活用した支援とソーシャルワーク論」
<p>研修生レポート(1)</p> <p>大島では、低学年で不登校になるというケースはあまりなく、不登校で自宅にいるか、適応指導教室に通っている子どもの多くが高学年や中学生なのは、なぜだろうと思っていました。門田先生の話から小学校低学年のうち、親が登校刺激をすれば行けるが(他律性)高学年になると自律性が育ってくるため、本人が“学校に行きたくない”となると親が引っ張って行くとしても困難になる、という事を聞き納得できました。</p> <p>友人間のトラブルや勉強意欲の低下、虐待や貧困などの家庭内の問題等が背景にあると、誰でも不登校になり得ることを改めて学びました。</p> <p>普段、相談業務をする時は、健康問題を抱えている対象者が多いため、個人の要因に焦点を当て、その要因を取り除いたり、改善するよう働きかけたりすることが多いのですが、今回の講義で、相手の弱さを指摘するのではなく、ストレングスの視点で、その人のできている所(長所)や良さに目を向け、関わっていくことが大切であると学びました。ひきこもり支援に限らず、どのケースでもこの視点は生かせると思いました。</p> <p>大島町では、自前でひきこもり支援を実施していて、地域の中にある社会資源が少ないのが現状です。社会福祉協議会や民生委員・児童委員にはひきこもり支援について理解をしてもらっていますが、その他婦人会や地域の福祉施設、医療機関、教育機関などにも働きかけ、理解を得られれば、今ある地域ネットワーク機能が更に強まり、協働していけるのではないかと考えました。</p>
<p>研修生レポート(2)</p> <p>講義の中で門田先生から「アプローチには色々な引き出しが必要」「チームとして協働することが本人の可能性を広げる」と聞かれた。本人の選択肢と支援の幅を広げるには 個人が固定概念に捉われず strengths 視点で関わりを持つこと、多職種での共通認識を図ることが要点だと学んだ。また、チームとしての協働は、コーディネーターを中心に支援者が同じ方向性で居続けられることと同時に、支援者の抱え込みを防ぐためにも支援者同士の支え合いが必要だと学んだ。</p> <p>以前から精神・身体疾患を抱える当事者との関わりの中で、今日の前で抱えている問題を weakness 視点で捉えることが多かった。そのため、strength 視点は自身の課題だと感じていた。また、短期支援計画を考える演習では全く考えが浮かんでこず、こういった支援者・支援機関・支援内容があるかを知識として持ち合わせるだけでなく、個々の支援者に合ったものをどのように情報提供するか技術として自分の中で明確にしておくことは課題だと感じた。</p>
<p>研修生レポート(3)</p> <p>門田教授の講義で特に印象に残っていることが、クライアントのニーズの理解、支援者の押し売りにならないことについてです。</p> <p>ある軽度の知的障害を持っている若者がヘルプコールを出した際に、担当者が本人の困り感やニーズを理解しないまま、クライアントの思いとは違った支援を行ったため、クライアントと支援者に溝ができ支援が上手くいかなかったとの内容に、自身の現在の職務について、自分本位になっていないか、クライアントの求めていることは何か、ニーズは何なのか、今一度、支援する側としての心構えと初心に帰る大切さを教えていただきました。</p>

研修生レポート(4)

【ストレングスの視点に着目した実践の特徴について】

キーワードは状況 どうしたら状況を変えられるか。
(本人を変えることは難しいので状況を変えること)

本人のストレングス視点

人柄(個性)、才能、技能、生活に抱く願望や抱負、興味、良い生活習慣の継続、経験からくる自負など。

環境のストレングス視点

家族仲が良い、近隣に知人が住んでいるなどの人的環境、福祉制度が利用できる制度的環境など。

支援者は、本人のできない部分を改善するよりも、本人の頑張ろうとする強さや、つよみの特徴を伸ばしていくことを考え支援計画を作成するなど。

課題を抱えているケースは本人のできない部分の修正や治療といった考え方に陥りやすく、特にひきこもりケースの当事者は対人恐怖があり、外部の人間と繋がるまでに時間がかかるため、ストレングス視点から本人との関係性を構築することに丁寧な時間が必要になると感じた。

また、その人らしい地域生活を営むことができるように支援していくエンパワメント・アプローチが鍵になると感じた。

【協働支援を発展させる要因について】

フォーマル・インフォーマルのサービスが必要となる。

専門的役割と責任を知ること。

(学校、スクールカウンセラー、児相 cw、生活保護 cw、警察、NPO 団体、その他...など。)

意欲的な参加が必要になる。

当事者とその家族の状況改善に向けて、支援側が共通認識をもつこと。

問題原因を見つけようとする視点になると、過去のできなかった事にばかり目がいくようになるので気をつけること。

これからどうしたらよくなるか(未来に目を向けて)ストレングス視点で本人の納得できる支援体制を作っていくこと。

また、エコマップを使用することで家族の関係性の強弱や支援機関との繋がりが見えやすく、どこから本人にアプローチをかけていくか見極めていくことができるので有効な手段だと感じた。

今後の面談では、学び得たことから丁寧な聴き取りを行うことで、相手が安心感を持って会話ができるように、時間はかかっても確かな信頼関係を作ることを大切にしていきたいと思った。

研修生レポート(5)

門田先生のお話では、ソーシャルワークの基礎を学びながらも、地域での実践のあり方、現状を教えてくださいました。

そのなかでも、アウトリーチや相談において「weakness」「strengths」という視点は改めてこの支援において大切なものを再確認することが出来ました。就労支援では、本人の“できない”“ニガテ”なことに着目してしまうことがありますが、そうではなく本人の自立を促すためにも、「ストレングス」に目を向け、可能性を広げていくことで本来の力が発揮され可能性が広がるのだと感じました。

研修生レポート(6)

「本人を変えるのではなく、状況を変える」この言葉が印象的であった。これまでの支援では、本人に対して変化を望むことが多かった。その結果、Weakness の視点で本人を捉えてしまい、出来ていないことばかりに目を向けていた。しかし、当事者を Strengths の視点で捉え、その強みを生かし、それが発揮できるような場を作ることが本来の支援なのではないだろうか。そのために、支援者として、地域の関係機関・社会資源の活用、そして、新たな社会資源の開発といったことが重要であることを学んだ。

研修生レポート（7）

社会で問題となっている不登校は誰でもなる可能性があり、学校内でのいじめや友人間のトラブル、学校環境や勉強意欲の低下、家庭内の問題などが考えられる。内閣府が22年に行なった高校中途退学者調査では、経済的にやや苦しいが37.8%、苦しいが25.2%であり、経済的な苦しさを感じている人が全体の63%に及んでいる。そのため、本人の学業の継続において、経済的なゆとりが大きく関わっている。

それぞれの地域で相談機関は存在するものの、相談機関は支援を必要としている人の存在を知る機会が少ない。そのため、アウトリーチを行なう前段階として、現在支援を必要としている方の発見が必要となる。また、相談者が勇気をだして支援機関に連絡をとったとしても、本人の来所を必須条件としたり、別の機関へ紹介を行なうと相談者は紹介された機関へ足が向かないことや相談意欲が低下し、支援機関につながらずに地域にうもれてしまうことが考えられる。

研修生レポート（8）

私は日ごろの業務の中で、支援を必要としているが支援に繋がっていない方の把握に難しさを感じていたため、門田先生のお話は、今後の事業を検討していく上で大変参考になると感じた。地域に住む支援を必要としている方を発見するためには、地域のネットワークの力が必要であるというお話から、対馬の限られた資源の中でどのように地域のネットワークを構築していけばよいか方策を考えるとともに、自ら地域に行きつて少しずつネットワークを作っていくことの必要性を痛感した。門田先生は、講義の中で、「協働」という言葉を何度も使われていたが、「協働」の視点を持つことは、ひきこもりに関わらず地域で暮らす困難さを抱える方々を支援していく上で重要であることを学んだ。

また、ストレングスの視点で支援の計画を立てることも、今後の支援でのポイントにしたいと感じた。これまでは、疾患や障害などの「弱さ」や「できないこと」に注目し、それによる生活の困難さを減らすための目標を立てて支援をしてきたが、本人の「できること」や「好きなこと」を本人・家族から丁寧にききとり、それらを生かすための目標を長期的・短期的に立てていきたい。

研修生レポート（9）

この講義で、Strengths視点とWeakness視点、関係機関による協働支援について学ぶことができた。

Strengths視点ということ念頭に置いて考えていたつもりだったが、いつの間にかWeakness視点で事例を捉えていることに気づかされた。グループワークを通して実際の現場でStrengths視点を持って関わっていくことの難しさを感じた。どのような視点をもって支援を行うかによって、アプローチ方法も異なってくることを理解することができた。

また、関係機関同士で情報共有することはもちろんのことだが、協働して支援を行っていくことの重要性を感じ、日頃から関係機関とのやり取りを密に行っていくべきだと改めて感じた。関係機関ともStrengths視点や協働について共有し、今後の支援に活かしていきたい。

研修生レポート（10）

門田先生の講義では、特にストレングスの視点について学びが深まり、自分自身の支援への気づきがありました。

社会福祉は、個人の課題や問題に目を向けるのではなく、本人の強みを生かし、本人の願いを伴走しながら叶えていくことであると理解していました。しかし、現場では、本人の課題（と思われるもの）や弱さに着眼するアセスメントになりがちであったように感じています。また、チーム支援として、多職種の強みを生かしながら、支援者同士も互いにストレングスの視点をもって関わり、より良い支援体制を構築する必要があると感じました。

講義を通じて自分自身の支援を振り返る機会となりました。気づきを日々の実践に生かしていきたいと思えます。

研修生レポート(11)

この講義をとおしてスクールソーシャルワークの基本知識やアウトリーチの可能性を確認することができた。

講義の中で取り上げられた内閣府の「若者の生活に関する調査報告書」では、ひきこもり状態である若者が相談意欲を示した割合が合わせて32.7%だった。相談意欲を持っている若者が実際に相談に結びつくために援助側の工夫が必要だが、その一つがアウトリーチであると思った。

ストレングスの視点については、問題の視点に傾きやすい理由の一つに問題は具体化しやすいからではないかと思った。反面、ストレングスの視点は未来志向で抽象的な印象が強い。援助の中で利用者のストレングスを具体化しつつ、ストレングスによる効果が利用者の状況改善に直結することを示していくことの必要性を学び得た。

研修生レポート(12)

・生活に入っていくと多様な支援が必要であることが見えてくる。そのために多くの引き出しをもって多様なアプローチ支援ができるようにする。

・卒業後にどこにも所属していない 地域にうもれる(把握されない) ひきこもりをいかに発見して アウトリーチをかけて相談機関につなげるか。

・SSWは本来、精神保健福祉士が社会福祉士の資格が必要だが、実際は元教員や心理士が掛け持ちしているのが現状。ソーシャルワークの専門的な資格をもった人材確保が困難。ソーシャルワークが果たしてできているのか課題。

・子どもの貧困からの離脱 教育の保障(どの時代も一貫して必要)

・日本は学校の中で教育を保障(日本の不登校問題)。アメリカやカナダなどの外国は、個人に教育を保障しているので、不登校はいない。

・アウトリーチはコミュニケーション力が重要。家族と関係を築いていくことが大切。

・ケース会議にてエコマップを活用し、関係の状況を視覚的に捉え、全体で共通認識を図る。その上でそれぞれの関係機関での役割を決めていくことが有効。

・一方向のコミュニケーションではなく、双方向のコミュニケーションを目指す。そのためには、確認しあうことが大切。

・支援員の価値観を押し付けるのではなく、本人自身が決断することが大事。

・社会福祉協議会の強みを活かし、地域に社会資源につなぐ仕組みがないなどの課題を、新しい社会資源の開発に取り組む。

・ストレングスの視点に着目した関係づくりを目指すことで、その人のもつ可能性を高め、エンパワーメントしていく。

・「～してください」という指示ではなく、本人主体で「～してみませんか」と提案という関わりで接する。

・ソーシャルワークとは、人と環境との関係性を改善していくこと。そのためには、チームで取り組み、協働と役割分担が重要。

・ひきこもりの発見 アウトリーチにより相談機関につなぐ(ホップ) 相談援助から社会活動への(ステップ) 社会活動から社会的自立への(ジャンプ)。その間、本人・家族の相談、社会参加の機会、家族支援は伴走している。

・当事者の無理のないように次のステップの目標設定をしていく。単発なものに参加させ自信をつけさせる。

研修生レポート(13)

アウトリーチの歴史から概念により、訪問支援の大切さを学びました。通常利用している医療・福祉サービスでは、多様な訪問支援がある。そのため、通常「アウトリーチとは」支援を届けるために多職種、複数(チーム)による訪問支援を「アウトリーチ」と呼び、分野により概念が異なることを知りました。更に、教育分野では訪問するには難しい現状があるが、スクールソーシャルワーカーという職種により可能になることが理解できた。現在の学校において、機能している場所は少ないように感じるが、スクールソーシャルワーカーが配置され、他部署と連携し多職種での訪問支援をすることで、子供の困りごとや課題に対して早期に対応できるのではないかと思います。

そして、平成30年度予定の第5期障害福祉計画や障害者総合支援法及び児童福祉法の改正を踏まえた、地域包括ケアシステムの構築を目指す政策理念について教えていただけると地域福祉について深まるのではと考えました。

研修生レポート(14)

- ・福岡県内のうきは市で、地域ネットワークの取り組みが行われており、高齢者宅への同行訪問や内職のシェアステーションなど、興味深い取り組みが数多く行われていたこと。
- ・100年前の米国の状況を聞き、現在の日本の状況と構造的なところでは同じなのでは、と感じたこと。
- ・ストレンクス視点という考え方が比較的新しい概念であり、ソーシャルワークの分野から出たものであること。エンパワメントが環境づくりによって個人に働きかけるアプローチであること。視点の違いで同じ事例に対してもアプローチが異なること。
- ・協働支援にとって、ソーシャルワークが人権と社会正義を基に、人と環境との関係性を改善するアプローチであること。
- ・ワークによって、ジェノグラムやエコグラムを実際に作成して支援計画を考えることで、ケース会議の進め方を体感することができたこと。

研修生レポート(15)

ストレンクス視点についての講義を受けて、改めて聴くことの重要性を痛感した。支援をする中で傾聴は基本中の基本であるが、傾聴の目的は「信頼関係を築く」ことだけではなく、聴くことでCLの強みを引き出すこと、CLの内面に存在する「現状を変えたい気持ち」を励まし、協働関係を築くことなのだと感じた。

また、関係機関との協働支援については、リファー目的での連携＝ケースをたらい回しにするのではなく、それぞれの支援機関の役割や立ち位置を明確にし、チームでとして支援していくことの重要性を感じた。そういった事例の積み重ねが地域のニーズの発掘、地域づくりにつながっていくのではないかと感じた。

ジェノグラム・エコマップの演習では、改めて書き方をレクチャーされたことがなかったため、大変参考になった。

研修生レポート(16)

相談することに抵抗をもつとされる当事者たちが発見されず、相談機関の介入を受けることなくひきこもりが長期化するようなケースを防ぐために、地域が発見・支援システムを強化していく必要性を、不登校児童やひきこもりの現状や声を知ることで大いに理解できた。実支援の場における当事者との関係構築に関しては、ストレンクス視点(非審判的なアプローチ)を用いることで少しでも良い方法や方向性を探ることが当事者の相談意欲の向上や前進につながると学んだ。また、社会的自立までのプロセスを具体的に計画する中で、新しいグループと当事者を丁寧につないでいくために、各連携機関や関係者と情報共有だけで終わらない信頼関係を築く『協働』の重要性についても学びを深められた。

研修生レポート(17)

いわゆる困難を抱える子ども・若者へのターゲット型の支援アプローチ(ソーシャルワーク)と、地域全体へのユニバーサル型の支援アプローチ(コミュニティワーク)は、個々の制度や支援メニューベースでは、独立して扱われることが多く、これまで違和感を感じてきた。しかし、本講義ではそれらが一体の地続きのものとして、説明がされており、改めて支援者として両輪を認識しておくことが大切だと学んだ。

また、課題解決型のアプローチと能力開発型のアプローチの整理についても非常に興味深かった。子ども・若者育成支援推進法に基づく法定協議会や指定支援機関による支援は、イギリスのパーソナル・アドバイザーをモデルとしているが、支援の客体としてクライアントを扱う制度が多い中で、支援の主体としてクライアントを捉え直すスタンスの獲得と、その双方の視点を行き来したり、使い分けることがまさにアウトリーチも含む、支援モデルとしては重要であると再確認することができた。

研修生レポート(18)

地域に存在する社会資源の利用とソーシャルワークにおける基本的な思考とスタンスを中心に学びました。また、各種制度と現状を教示していただき、社会資源の開拓と利用者への提供には、平素からの情報収集に努める必要がある事を改めて学びました。

私たちはケースワークを進めていく上で、「最善の実践」が求められます。私たちが関わっていく、支援を必要としている人たちの課題は様々です。その課題解決に向けて、多くの組織や地域に存在する社会資源を最大限に活用する事で、最善の支援が可能であるという事を改めて学びました。その他では、思春期における「友人関係」形成の意味と重要性を明確な根拠を基に説明していただいた事と、自律性の芽生えた児童への支援における留意点は、抽象的に捉えていた当該期児童への処遇方法考察において大変参考になりました。

研修生レポート(19)

相談機関を必要とする人は支援機関を知らないことが多く存在し、相談機関に届かずに地域に埋もれてしまう場合がある。この事態を事前に防ぐために、アウトリーチは非常に有効である。そして、地域の関係機関との連携を図り、当事者と関わる時には強みや長所、良さなどにフォーカスを当てるストレングス思考が重要ということを改めて実感した。ウィークネスの視点や、問題視点を持っていると、問題の内容は専門職によって定義づけられる為、当事者にとって治療は問題の核心である個人の弱みを克服することで非常に辛く、触れられたくない内容である。だからこそ問題を取り除くのではなく、ストレングス思考で、できることを知ったり自信や可能性を身につけたりして、エンパワメントしていく。

また、相談支援やアウトリーチを進めていく上で、家族関係や他機関の関係性などを示すエコマップという視点を初めて知った。関係性を把握することで、危機リスクに対してのマネジメントや、アプローチしていく対象が明確になり、段階的に対象者へアプローチの計画、実践が可能になると感じた。

研修生レポート(20)

ひきこもり支援においては、当事者が相談を求めている場合が多く、自ら相談機関には行かず長期化につながりやすい。そこで、地域のネットワークでそうした困難を有する当事者、家族を発見してアウトリーチ支援を行っていくことが有効である。支援に際しては、個人の問題点に着目する医学モデルではなく、ストレングスの視点を持って関係を作ることが求められる。理念、知識として知っているだけでなく、個々の事例においてそうした視点から実践を行うことの難しさと重要性が、ワークを通して体験的に理解できた。そうした関係を足掛かりに、当事者は相談機関に繋がり、社会活動、社会的自立に進んでいくことができる。また、支援者は関係機関と協働して支援を行っていくことも重要である。これは単なる連携を越えて、チームとして目標を共有し、互いの専門性を尊重しつつ、信頼関係を築いて支援にあたっていくことである。

「過去研修生における現職の支援」

研修生レポート(1)

過去研修生2名のお話を聞いて、共通しているなど感じたのは、ひきこもり当事者に会えない段階でも、家族との面接を続け、家族支援を続けることで家族が変化するという事、また、家族が変わると当事者が“面接で何が行われているのかな”と気にし始めるようになり、次のステップにつながりやすくなる、ということでした。訪問して家族と面接する場合には限らず、家族に外出してもらい、面接する場合も、支援者のところに行ってくることを当事者に伝えてから外出するようにしてもらうことで、支援者の存在を本人に気づかせることができるということも学びました。また、家族との関係性を保つ事が、当事者に近づけるか否かに直結することを学びました。

“ひきこもり=悪=そこから救出する”ではなく、“その人の側にたつ、原因を考えるのではなく、意味を考える”という話がありました。これまでの自分の支援を振り返ると、原因を考えることはしていても、ひきこもっている意味を深く考えることはしていなかったと気づかされました。この視点は、今後の活動にも生かしていきたいと思えます。

研修生レポート(2)

客観的事実の整理と見立てをグループワークで行ない、客観的事実でも支援者同士の考え方のすり合わせが必要になることを、ワークを通して体験できた。今回の講義ではお互いの考え方を否定せずに異なる意見を受け入れることはできたが、実際の現場で強い意見が出されたときに柔軟に受け返すコミュニケーション技術も必要だと感じた。

抱え込みについてどのように対策しているのか、モチベーションを上げるために職場で工夫されていることを質問したが、どこの職場でも課題のようだった。抱え込みを起り得るものとして捉えれば、軽減する対応をチームで検討することが大事だと考える。組織としてシステムを作ることも効果的だと聞かれ、今後の課題と感じている。

研修生レポート(3)

アウトリーチ研修において、事前に何を心構え、どんなスタンスで学ぶかを考える大切な時間になりました。事前にアウトリーチ研修に対しイメージや情報収集は行えど、具体的なイメージが浮かびませんでした。過去研修生からの生の情報、研修後の生かし方、課題を確認することが出来、より今後の中期後期の研修に向けた自身の方向性を見出すことが明確になりました。

特に山陽 心の支援室 白石支援員の話が、ご自身の経験や過去、家族関係まで赤裸々に話をされ、共感性を持ち話を聞くことができました。

研修生レポート(4)

【1】YOUTH+センター(札幌市若者支援総合センター)におけるアウトリーチの取り組みについて。

自立支援事業の全体像からみて、平成18年から始めた『発見・誘導』の支援入り口があることは、支援を必要としている子供・若者を見落とさない工夫と心が感じられた。(現在の登録数は2万数千人)

ポイントとしては、在学中もサポステ介入で支援機関と触れ合う状況を作るように連携をとっており、本人のリスクを回避することにも繋がっている。その中で、本人の特性に合った居場所や様々なイベントや情報提供をしている活動を学ぶことができた。

【2】アウトリーチ研修で学んだ家族支援とチーム支援について。

アウトリーチの実際では、親御さんが本人の事で悩み苦しんでいる状態で訪問を希望する場合は、本人に会う・会わないは第二段階の支援と考えており、親御さんの思いを受け止め家庭訪問を実施している。支援介入の第一段階は家族支援から始まり、家族との信頼関係と、家族の心の負担を和らげる作業を丁寧に心がけていることがわかり、その事が本人の改善に繋がっている。

アウトリーチの在り方については、支援の入り口を広げて介入することにより、本人の回復する力へと繋がっていくことを学べた。

研修生レポート(5)

札幌市若者支援総合センターの田中先生の講義では、田中先生が研修後に行った支援についてのお話が興味深かった。実践の中で家族相談から、アウトリーチを始める前に本人に手紙を出し、その反応を家族から聞き段階をつけて介入していくという方法をとられており、私がこれから行っていく支援にも活かせるのではないかと感じた。田中先生の所属では、学校へのアウトリーチという特色のある実践をされており、卒業後にひきこもりへ移行することを防ぐという観点から、とても興味深い取り組みであると感じた。

ふくしま心のケアセンターの山下先生の講義では、山下先生が実習の中で、家族支援には段階があることに気づいたというお話が興味深かった。「気持ちの吐き出し 他家族の話聴けるようになる 作戦会議」という段階を踏むというお話は、私のこれまでの支援と照らし合わせてとても納得できた。山下先生の実践ではこの家族の3つの段階の考えを元に丁寧なアセスメントと、段階にあった支援がなされており、今後支援をしていく中で参考にしたいと感じた。

研修生レポート（６）

公益財団法人 さっぽろ青少年女性活動協会 札幌市若者支援総合センター 副館長 田中 基康氏

・札幌独自の自立支援事業の取り組みで、国の事業（サポステ事業）、市の本体事業と委託事業により、まかない切れない所を双方でカバーし合っている。

・自立支援事業の利用者は５～６割は２０代で、続いて１０代の利用となっている。最近では１０代の利用が増え、若者がふらっと立ち寄れる場所になってきている。

・男女比では、６：４となっており、男性の利用が多い。

・個人宅への訪問支援（アウトリーチ型支援）の実施により、来所型支援だけでは手の届かない若者に支援の手を伸ばしたが、専門スキルを有した職員が従事するには育成とマンパワーから課題が生じた。市の事業ということでの縛りがあることや専門スキルをもった限られた人しかアウトリーチができないという問題。

・起こった後の対処療法だけではなく、ひきこもり・不登校・孤立へのリスクの早期発見と予防的効果にこそ、アウトリーチのスキルとYouth+の強みを生かしていく。その方法として、学校での「訪問面談」や若者支援施設での「施設内面談」を通じて支援につながった生徒に対し、必要に応じて各種団体との連携をサポートを実施。居場所づくり事業として若者との交流の場やミニワークショップも行っている。また、社会参加の機会としてボランティア活動への参加もサポートしている。

・キッチンカーを用いたアウトリーチは、若者がいる場（児童館、公園など）に出向いて、軽食の提供を行うとともに若者との関係作りを行っている。

・広く周知すればするほど、ひきこもり・貧困というスティグマが抵抗を生んでしまう。いかにしてひきこもり・貧困にアプローチしながら充実した事業を維持できるか。

特定非営利活動法人 沖縄青少年自立援助センター ちゅらゆい 代表理事 金城 隆一氏

・発見 誘導（アウトリーチによるアプローチ） 参加 出口 定期的な見守りを目指す。

・最近では、小学校低学年の相談が増えてきた。ニーズに合った支援の必要性。

・ひきこもり支援で大切な４つのステップ。 アウトリーチ（つながる）、面談（ラポール形成＋ニーズ・ウォンツを明確にする）、居場所（社会参加へのステップ）、ソーシャルワーク（広げる、社会接続）

・ひきこもり期間（状態も重要）と年齢が高いと支援コストが高くなる傾向が強い。

・教育と福祉が縦割りになっていて連携ができていないのが日本の現状であり、課題。

・憶測ではなく、客観的事実で捉える。情報に振り回されず、意図をもって訪問する。

・アウトリーチだけで支援が終結するケースは少ない。いかに社会資源に接続するかが大切。

研修生レポート（７）

白石先生の話では、私自身も同じような現場で働いているため、とても興味深いものだった。白石先生の「マイナスをプラスにしていく」という考え方には共感することができた。マイナスなことをマイナスで終わらせるのではなく、プラスにして返していくことを実践していこうと思った。また、白石先生の言語表現はとても分かりやすく惹きつけられるものがあり、聞いている相手が想像しやすいような配慮がされているように感じた。

山下先生の話では、過去の研修で山下先生自身が学ばれたことを端的にまとめられていたため、とても分かりやすかった。印象的だったことは、アウトリーチにおける「支援者が一人で抱え込みやすくなる」という特性だった。一人で抱え込むと支援が行き詰ったり、支援者が疲弊するリスクが高まる危険性があることを改めて認識することができた。抱え込み防止のためには日頃から支援者同士で支え合う環境を整えておく必要があると感じた。

研修生レポート（８）

過去研修生における現職の支援について、２施設から講義をいただいた。研修でどのような学びを得たか、その学びをどのように施設の特性にあわせた形で活かしているのかについて知ることにより、当施設においても今回得た学びをどのような形で活かしていくかのヒントになった。

研修生レポート(9)

この講義では、事例をとおして不登校生徒へのアウトリーチについてお話が聞けた。不登校生徒対応の中で子どもだけではなく、その家族へアウトリーチを行っていくことが必要である。子どもに相談意欲がなく、保護者のみの対応になる場合がある。援助者は相談をとおして保護者のいい変化を引き出していく。保護者自身のいい変化は、子どもの相談意欲を高めるとともに、子どもの状況改善に大きく影響する。

また講師の事例をとおして援助者同志の関係性や方針の不一致が利用者の不利益につながるということが分かった。様々な経験や分野の者がチームになった場合、お互いを尊重し、方針を考えていくことが大切だと思った。

最後に講師がなぜ子ども支援に就いたかを聞くことができ、援助側の自己開示が相手の心を開く要素になり、生き方のモデルにもなることを感じる事ができた。

研修生レポート(10)

被災者支援領域でのアウトリーチについて、支援はチームで行なうことが原則となっている。それというのも、訪問支援は支援の特性から1人で抱えこみやすいリスクがあり、そのため、2人以上で担当し、訪問は原則2人で行なう、記録を回覧する、定期的なケース検討会やスーパービジョンの実施など、担当者が1人で抱えこむことのないような環境を整えることが必要である。

またチーム支援において他職種における連携が必要となる。それぞれの職種の視点をいかしながら、本人にとって必要なケアを行なうことが望まれている。

ひきこもり支援において、家族は重要なキーパーソンであり、支援者と家族との関係性を保つことが本人との接触や関わりができるかどうかに関わりが大きい。家族もまた、状況に対してどのように対応しているのかの不安を抱えており、助言は簡潔でわかりやすく、家族が実行可能な範囲で行なうことが必要である。

研修生レポート(11)

ちゅらゆいの金城先生より、子供、若者とくに引きこもりに対するアウトリーチ支援が必要な方の特徴と、情報を収集し整理し優先順位をつけることで、アウトリーチ支援におけるアセスメントの精度が上がることを学んだ。特に、5W1Hの客観的事実を整理しチームで分析することで支援者の思いこみによる支援が回避できることが分かりました。

次に、YOUTH+センターでの取り組みを聞きました。ケースへの直接的支援は実践していないが、キッチンカーを活用してプライバシーに配慮しながら貧困家庭の子供への食事を届ける取り組みや、学校への訪問支援などで、必要な場所に支援を届けるという多様な形のアウトリーチがあり、研修で得たことを多方面で行かせることを学びました。

研修生レポート(12)

過去研修生の方々が本研修を通して学んだ事をどのようにして、所属先で展開されてきたのか、体験を基に説明して下さり、大変参考になりました。帰庁後、所属上司職員及び同僚職員への研修報告の際、活用させていただきました。

その他にも、本研修受講にあたり、必要とされる心構えや 研修参加者との交流と親睦を深め、見聞を広げる事で帰庁後の業務に生かせるだけではなく、困難に直面したときに励ましあう「仲間」の存在が、困難を乗り越える為の大きな力になっていくため、本研修で形成された人間関係も大切にしていける必要性を学びました。

研修生レポート(13)

心の支援室の白石さんとふくしま心のケアセンターの山下さんのお話を聞かせて頂きました。山下さんは、アウトリーチ研修においての学びやポイントなどを細かく話されていたので、イメージがしやすく、本人はもちろん家族にも細かな配慮が必要なのだと感じました。白石さんは、とても熱意と優しさのある方で、これまでの経験談を話されていました。「相手の人生に、関わらせて頂くという姿勢が大事」という言葉がすごく印象的で、こちらがどんなに良い支援ができると謳っても、相手を尊重できなければ繋がることすらできません。熱意だけではできない仕事ですが、それだけの覚悟は必要で、しっかり自分の心に留めておきたいです。

研修生レポート（14）

アウトリーチ研修からどのような学びを得て吸収され、現職に活かされているのかがわかり、参考になった。

特に印象に残っている講義としてご紹介いただいていた「アウトリーチ支援における心得とマナー」については、新村先生を法人に招いて新任スタッフの研修にしているとのこと、自分も受けてみたいという思いを強く感じた。

また、本人が来談されないケース、つまりはアウトリーチの前段階の準備という面で、家族支援の段階説明が具体的で参考になった。その他、一相談員としての苦悩や葛藤から、運営に関する金銭面の話題まで、率直にお答えいただき、そういった面でもありがたく感じた。

当法人でも受託運営をしているサポートステーション事業の弱みとして、単年度事業であることが挙げられており、その点をフォローするために自治体の事業として運営している点等を聞きながら、根気強く提案していくことが必要であるなど痛感した。

研修生レポート（15）

まだ実務としてアウトリーチを経験していない私にとって漠然としたイメージであった訪問支援が、どういったポイントに留意して実際の現場で進められているのか、段階的かつ具体的な説明でよく理解できた。推測や思い込みの支援で混乱を招かないよう、得た情報が客観的事実であるかどうかを整理し、確認しておきたい事項を選別することの重要性をワークによって実感した。訪問支援を行うことは人の人生に大きく関わることである、というプレッシャーを感じながらも、熱意と誠意をもって当事者やその家族と向き合っていることがリアルに伝わり、その思いに触れたことが何よりの学びであった。訪問支援を行うにあたっての「どのように」が少し明確になった講義やワークであったと感じている。

研修生レポート（16）

・アウトリーチのスタイルとして、居場所作りとセットにした形でスタートし、出口誘導とその後の見守りまでを含めてトータルにコーディネートする支援モデルが、理想的な形のひとつであること。

・「ニーズ」と「ウォンツ」の違い。「ウォンツ」の明確化と本人の「ニーズ」を引き出して、いかに社会資源につなげるかという視点。

・事実即した「見立て」の重要性。確認が必要な情報の切り分け、といった豊富な実践に裏打ちされた具体的な支援のスタイル。

・イモ虫がさなぎになって蝶になる例えはこころを打たれた。家庭の殻の中でこころの変容が起こればいいと思う。

・講師の方の熱量の高さに圧倒された。結局最後は相手に対する、支援者の真っ直ぐな気持ちの部分の勝負だなと思わされた。

研修生レポート（17）

ちゅらゆい・金城さんの講義では、事前準備に焦点を当てた上で、事前に取得できる情報の取捨選択、整理について学んだ。特に客観的な事実（揺るぎない事実）をピックアップした上で、主観的な情報（一次情報などではなく、確認が必要であったり、誰かの解釈が介在している情報）があることを把握し、確認すべき情報も精査するということは、出来そうで意外と出来ていないことのように思う。また、支援者としては本人情報をできるだけ取得しておきたいと考えがちだが、過度な収集に陥っている場合もあり、その点への留意も必要だと学んだ。

山陽小野田市教育委員会・白石さんからは、「アウトリーチは、人の”人生”に入り込むということ」という言葉をいただき、訪問支援員としての心構えを学ぶことが出来た。支援できる範囲（限界）を自分で決めてしまわないこと、「自分が最後の支援者になろう」という言葉も、たらい回しになっているケースが多い中で、重い言葉であった。

研修生レポート（18）

【Youth+ センター】

若者支援をいかに切れ目のない網の目にするのが出来るか、またいかに健全な方法でアウトリーチすることが可能であるかを学ぶことができました。特に、どこでも Youth+ 事業では、キッチンカーが地域に出向き、若者と出会う試みがなされていました。講義を通じて、対個人だけではない、地域へのアウトリーチの取り組みを知ることが出来ました。

【NPO 法人ちゅらゆい】

アウトリーチを行う前のアセスメント手法について学びました。具体的には事例を通じて、アウトリーチを行うにあたって、客観情報と主観情報の整理を行い、必要な情報を考えました。当事者の領域に入らせてもらうにあたって、適切な配慮を行うための事前準備の重要性について学ぶことが出来ました。

研修生レポート（19）

過去研修生の現職の支援に関するお話を頂き、様々な職種の方が研修に参加され、アウトリーチに対して多くの視点を持った方の存在を初めて知った。複雑に絡み合った問題を解決していくには、学習支援事業を行う NPO 団体や行政の方、就労支援のサポートステーションの方など当事者の方に多くの機関が関わり連携することが重要であると実感した。

学習支援では子どもを待っているだけの学習支援では本当に必要としている家庭や子どもには届けられないが、アウトリーチを組み合わせた学習支援を行うことで、当事者と関係性を築きながら学習支援や地域への橋渡しができる可能性を感じた。また、行政の方のお話をお伺いすることで、私の業務ではアセスメントを行なった上で関係機関である弊法人の立ち位置が具体的にイメージができ、私たちの先にある地域の機関などの橋渡しが当事者の段階的な支援をしていく上で重要であると感じた。

研修生レポート（20）

山下氏、田中氏の分科会に参加した。山下氏の講義は、家族支援、チームによる支援の二つの観点からの話であった。家族支援では、家族自身が支えられる段階、本人への共感的理解の段階、作戦会議の段階という段階を意識することが有用である。家族の情報から、本人の見立てに「当たり」をつけ、小さくつつく対応を行いながら、反応を見て、対面支援に繋がれるかをうかがう。また、訪問支援は一人で抱え込みやすくなる特性があるため、抱え込まずチームで支援に当たれるように、記録の回覧など支援内容を積極的に開示するなど組織としてシステムを作る。同時に、開示しても支えられる、建設的な意見をもらえる組織の雰囲気も必要である。田中氏の講義は学校、地域への訪問型ユースワークの実践の紹介であった。ユースワークの手法を用いてアウトリーチを予防・発見的観点から行っており、そうしたプログラムから、訪問面談や施設内での面談に繋がっていくこともある。また、支援という入口では繋がりにくい若者であってもユースワークという枠組みであれば参加しやすいことも利点に挙げられる。

「各団体におけるケース演習」

研修生レポート（1）

4 団体どの団体も実践的なアウトリーチの手法、また、独自のリスク管理や、研修生でのロールプレイングと、幅の広いアウトリーチに対するとらえ方を学ぶことができました。

青少年自立援助センターの演習では、実際に引きこもり役と支援者に分かれ、互いの役割とクライアントの気持ちを理解する演習が行われ、自身は引きこもり役で演習をしましたが、引きこもる側から聞く支援者の声、そこに対する不安や驚きを感じることができました。

Sorae の演習では、支援者側の心の持ちよう。自身はいったいどんな人間なのか、今日の心理状態はどうなのかと、自己理解の大切さを学ぶことができました。

宇奈月自立塾演習では実際のアウトリーチでの経験談や危険性事前準備にしておくことなど、アウトリーチに際しての心構えや手法を教わりました。

研修生レポート(2)

4つの演習を通して、アウトリーチの流れの他に支援者としての心得を学んだと感じている。

アウトリーチ開始直後、当事者にとっては支援者そのものが侵襲性のある脅威の存在になり得ると、グループワークの研修生の反応から考えさせられるものがあった。個々で反応は異なると思われるが、支援者は「当事者の安全を保障する存在」だと具体的且つ地道に伝え続けることは、開始直後に限らず当事者に寄り添う上で欠かせないと感じた。また、当事者を情報で知るだけでなくどのような感情を抱いているのか、見立てとして思いを馳せることが信頼関係の形成に繋がると思った。普段の業務の中では感情移入し過ぎず、当事者の感情や状況に巻き込まれないよう留意しており、線引きした対応をすることもある。その中でもどかしさを感じる場面も多々あるが、立場上「できること」「できないこと」を明確にしておくことは当事者支援者間の関係を継続する上で必要だと感じた。

「自分自身を知る」に関しては、正直なところ怖い作業だと思う。ただ、パーソナルスペースに踏み入れられる恐さを体験する上では貴重な作業にもなる。自分の特性を知ることによって得手不得手が分かり、不得手なことも技として使える可能性は大いにあるので、実地研修までに自己分析を進め、実際周囲の反応も聞いてみたい。そして、引きこもりを受け入れることと引きこもり続けることを防ぐこと、状況転換へのアプローチの難しさは普段の業務でも感じるため、実地研修でヒントを得られたらと考えている。

研修生レポート(3)

宇奈月自立塾の牟田先生のケース演習で、自分が関わったことのあるケースに似ている事例検討については、つなげる外部機関やつなげ方がある程度想像することができました。しかし、進学を希望しているケースなど今まで関わったことのないケース事例については、自分の中にある外部機関の情報が薄いことに、改めて気づきました。また、家族もそうですが、当事者との関係性を築く中で、“仕方ないな、この人の言うことなら聞いてみようかな”と思わせられるかどうか、次へのステップに進めるかどうかの要になると学びました。

子ども若者みらい相談プラザ sorae の仲間先生のケース演習で行った、面談室とアウトリーチでそれぞれわかる事・わからない事を書き込む作業では、面談室でわかる事とアウトリーチではわからない事が共通していること、面談室でわからない事とアウトリーチでわかる事が共通していることがわかり、ひきこもり支援をする上ではどちらか一方だけでは必要な情報が得られないことを体験しました。

ピアサポートネットしづやの石川先生のケース演習で、事例の中の対象者からの投げかけに対する返し方を考える場面では、自分は相手の考え・捉え方をまずは確認することから始めると回答しましたが、グループのメンバーは支援者の限界を先に相手に伝えることから始めると回答し、それぞれの経験や立場の違いから、返し方が異なることがわかって面白いなと感じました。

後で振り返り事例概要を見てみると、対象者は失敗体験を繰り返しながらも居場所につながり、再びひきこもり状態になっても、どの時期においても就労に向けた準備をしようと行動しているところに、対象者の良さがあると気づきました。対象者が持っている力を信じ、引き出せるように関わることが大切であると学びました。

青少年自立援助センターのケース演習でのロールプレイでは、ドア越しに趣旨伝達～情報提供するところを、ひきこもり当事者として壁の向こう側で聞きました。支援者役をしてくれた仲間の話し方が、ゆっくりで丁寧だったため、誠実さが伝わり安心できることがわかりました。反対に、支援者の話すペースが速かったり間をおかずに話をしたり、ドアの叩き方が強かったり、声が大きいと、ドア越しにいる当事者はびっくりするのではないかと感じました。ドア越しにアプローチをかけた経験がないため、今後の支援の参考にしたいと思います。

研修生レポート（４）

【Sorae 子ども若者みらい相談プラザ】

行動規範にあるように『まずは受け止める。たらい回しにしない』全ての悩みを受容する相談窓口でありつづけること。相談者の主訴の中に隠れている要因を見分けて見立てること。また、支援者自身の自己理解が大切になり、自分自身の心の状態を知っておくことも大切なこと。（全員でエゴグラムをやってみたが殆どの人がNP＝愛性の心、優しく保護する心が高かった）アウトリーチの実践では、本人の状態に合わせて、会えなくてもよいので1年間は継続訪問を実施している。その中で、どうすれば、5分（少し）でいいから会ってもいいかな、を目指し家族面談の中で情報収集をしていること。

【ピアサポートネットしぶや】

事業名のとおり「ピア」は仲間、対等に支え合う体制である。相談ケースは様々ではあるが、家族が希望すればアウトリーチは実施している。本人と会える・会えないは重要ではなく、目の前で困っている状況にある家族支援であるとのこと。第三者のかかわりが現状を変えていけるということ。

【NPO法人 青少年自立援助センター】

ひきこもりの専門支援で40年の実績のある団体。立ち上げ当初は、地域で誰でも来れる塾を作ったことが始まり。

アウトリーチの基本的な考えは、本人に会える、会えないことは問題ではない、本人のために周りが動いていることを遠回しに伝えていくことが大切とのこと。親と面談して帰ることが大きなメッセージとなっていること。

【特定非営利活動法人 教育研究所】

ひきこもり状態が続くことは、よくない状態になる。本人には回避したい理由があるため、そのところ解きほぐして丁寧な対応と対話で本人の気持ちが「しょうがない（あきらめ）そこまで言うなら（渋々）いいよ」と納得をしてもらうように対応を心がけているとのこと。

研修生レポート（５）

「介入の導入」

導入の段階で訪問する理由や狙いなどを対象者から見て筋がとおった内容で丁寧に伝えることが大切である。対象者の相談意欲がなく、保護者の依頼のみである場合に保護者がなぜ第三者にお願いしたのか、なぜ第三者の介入が必要なのかの根拠を伝えることが必要である。それらのプロセスをとおした時、援助者と対象者の関係作りはもちろん、達成する目標や取り組む内容を明確にすることができると分かった。また導入の段階では援助者が想像力や五感をフルに使い、対象者との距離を縮めていく工夫が必要であることが分かった。

「介入」

介入において援助者と対象者の関係作りは大切だが、単に仲良くなるために介入するわけではない。援助者と対象者の共依存を避けるために、取り組む内容を明確にすることや取り組む期限を区切ってあげることも必要になる。

「面談室とアウトリーチ」

対象者の情報収集において面談室（来談）とアウトリーチ（家庭）の違いについて考えることができた。アウトリーチがより踏み込んだ形で情報収集できるためアウトリーチがより有効だと思ったが、面談室だからこそ分かる情報がある。援助の中で総合的な情報収集の必要性を改めて感じた。

研修生レポート（６）

（１）特定非営利活動法人 ピアサポートネットしづや 総括リーダー 石川 隆博氏
・支援者は情報を収集した後どう考えてどう行動するかで、１つの事例を通して３つの場面に分けて演習を行った。

１．本人の言葉そのものに反応するのではなく、その言葉の真意や背景を読み取り、それに対してどう行動するかが求められる。

２．母の考えと子の考えのズレを調整することも支援員の役割。

３．拒否している本人へすぐにアプローチするのではなく、母親との関係性を築くことから始め、本人が外へ出てきたくなるように本人にも徐々にアプローチしていく。

（２）特定非営利活動法人 青少年自立援助センター 常務理事 河野 久忠氏

・基本的に対象者は３０代までで、２０代～３０代が多い。ゴールは就労なので、年齢が高くなればなるほど使える資源が減ってくる。４０代～５０代だと就労に向けてではなく、地域への参加を目指す。

・インテークから訪問導入期における基本対応フローとして、対象者の合意が得られないとき、家族との面談を繰り返し、家族に方針理解をしていく。やっていく中で家族に迷いが出て足並みが揃わない時が生じたら、さらに家族との面談を繰り返し足並みを揃える。

・家族による対象者への趣旨伝達ができたらタイミングを見て訪問を開始。ドア越しの声かけで訪問に来た意図を伝える。

・動きが止まっているのがひきこもり。現実をみないようになっているのを考えを再開させるきっかけにする。

・環境を変えていくしかないということをもとにして、観念させて自己決定を促す。

（３）特定非営利活動法人 教育研究所 宇奈月自立塾 理事/寮長 牟田 光生氏

・事例を通して、支援者としてどうアプローチするかそれぞれで考え、意見を出し合って検討した。

・それぞれの見立てや視点が違うところがあったり、社会資源や関係機関の情報が得られ参考になった。

・本人の主訴を聞いていくためのアウトリーチもあるが、家族関係の調整のためのアウトリーチもある。

（４）子ども若者みらい相談プラザ sorae 統括責任者 仲間 玲子氏

・面談室でわかることわからないこと、アウトリーチでわかることわからないことをみんなで出し合い分析することで、面談室とアウトリーチの相談の違いについて改めて考えるきっかけになった。

・普段意識せずに使い分けていたが、双方のメリット・デメリットに気づくことができ、今後意識して使い分けるヒントになった。

・エゴグラムにより自己理解を深めた。支援者として自分の得意・不得意、くせなどを知ることによって、対人関係においてどこを改善すれば円滑になるか気づき、リスク回避につなげることができる。

研修生レポート（７）

アウトリーチを実践されている方々からの講義と演習は学び多いものでした。アウトリーチ支援を実施することにおける利点と注意点を中心に講義を進めていただきました。研修も３日目となっていましたので、基本的な知識と留意点は理解してきたところでした。その中で、事例に沿って演習を行っていただき、多くの擬似的失敗体験を経験する事となりました。この結果から、知識だけではなく経験を積み重ねていく事の重要性を学びました。

本職の私見として、３日間、集中して各講師から講義を受講し、知識を積み重ねていくうちに、「学んだ事を現場で実践したい」との気持ちが強くなってきました。しかし、本講義で自身の力不足と経験不足を体験する事で、改めて、学んだ事を実践することの困難さと自己研鑽を積み重ねていく事の大切さを学びました。

講師の先生方も、研修生の経験と知識の不足を前提に講義と演習を進めていただき、段階を踏んで演習内容の難易度を上げていただいたおかげで、各演習で手順を追って質問させていただくことができました。

研修生レポート（８）

河野氏（青少年自立支援センター）による、長期化する引きこもりについての講義が大変参考になった。「本人のエネルギーが溜まるまで待ちましょう、そのうち動き出しますよ」という助言によって引き起こされる状態を“奇妙な平和”と呼び、長期化する引きこもりに対するアプローチについて、待つだけでいいのか？と疑問を投げかけ、アウトリーチにつなげる。当事業所でも、親御さんだけの相談で長期化しているケースが存在するが、その多くが“奇妙な平和”な状況下に置かれている。親御さん自身が、現在の状況を打破しようという意欲を高めるところからスタートしていく必要があるのだなという、アウトリーチを実行する前段階での準備、家族支援の重要性を学んだ。

ケース演習では４団体の支援方法を学んだが、どの団体においても重要なのだなと感じたのは、アウトリーチを実行する前の準備であるという点であった。それは、前述した家族支援に加えて、支援者である自分自身が自分のことを把握しておくこと（自己理解）も含まれる。アウトリーチは支援者自身が抱え込みやすい特性がある（負荷が高くなる）とのこと、自分自身ができることとできないこと、限界について常に意識を保って支援をしていくことが、アウトリーチという、相談室での面談支援よりもリスクが高い支援を安全的に行う上で必要なことであると感じた。

研修生レポート（９）

Sorae の仲間先生の講義では、sorae では週２回アセスメント会議を実施し、職員で情報を共有し意見交換をして見立てをしていく場を設けており、一人でケースを抱え込まないような体制をとっていること、また、アウトリーチにおける危機管理規定を定めているということを知った。「組織で支援をする」ことで、自立までの道筋を支え続けることができるのであると感じた。演習では、アウトリーチと面談室での相談の違いを考えたのだが、今までとは違う視点で相談のありかたについて考えることができた。また、「自分を知る」ということで、エゴグラムを実施した。エゴグラムの分類を意識することで、自分を知るだけでなく、相手を知り、より良い関係性について考えるツールとなりえることを知り、今後の支援に活かしていきたいと感じた。

ピアサポートネットしづやの石川先生の講義では、専門的な知識を持った職員の支援と、ピアの支援を組み合わせるという支援方法が、今まで私が考えていた専門的な支援者主導の支援とは異なり、新たな学びとなった。演習の中でも、「支援する側・される側の関係性を崩していく」ことで、「人の役に立てる」という自信を高め、自立へ繋がるというお話があり、関係性について留意しながら支援をしていく必要があると感じた。

青少年自立援助センターの河野先生の講義では、「ひきこもりの高年齢化・長期化のスパイラル」のお話が大変参考になった。私が支援をしているケースでも、保護者との関係を築くことが難しいと感じているので、今回学んだことを支援に活かしたいと思った。演習のロールプレイでは、支援者の役をしたのだが相手の表情や動作が読み取れない状況でどのような声かけをするのかに難しさを感じた。ひきこもりの役の方からは、「きれいごとには聞こえる」など、当事者の側に立った率直な意見をもらい、当事者の気持ちを想像し、丁寧なことばがけが必要であると感じた。

宇奈月自立塾の牟田先生の講義では、計画なくやみくもにアウトリーチをすることの危険性についてお話があり、まずは事前の情報を家族などの周囲の人から聞きだし、アウトリーチを実施する場合、どのような危険性があるのか、その危険性はどのようにしたら回避できるのかを検討してアウトリーチを行うことが必要であることを学んだ。演習では、事例からどのような支援ができるか、どのような機関につなぐことができるかを考えたのだが、他の研修生と共有をすることで、自分だけでは考え付かなかった方法があることに気付き、ケース検討の必要性を痛感した。

４つの施設の講義と演習を受けて、それぞれの施設の特徴があり、支援についての考え方は異なるが、対象者の把握から自立まで一貫して支援を続けていくという共通点があると感じた。自立までを見届けるような支援を今後私もしていきたいと思った。

研修生レポート(10)

それぞれの団体ごとにグループワークの方法が異なり、アウトリーチで必要なことを学ぶことができた。

日頃、私は44歳男性のひきこもり事例などのようなケースには関わる機会がない。そのため、どのような支援をするべきか、どのような制度が適用できるのかなどを考えることが難しかった。しかし、同じグループ内にさまざまな職種の受講生がいたため、どのような支援が考えられるのか知ることができた。他職種で話し合いをしていくことの重要性を感じることもできた。

アウトリーチと相談室でそれぞれ分かること・分からないことをまとめる作業では、お互いに対局であることを理解することができた。それぞれのプラス面やマイナス面を知り、それを意識することも大切であると思う。アウトリーチをして、家での生活・過ごし方・家族とのやり取りなどを知ることも必要だが、外に出たときの様子・家族以外の他者との関わり方なども支援を考えていく上で必要になってくると思う。また、支援をする上で、支援者の自己理解を深めることも大切なことだと学んだ。

チームで話し合っって一つの支援計画を考えていく過程では、それぞれに意見を出し合っっていく中で、どのような支援をしたほうが良いのか迷ってしまった。情報が少ない中では、支援を決定することが難しかったが、支援を考えていく上でどのような情報があれば良いのかを考えることができたように思う。

最後のグループワークでは実際の訪問を想定したロールプレイをした。当事者としてホワイトボードの後ろにいたが、ノックをされたときの驚きや当事者の戸惑いなどを実感することができた。私はアウトリーチをしたことがないため、このロールプレイで初めての訪問でどのようにアプローチをすればよいのか考えることができた。

研修生レポート(11)

ケース演習では、チームでケース検討を行う必要性と重要性について学びを深める機会となりました。

ピアサポートネットしづやさん、NPO 法人教育研究所さんのワークでは、事例を用いてグループで支援方針の共有を主に行いました。実践団体の対象や役割によって、様々な支援アイデアが出されたことが印象的でした。sorae さんからは、面談室での相談とアウトリーチで分かること、分からないことをグループでまとめ、エゴグラムから自己理解を深めるワークを行いました。日々の実践のなかで得た感覚や知識を、常に言葉にし続けることは難しく、漠然とした実践知の積み上げで終わっていることもありました。ワークを通じて、自分自身の支援の根拠や視点を言葉にすることで、漠然としていたものを具体化する機会となりました。また、実践知を言葉にして具体化するという点では、NPO 法人青少年自立援助センターさんの、訪問フロー図が印象的でした。フロー図では、訪問の目的をどう伝えるか、次回アクションをどのように設定するかなど、個々のケースによって変化させていくものの、一定の知識としてまとめられていました。

知識を深め、より柔軟な支援が展開出来るように、日々の実践を言葉にしながら、より豊かな支援を模索していきたいと思えます。

研修生レポート(12)

まず、各団体の事業概要を知る中で、団体によってカラーはあるものの、体系立てられたシステムと各団体や各事業における活動の範囲を明確に整えていることが認識できた。訪問支援だけにフォーカスするのではなく、当事者を状況や段階に応じて適した事業や資源と結びつけることで社会から当事者を孤立させないということがひきこもり支援における一つの目的として一致していたように思う。ひきこもり支援の課題点やリスクなどについては河野氏のお話が非常に明快で、インテーク時の丁寧な聞き取りがその後の支援を左右するほど重要であることや、見立ての時点で医療の介入の必要性を意識することなどポイントが分かり易く盛り込まれていた。ケース演習では、実践を意識したワークが用意され、得るものが多かったと感じている。例えば、訪問と面談の支援で得られる情報の質や量の違いを表で客観視することで、情報量の多い訪問支援では情報整理や事実確認を行うことの重要性がより認識された。実際にロールプレイを行った際には、想像上ではあるが、当事者の不安定な精神状態に共感することができ、今後支援を行う上で貴重な体験ができた。

研修生レポート(13)

ケース演習では、実際に事例を元に複数人で本人の状態像や今後の支援の方向性について検討を行なった。それぞれ研修生の現職での支援や職種により、注意を向ける箇所は異なっており、他職種で一つのケースに携わることで、幅広い視点から相談者を理解することにつながることを学んだ。

また、本人からではなく、面談をおこなっている家族からの聞き取りや情報の場合、「本人は〇〇と思っている」という言葉の中に親の期待が含まれている可能性があり、本人の意志がどこまで反映されているのかを考えることも必要であると思われた。

アウトリーチを行なうことは、従来の相談室での面談に比べると、本人の生活環境や、家庭環境、家族構成、家での様子や家族との関わり方についての情報を得ることができる。

一方で、支援者が相談者の元に訪れることで、本人の来談意欲(相談意欲)や社会性(対人場面での様子や交通機関の利用、外出時の様子)が見えにくいデメリットも考えられる。そのため、アウトリーチを行なうことでのメリット、デメリットについても理解しながら行なうことが大切である。

また、本人への支援を行なう中で、支援者自身が自分を理解することは重要である。支援者自身が自分を理解し、くせや考えの傾向などを把握していることでよりよい支援につながると思われる。

研修生レポート(14)

・講義では、soraeの仲間先生より、一つの分野だけでなく、教育、医療保健分野とも連携をとられ、包括的に支援できる体制が必要であることを学んだ。更に支援者へのサポートも含め、危機管理が必要とのことに共感した。実際、職場でも危機管理のチャートを作成しており、先生からは具体的な内容を更に教えていただき、危機だけでなく、支援の流れも含む危機管理をスタッフで共有されているようで、書式など職場で生かすことが出来ると思いました。そしてピアサポートしづやの石川先生は必要な支援に応じて資源を活用し地域のネットワーク、地域づくりされていることを教えていただき、地域資源と協働していく必要性を学ぶことができました。牟田先生の講義で、「交流を続け、その中で説得ではなく対話から納得してもらうこと、話を聞いたという状況を作っていく」ということを聞き、通常行っている対応について、説得することがあると気づくことができました。実践で行うことは難しいかと思いますが、この気づきを活かしていきたいと考えています。

・次にワークから学んだことです。通常アウトリーチ支援をしている中で、アウトリーチのメリット、デメリットの説明はできるものの、アウトリーチや面接室で「分かること」「分からないこと」を問われ、今まで考えたことがなかったことであり、情報収集するうえでの視点として、より具体的になることを学びました。そして、チームで分析していくうえでも多様な見方が必要であり、自分自身の傾向をすることで思い込みや偏りに気付くことが出来ました。

・グループで事例の方向性やアプローチを話し合うことで、様々な価値観、考えがあり、アプローチ方法が深まることが分かりました。

・引きこもりの方のロールプレイをし、自分が行っている支援の振り返りすることが出来ました。通常ドア越しに話すことが多い中、周囲の様子に過敏になることや、「早く帰ってほしい」と思うことを感じる事が出来た。簡単にできることですが、今までしてこず、今後、振り返りの際など、ロールプレイして支援方法を、修正できるのではないかと感じました。

研修生レポート(15)

各団体の皆さまの事業紹介や演習をしてみて感じたことは、同じアウトリーチという支援においても、それぞれの団体でカラーが全然違っているなと思いました。自立という目的は一緒ですが、それまでのプロセスで何に重きを置いているのか、自分がどういった支援を行いたいのかを改めて考えさせられました。

実地先の担当者の方とお話出来る時間を頂けたのは、不安が軽くなりましたし、自分の目的を再確認しモチベーションをあげることもできたので、とても良かったです。

研修生レポート(16)

・ひきこもりのタイプが人の数だけあるように、支援のスタイルも様々であることが分かり興味深かった。それぞれの団体が長い歴史の中で、現場での試行錯誤の中からスタイルを確立されていた。

・学校の不登校でのひきこもりと、長期のひきこもりとでは難しさの質が異なるということ。

・アウトリーチ活動の難しさ(醍醐味?)は、訪問を開始するにあたって、対象者本人が合意するケースがまずないこと、訪問しても初回から会えるケースはまずないところからのスタートであること。本当は来てほしくない当事者とどうやって関係を築いていくか。

・今後高齢の両親が亡くなった後に長期のひきこもりが表面化することが予想されること。

・複数の目による「見立て」の重要性。

・ストレングス視点による声掛けがどんなものか、を事例を検討することで実感することができた。

・アウトリーチが家族支援であり、家族関係の調整である、という視点。当事者本人だけを見るのではなく、周りの環境にも働きかけていくという視点。

・コーディネーターとして、内部の調整役を果たすと同時に外部とつなぐ調整役でもあるという役割。

・26日と同様、各ケース演習を通して、最後は熱量の高さが相手を動かすのではないかと、思った。講師の方は皆さんとても高い熱量で当事者の方と関わっておられた。その部分を抜きにアウトリーチは語れないと感じた。

研修生レポート(17)

子ども若者みらい相談プラザ sorae さんの講義では、「アウトリーチでみえるもの/みえないもの」「来所面談でみえるもの/みえないもの」の整理をワークショップ形式で行った。アウトリーチはともすれば、万能論的に感じてしまい、「とりあえず、アウトリーチすればわかる」と考えてしまいがちだったが、来所面談だからこそみえるクライアントの一面があるということに改めて気づくことが出来た。本講義や他の講義でも共通しているが、「当たり前」と思っていることを改めて可視化したり、言語化することによって、学びとして掴み取れるものが多く、こういった機会を内部で定期的にもつための仕組みを考えたいと思った。また、エゴグラムについては大学院などで学んでいたが、今回の研修で改めてツールとしての有効性を感じることが出来たため、支援現場に生かしたいと思った。

青少年自立援助センターさんの講義では、色んな意味で自分自身の従来の感覚とのギャップに葛藤を強く感じた。本人に訪問の目的を明確に伝えることや、選択を迫るような働きかけをすることなど、正直なところ自分自身の支援感覚としては抵抗も大きく、疑問を感じる部分も当初は多かった。しかし、この方法も万能ではないということ(これは他の方法も含めて)を、支援者・保護者の双方が理解し、合意した上での支援であればということで、腑に落ちる部分があった。逆に言えば、支援者が勝手に線引きをしてしまっているだけで、より強く踏み込む形での介入もあるのだということ、知ることができ、自分自身で支援の限界を決めつけていたことにも気づくことが出来た。

研修生レポート(18)

事例検討、グループワーク、ロールプレイなど様々な形で演習をしていただいた。

事例検討では、当事者の課題や問題にばかり目を向けてしまい、ストレングスの視点でアセスメントすることの難しさを体感した。また、色々な職種や立場の方がいたため、その方たちから意見を聞くことにより、今まで考えてもいなかったような支援方法や視点に気づくことができ、自身の成長にもつながった。

ロールプレイでは、初回訪問の場を設定し、私は当事者役をした。当事者役を疑似体験することにより、支援を受ける側の気持ちや感情を体験でき、非常に良い体験となった。ロールプレイをしてみて初めて、「当事者の気持ちをゆさぶる」という言葉が理解できたように思える。

グループワークでは、面談室とアウトリーチの「できること・できないこと」についての違いをグループでブレインストーミングをし、カテゴリー分けをした。これまで、そういった視点で考えたことがなかったため、新鮮な体験であった。きちんと、「できること・できないこと」を見極めたうえで、どういった支援が適切かを考える良い機会となった。また、仲間先生が「あえて、メリット・デメリットではなく、できること・できないことにした」とおっしゃっており、言葉の使い方ひとつでも考え方や捉え方は全く変わることを感じた。

研修生レポート（19）

本研修では訪問に来た方へのアセスメントや、支援計画などの具体的な内容を学ぶことが多かったが、私個人の日常業務の中ではこのような経験がなかったので、連携している機関がどのような動きをしているかが分かっただけでも非常に大きな収穫であった。どのワークも私にとっては非常に有意義なものであった。まず一つとして、当事者の相談支援を行う際には相手を見がちであるが、その相手を見る自分自身を知ることで相談支援に活かすということである。自分の特性を知ることによって自分の行動や言動の特徴を捉え、心のバランスを知り、どのように本能と理性をコントロールしていくか、また対人関係においてどこを改善すれば円滑になるかに気づくための基本となる。

二つ目にアウトリーチの良い点やわかることなどを相談室と比較して要素を出すワークでは、普段相談室での相談を受けていないので、全く初めての体験であったが、相談室と比較することでアウトリーチの効果や強みなどを改めて知る機会となった。例えば、面談室でわかることは本人の意欲であったり対人関係、社会的適応能力などを服装や面談室まで訪問したことで分かったりすることに対して、アウトリーチでは当事者の生活圏内に入っていくので、当事者の生活環境や家庭環境、家族構成や生活状況など私生活の情報が多く収集でき、当事者の主訴などの手がかりとなる。これらの相違点を知ることで、アウトリーチの効果を変更することができた。

最後に、ひきこもり当事者に対する声かけのロールプレイでは、引きこもっている状態の当事者役を務めさせてもらい、自分自身は引きこもっている人の気持ちになることは難しいが、実際にそのような状況をシミュレーションとして行うことで、普段の自分の行動に対して客観的に見る貴重な機会となった。また、当事者役を務めることで、少しではあるが当事者の気持ちを想像することができた。当事者が何をどのように感じるかは個別ケースによってしまうが、声かけの一言一言は当事者の受け止め方によって、悪い方にも転んでしまう危険性があることに気付いた。面談を果たすまでの言葉選びは自演準備を行い、当事者に最大限配慮をしながらアプローチしていく重要性を学んだ。

研修生レポート（20）

仲間氏の演習では、面談室とアウトリーチそれぞれの相談形態において分かること、分からないことの違いを考えること、エゴグラムを通じて自分を振り返ることを行った。どちらも日常の支援の中では時間をとって考えることをしにくい、それらを整理しておくことは支援の留意点や方針を考えることにも寄与する。相談形態の違いについては、一方で分かりにくいことがもう一方では見えやすいなど、それぞれの形態が相補的な関係にあることがわかった。また、エゴグラムなどを通して自分の傾向を知っておくことは、普段の考え方関わり方の偏りについて内省することにもつながる。石川氏の演習では、事例に対して、どのように対応できるかグループで話し合っただけで一つの結論を出した。一人で考えるよりも多くの観点からアイデアがでるとともに、異なる考え方が出た場合は話し合っただけでは折り合いをつけないといけない。チームで支援に当たることの強みと難しさを再確認できた。菅野氏、権藤氏の演習では、訪問する支援者と訪問を受ける当事者に分かれてロールプレイを行った。相手の反応が見えない中でどのように声掛けをするかいいのかが分からず、対面できない難しさを感じた。その分、NGワードや言葉遣いなど事前の準備を丁寧に行っておくことが必要であった。一方で当事者役はどんな人にどんなことを言われるか警戒していたようで、何に反発を覚え、何が受け入れられるかフィードバックを受けることで理解できた。牟田氏の演習では、事例に対してどのような社会資源が準備できて支援できるかをグループで話し合った。事前準備としてグループでいろいろな角度から検討をしておくことが、実際に支援を開始したときにも対応の幅も広がりうまく展開することにもつながるといえることがわかった。また、自身の考え方や知っている社会資源の限界も相対化して知ることができた。

研修生レポート（１）

今回の講義を受けるまで、子ども・若者育成支援推進法について、事前にユースアドバイザー養成プログラムの中で読んでいたものの、ちゃんと解釈できていませんでした。今回の講義を受けて初めてこの法律ができた背景や目的、また、個別分野の知見や施策を結集して困難を有する子ども・若者を総合的に支援するネットワーク作りを目指していることを学びました。と同時に、東京都の施策についても調べるきっかけとなり、都では平成26年3月に、東京都子供・若者支援協議会設置要綱が施行され、その構成機関の一つに、実地研修先の団体である特定非営利活動法人青少年自立援助センターが入っていることを、初めて知りました。

相談窓口と支援機関が別の組織の場合、情報共有がうまくできないことや、たらい回しになり、支援のタイミングを逃してしまうこともあると思いますが、SSFの場合は、子ども・若者を総合的に支援するネットワークの中で、総合相談センターと指定支援機関の両方を担うことで、ワンストップ相談サービスが実現できていることに驚きました。

大島町の体制を振り返ると、町の中の保健・福祉・教育分野の専門職の協力関係のもと、相談窓口を置き、経験不足ながらもアウトリーチや関連支援をしていますが、障害サービスの申請等窓口担当者との情報共有がいつもできているわけではなく、ワンストップサービスを提供できているとは言えません。うまく情報共有できるように工夫していく必要があると感じました。

また、大島町には社会資源が少なく、居場所につながってもその先の社会経験を積む場が少ない、という課題を抱え、地域でできることの限界を感じています。講義の中でSSFでは、多くの関係機関が存在する中で情報の一元化を図り、緩やかな連携を図りながら、組織的・地域的限界も真摯に受け止め、全国的な視野で解決する支援体制を構築していることを知りました。自分の地域だけで解決することに拘らず、他の地域の資源にも目を向け活用する柔軟さも必要であると学びました。それとともに、地域内の資源についても改めて調べ、緩やかに連携できる関係性を築くことも重要であると感じました。また、職親制度の話のところで、認知的な偏りを修正するための「必要経験」にターゲットを絞りプログラム化すること、経験を伴いながら段階的にステップアップしていくことが重要であることを学びました。すべての仕事に価値があることを支援者自身が認識し、住民の理解を得られれば、地域内での職親制度によるトレーニングも可能かもしれない、という考えを持てるようになりました。

居場所につながっている対象者の今後の支援方針を考える時に、その対象者について支援者が持っている情報がそれぞれ違い、方針を立てにくいことがあります。支援者の共通認識を図るために、日常生活動作やコミュニケーション能力を項目ごとに分け、段階評価をしてみようと考えているところでした。講義の中で紹介された「FDP」は、他機関が共通認識し、チーム支援を円滑に進めるためのアセスメント指標で、短い言葉で表現されていて、わかりやすく、活用してみたいと思いました。また、要対協のケース会議など他の会議でも使えるのではないかと思います。

研修生レポート（２）

講義では、家族に対する支援と支援者として家族にどのように働きかけてもらうかという話が聞かれた。訪問支援において当事者の同意を得られることは望ましいが、必ずしもそうとは限らない。家族の心情を思えば、焦り、不安、葛藤と様々な感情が混在しており、事例のような事態になることも十分に考えられる。当事者と共に支援者の安全を保障する上で、見立てと家族との取り決めが非常に重要になることを学んだ。普段の業務の中で依頼を受けた際、当事者抜きで話が進められることや訪問支援の必要性を把握していない支援者も中には存在する。同意を得るに至らなくてもきちんと説明責任を果たすこと、何故訪問支援が必要とされるのかを当事者と一緒に考えることは当事者自身が今後について考えるきっかけになると支援者間でも周知していきたいと思った。また、直接訪問支援に関わる前でも当事者や支援者に、訪問支援の概要説明の他、様々な情報提供を行うことは可能であるため自身が協力できる場所は積極的に関わっていきたい。

谷口先生自身の活動内容を伺い、自分にどこまでできるのか期待と不安の両方が膨らんだものの、それぞれの立場でできる関わりをという言葉で整理がついたように感じている。自治体と協働体制を取る地域やそれぞれの事業所でシステム体系を確立し活動する事業所があることも、恥ずかしながら今回の研修で初めて知ることができた。自身の職種や所属、他職種他機関、そして地域の特性を知る 生かす 補い合える関係性を普段から持つを意識し、当事者にとってより安全を保障した関わりを提供していきたいと考えている。

研修生レポート（３）

まずは谷口代表の圧倒的な知見の広さ・行動力・リスクマネジメント、組織運営力、連携体制の確立・・・数えるときりがないほどの個人の人間力の高さに驚かされました。

特に自身のアウトリーチの支援方法を具体例や映像、パワーポイントと工夫を凝らした説明によりより繊細で鮮明な映像として頭に焼き付いています。

特にうらやましかったのが、民間団体におけるフットワークの軽さでした、自身は行政に所属しているため、アウトリーチに対するアプローチでは、越えなければならない行政の誓約が多々あるため、谷口代表と志は同じでも支援の方法や機会、攻め方にどうしても後手に回ることがあり、今後の行政団体でのアウトリーチ支援の課題を垣間見ることが出来たのが大きな収穫でした。

また、自身ではどうすることが出来ない際に事前の役割分担や支援ネットワークを形成し、アプローチをかけることが、セーフティーネットを張るうえでも大切だと感じました。

研修生レポート（４）

本講義では、アウトリーチには丁寧な情報収集と事前準備が大切であることを学んだ。また、谷口氏の数々の実践の資料や映像から「どんな境遇の子ども・若者も見捨てない」との熱い心が強く伝わってきた。

谷口氏の講義の中で印象に残ったのは、訪問対象者に対して接触できる限られたチャンスを活かして次に繋げるために、訪問対象者の興味・関心事にここまで心を砕いて配慮している努力に感動をした。更に、専門分野の有資格者とともに協力を得て様々な角度からケース検討し対応していること。訪問対象者は大人に対する拒絶感や警戒感が強く、どんな関係性であれば受け入れてもらえやすいのか？「どうせ誰もわかってくれない」との強い感情（猜疑心）に対し「この人ならわかってくれるかも」が大切だと改めて痛感した。訪問対象者と此方が価値観のチャンネルを合わせ「本人の興味関心を共有する」ことが大事な部分であること。

他機関との連携は異文化連携であり、各機関が「限界を補う」ための連携共働体制であること。

前期研修を終えて、現在関わっている支援対象者に対し、此方がもう一度アセスメントを丁寧に確認し想像力を湧かし、本人の苦手意識やトラウマを強めることのないようにストレスに配慮した支援を実施していきたいと考える。

研修生レポート（５）

とても濃い内容の講義で、アウトリーチについて深く学ぶことができた。

まずは、訪問をする前に行う事前準備の重要性である。事前準備をしっかり行っておかないと訪問した際に、うまく当事者と繋がるができない。どういう存在だと当事者が受け入れやすいのか、訪問の時間帯、家族がどのようにして同意を得たか、同意を得たときの状況などを詳細に聞くことなど、訪問をするときに必要な情報を得る。日頃から相談業務をする上で、様々なことを想定して情報収集をしたことはなく、得た情報についても何となく取捨選択をしていたように思う。得られた情報に無駄なものはなく、その情報を活かしていくためには様々は視点から考えていくことや、その情報をもとに丁寧な配慮をしていくことの大切さを学ぶことができた。

行政機関として相談業務を担っているが、関係機関との情報共有の難しさや、ケースに対する認識や捉え方がバラバラで統一できていない場合も考えられる。

しかし、Five Different Positions(FDP)を活用することで、支援者間で統一していくことができ、当事者にとってより良い支援を行っていくことができると思う。

「関係性の構築」についても学ぶことができた。どんな支援でも、必ず「関係性の構築」が前提となる。「専門性も当事者から一定の信頼を得られなければ発揮できない」という先生の言葉は、改めて「関係性」について考えさせられた。長年ひきこもった当事者と関係を築いていくことの難しさや、そのためには当事者の価値観とチャンネルを合わせること、必要に応じて別の支援者の手を借りることなど、枠組みに縛られるのではなく、柔軟な考え方で支援をしていくことが大切であると感じた。そのためには、日頃の生活の中で支援のヒントになるようなことを意識して考えていき、自分自身の引き出しを豊かにしていくことが必要だと思った。

研修生レポート（6）

- ・社会的孤立・排除された子ども・若者は、従来の枠組みでは防げない。
- ・6割が相談機関からスチューデント・サポート・フェイス（SSF）につながってくるが、48.5%が複数の相談機関を経て失敗経験があり、その後相談・支援に対して拒否・拒絶感をもっている。まずはそれを払拭しないとけない。
- ・来ることを待つ「施設型」「来訪型」「家庭教師方式」家庭に入って環境を変えていくアウトリーチ（訪問支援）の必要性。
- ・本人支援だけでは限界がある。環境に対するアプローチも重要。問題は複合化、多重化している。担当者、単一機関だけでは難しい。
- ・訪問支援により、約40%の孤立する対象者の掘り起こしが可能となった。
- ・相談に来ない人たちに対してどうアプローチするか。
当事者との直接接点の前に、事前準備をし、丁寧に扱う。
相談に入るために「関係性」をつくる。過去にどういう人たちが関わってきたか。どんな存在が彼らにとって一番受け入れやすいか。どんなことに興味をもっているか。好き嫌い、本人の価値観を含めた自己分析によるアセスメントを行う。価値観のチャンネルを合わせる。
- ・地域全体を俯瞰的に把握する。当県の強み、弱みを見つける。
- ・同じ目的「子どものために」のネットワークづくり。協力関係団体を把握する。
- ・地域でできることの限界も真摯に受け止め、全国的な視野で補う。
- ・アウトリーチにより自立支援まで継続的に支援する。
- ・環境の問題をすべて解消することは難しいが、子供たちにとっての楽しみな時間（ストレス解消の時間）につなげることはできる。
- ・アウトリーチにより、当事者が伝えられない「思い」や「状態」を客観性をもって代弁することも役割。
- ・「誤解」「偏見」が生じた状態での提案は、抵抗感を強めて拒絶を生むリスクになる。
- ・個人的資質や感覚、経験則に基づく支援ではなく、エビデンスに基づいた根拠ある支援の展開が重要。
- ・複数分野の専門家によるチーム対応を実現するためには、「共通言語」として簡易的アセスメント指標が必須。

研修生レポート（7）

お話を聞いて、最初に印象に残ったことは、SSFでは、相談の入り口から自立までを支援する仕組みが行政や、他機関とも協力しつつ整えられているということである。SSFが支援の中心になることで、他機関との情報や支援方法の共有がスムーズにでき、さまざまな困難の背景を持った方を支援できること、伴走型の支援が実現できるということが分かった。そして、その仕組みの基盤となるものは、「信頼感」に基づいた「関係性」であるということが大変印象に残った。SSFと同じような仕組みを作っていくことは難しいが、対象者や家族だけでなく、その関係する機関や人々との関係性を築いていくことは、少しずつでも出来るのではないかと思うので、今回お話の中で伺った、他機関との協力方法を実践していきたい。対象者との「関係性」に関しては、段階を見極め、関係性を調整していくことで、対象者が困ったときに頼れる人や機関を増やしていくという視点をもつことの大切さも学んだ。

また、各機関の支援の方向性を揃えるために、「Five Different Position」という独自のアセスメントを用いていることも、支援方法を考える上での新たな視点を得た。私の支援の中でも、他機関との共通認識をはかることの難しさを感じていたため、このアセスメント法を活かしたいと感じた。

谷口先生の実践の中では、対象者に寄り添う支援がなされているということも大きな学びであった。実際に会う前に家族や周りの人から情報を収集し、好きなことやNGワードを知り、対象者それぞれに合わせた支援の入り口を設定し、徹底した配慮がなされていた。その中で、対象者と家族や関係機関との対立を生まないような配慮もなされており、関係性にも注意を払うことが必要であるということも学んだ。

グループでのワークも自分ひとりでは出てこない様々な視点からの意見を聞くことができ、ケース検討の必要性や重要性を実感することが出来た。

谷口先生の講義では、支援の基盤となることから、発展させていく方法まで、多くのことを学ぶことが出来た。SSFには実習でもお世話になるので、実践を通して更に自分の支援に活かせるような学びを得、自分の職場での支援に活かしたい。

研修生レポート（８）

スチューデント・サポート・フェイスさんの講義からは、特に２つの点について学びました。

１つめは、Five Different Poaition を用いたケースの共有です。ケース共有に関しては、他機関との共有、所属支援団体内での共有の大きく２つがあると思います。他機関との共有では、専門分野や視点の違いから、見立てや支援方針について議論となり、必要な支援の方向性を共有することが難しい状況もたびたびあるという話題が出されました。指標を用いることで、共通言語がないことを乗り越えることが出来る取り組みだと感じました。また所属団体内でも、ケースの共有に時間がとられる等、講義内でも課題が出されていましたが、指標が示されていることで、ケースの共有が素早くでき、またケース自体が停滞していることも明確になり、一人で抱えない仕組みづくりが可能となっていることが分かりました。

２つめは、支援の視点を言語化し、また振り返ることで、支援に共通するエッセンスを自らのものとしていくことの重要性です。支援に正解はないといいますが、支援者が肌で感じるもの、また支援のなかで蓄積された知識があると思います。その内容を、例えばストレス耐性が弱くなっている場合、段階を踏んでまずは興味のあるものから始める、少しずつ関係性を変化させ、集団の取り組みにつなげていく、認知の修正は体験のなかで行うなど、支援のエッセンスを体系的に学ぶ機会となり、また自身の支援も言葉にしていく必要性や根拠をもとに支援を行っていく必要性を改めて感じました。

研修生レポート（９）

SSF では、援助の偏りをなくすためにチームで対応している。そこで大切にしていることが議論できるチーム作りだ。SSF のように高いリスクが想定できる中で対象者に働きかける機関にとって構成員が意見を話し合い、専門性を発揮できる雰囲気作りがとても重要だと感じた。それは援助の質を高めることでもあるが、援助者を守ることにもつながる。またそれぞれの立場から議論するには、自分の役割や特性をきちんと認識し、相手の役割を理解することが大切だと思った。自分の職務は広範囲にわたり、仕分けが曖昧なところがある。だからこそできることがあるが、そのできることの意味や根拠を言葉で説明できる力の必要性を感じた。

また対象者の情報の全てに意味があり、それをどう生かすかが大切であることを学んだ。アセスメントの段階から対象者をストレングスの視点で捉え、興味関心や趣味などを対象者の価値観として捉える。趣味などを対象者の価値観として捉えた時に関わりの糸口がより広がることを感じた。対象者にとって援助者の肩書や職務内容より「人」として援助者を受け入れられるか、価値観のチャンネルが合うか、援助者がチャンネルを合わせようとするのかの方が関わりに大きく影響する。対人援助を行うには自分の価値観のチャンネルを柔軟に働かせ、対象者に近づける努力が必要だと思った。

この講義は、必要だと思っていても試すことができなかった援助の実際の効果、必要性を学び得た講義であった。

研修生レポート（１０）

困難を抱える子どもや若者への支援において、本人と会えない可能性がある。その際には、ひきこもる権利を尊重する、必要以上の保護者対応は行なわないなどの対応が必要である。また、手紙や電子メールなどのツールを使っての関わりを行なう場合には同じ内容を繰り返すことや会う事を急がせる内容は避ける必要がある。ネガティブな話や理由を尋ねるような内容は本人を追い詰める危険性も考えられる。そのため、本人に働きかける際には本人が感心を持っている内容であったり、毎回話が進展するものにする必要がある。

本人と会えない場合、本人と信頼関係を作る上では、さりげなく気を配ることやネガティブな内容を口にしない、支援者から提案をする場合には本人にとって実行可能な内容にする、挿絵や絵文字などを使用し、視覚的な効果を用いる等が有効である。

また手紙だけではなく、絵や写真による本人との交流では文字を使わないためにおしつけがましい印象を防ぐことができる。

本人にとってニーズがあったとしても支援機関の利用に対して本人や保護者家族が抵抗感をもつことがある。そのような本人や家族に対しては、誘導先の支援機関についての基本的な情報やスタッフの人柄、施設の雰囲気など具体的な情報を伝えることや、本人にとってのニーズ、本人が共感できそうな成功事例についての情報を伝えることが有効である。

研修生レポート(11)

引きこもりだけに留まらず、多様な対象、柔軟な支援方法、事業所運営における700機関とのネットワーク、研修体制など全てにおいて参考になりました。そして、地域に住む方たちに対し、病気や障害者に関わらず、訪問支援を軸とした包括的な支援体制作りが急務であることを感じました。

体制だけでなく、実際の支援も「価値のチャンネルを合わせる」「偶然の確立を如何に高めるか」「NGワードの確認」など、対象者と関係づくりをするための事前準備の重要性を学びました。そして「アウトリーチは関係性をコントロールできる」ためまず導入はイーブン、ワンドアンの関係から始まり、安定期に軌道修正、展開し継続的に支え、発展できるようにし、終結を迎えるとの話がありました。通常、軌道修正が出来ずに経過することが多々あり、長期目標は立てるが、終結を具体的にイメージし、事前準備が不足していたように思い、今後具体的なイメージをもって支援したいと感じました。各支援時期においても、ストレングスを見出し、事例を用いて希望につなげることで、今後の対象者のことを考え、家族関係を悪化させないことの必要性を理解できました。そして各時期の具体的なアプローチを学びました。導入時期では、対象者の背景に向き合い、関係ができるまでは、あるがままを受け入れ、訪問時間が不足と感じるくらいでアプローチをしていくこと。安定期には、支援を継続させるだけでなく、最終的にどんな対象者でも、どんな形でも社会参加を目指し現状を発展させていくこと。展開期では、思いを共有、共感し、共有できた考えを発展させ、可能性を拡大させ、対象者が実行可能な提案、例えば株のシュミレーションやHOWTO本等やってみるなど進めていく。そして、より具体的な方向へ転換、失敗の際の対応も考えていく。という内容を映像、事例を通して学ぶことができた。また、私が通常関わっている、同意していない事例や精神科導入などのアプローチも聞くことができた。薬では症状は変わるが要因や環境は変化しないため、環境や本人への支援は必要とのことで、とても共感しました。アプローチでは事前情報では、疾患障害への誤解偏見を聞き取り、価値観を確認。第三者情報として、具体的な情報を提供していく方法を教えていただきました。関係づくりで、悩みを共有、受け止め(理想と現実のギャップに困っているため)言語化による理解として。誰もがなり得ること、自分のできること、できないことを分けてみる。展開と方針を対象者と共有し、本来の姿を共有し、本来の自分を取り戻せるようし支援していくこと、自分がどう見られているかを共感することが大切であると学びました

最後に、単一職種での支援、アセスメントでは偏るため、チームで対応していくこと、どんな支援を受けたかにより、受け入れられる支援対象者像が決まることなど、自分の実践を考えるととても共感しました。

そして、作成されたアセスメント指標については、是非利用し、多機関との共通目標をもて協働での支援に取り組みたいと思いました。

研修生レポート(12)

谷口先生のお話は、これまでの経験からのノウハウが凝縮されていて、自分がなんとなくイメージしていたものよりも遥かに繊細に行われていて、1人1人のニーズに合わせるということを本当に実践されているのだなと思いました。

アウトリーチは、家族からしてみれば「とりあえず来て！」とスピード感が求められるので、支援者としてはそれに応えようと焦って結果を出そうとしてしまいそうになりやすいと感じていましたが、その訪問前の事前準備だけでも細かな配慮と多くの情報量が必要なのだと学びました。どれだけ本人のニーズに合った支援が出来るのかは、個人のスキルやセンスも問われると思いますが、チームとして多方面からの視点も重要になるのだと思いました。

また、支援を行う上で、自分の振り返りや環境の整理も行って置かなければいけないことも気づかされました。いかに当事者のニーズに合わせられる自分になれるかが勝負なのではないかと思います。谷口先生のお話を聞く中で、「そんな切り口があるのか」と勉強になることが多く、型にハマった支援ではなくどれだけバリエーションをもてるか、柔軟な視点を持てるのか、それをどうやって本人にアプローチができるのかが、今後の私の課題の1つになるかと思っています。

支援の現場では、その場しのぎの対応になってしまうことも少なからずありブレてしまうこともあるので、1人で抱え込むのではなく、先を見通した支援が行えるよう繋がりを広げ、本人に寄り添い可能性を高められる支援ができるよう勉強していきます。

研修生レポート(13)

- ・佐賀県では「子ども・若者育成支援推進法」に基づいて、都道府県単位では全国初となる法定協議会を設置していること。
- ・多重困難ケースの自立支援においては、アウトリーチも含めた、ネットワークを活かした多面的なアプローチが必要であること。またそこでは、複数分野の専門職による高い専門性と、大学生等のボランティアによる世代間連携を活用した、チームでの対応が原則となること。
- ・アウトリーチで最も重要なのは、当事者との「関係性」と徹底的な個人的な配慮。たくさん人のグループワークを通じて、「見立て」の大切さと個別の配慮の実際について学ぶことができた。当事者の負担感、保護者の負担感を軽減させる視点で現状を肯定し、当事者が受け入れ可能な具体的な支援策の提示や、学校や専門家とつながり、必要な他者とつなげる役割りを担う必要がある。
- ・複数回に分けて面接をすることで「見立て」の精度を上げることや、自分自身の体験や経験を知ること、複数回にわたる情報収集や成功事例などの「希望の見通し」につながる情報伝達など、導入期につなげる「事前準備」の段階がアウトリーチの成否を分ける鍵となることを実感した。
- ・アウトリーチの導入期から安定期、展開期、終結期に至る迄の支援過程全般の一体的イメージを意識した支援計画の策定。支援者には各過程で「関係性」を意識的に調整できる力が求められること。
- ・チーム対応を実現するための、アセスメント指標。「対人」「メンタル」「ストレス」「思考」「環境」の5つの項目の判定による状況改善に向けたそれぞれの働きかけについて。対人恐怖や精神疾患、社会生活が送れないほどのストレス耐性、悲観的・否定的な思考、虐待やDV、家庭内暴力や家族間の対立などが一項目でもある場合、ひきこもりが長期化・深刻化する危険性が高いこと。

研修生レポート(14)

当施設は「来所型・施設型」の支援が主であり、「訪問型」の支援であるアウトリーチをすることは少ない。しかし、今回、谷口先生の講義を聞き、改めてアウトリーチの必要性を感じた。当施設では、来なくなってしまうと支援が終了してしまうケースがほとんどであり、支援を受けられずに孤立化し居場所を失ってしまう子どもも少なくない。親の力がある家庭は、そこから他の支援を求めるケースもあるが、ほとんどのケースはそのままひきこもりへ移行してしまう可能性がある。そういったことを防ぐためにもアウトリーチに力を入れる必要があると感じた。また、アウトリーチの方法において、事前準備の段階から徹底的な情報収集を行い、社会的自立という目標のために連続的かつ段階的な移行支援を計画していくということの大切さを認識した。自身の支援を振り返ると場当たりの支援が多かったように思え、改めて支援の方法について考えてみる機会となった。

谷口先生の講義では、アウトリーチだけでなく、他の支援にも役立てるような支援の仕方や考え方を多く学べた。

研修生レポート(15)

これまでの講義を通して、アウトリーチにおける初回インテークの重要性や、連携の必要性を理解してきたが、谷口氏の講義により更にその理解が深まった。当初資料だけを拝見したときはその質量から威圧感を感じたが、谷口氏のバイタリティ溢れる行動力が示す豊富でリアルな事例と、論理的な資料解説のおかげで講義はスムーズに受けることができた。事前準備を大切に、確実に相互間で認識の共有を図ることは、アウトリーチでも、面談における支援でも、連携を図る上でも、社会生活を営む上ですべてにおいて必要不可欠であると気づきを得た。当事者とのラポール形成や学問的知識などが重要であることは当然として、である。また、当事者に対する支援のみならず、支援ネットワーク、人材育成、ひいては支援者の置かれている窮迫した社会的立場を始めとした支援現場の矛盾点に問題意識を向けておられる点には感服した。講義では、当研修生にいずれその問題に立ち向かう同志を期待するニュアンスを感じ取られ、改めて支援の仕事に就く自身の志や自分のできることは何かなど、図らずも自らを振り返る機会となった。答えは出ていないが、今回のアウトリーチ研修を受けた中で、訪問支援は当事者にとって社会との距離を縮める大きな第一歩であり、その支援に携わる気持ちが研修前よりも強まったのは、当講義、並びに本研修で学び得た結果であると考えている。

研修生レポート（16）

困難ケースの事例紹介にただただ圧倒された。支援対象者のゴール設定を明確にし、「引きこもり状態から脱出させる」ことにこだわりぬき、プライドを捨て、自身の趣味嗜好に合わないものであっても投資をし、時に演技をし、アウトリーチを実行する。どうしても徹底した価値観のチャンネル合わせにつられてしまい、そこまでやるのか、自分にはできない、と反射的に感じてしまったのが正直なところであるが、先生がおっしゃりたいのはそういった表面的なところではなく、前述した、支援対象者のゴールにこだわり抜くことではないか、と受け止めた。（自分が置かれている立場で行うことができる最善の支援を、支援対象者のニーズに合わせて実行する。自分たちができない部分は、補うことができる機関とつながる。丸投げをするのではなく、チームとしてつながってもらおう。）

大きな気づきとしては、家族に対する暴力行為の危険がある場合、アウトリーチを要請した家族への報復のリスクを最低限に抑えるため、責任を支援者がかぶるという配慮だ。自分がこれまで行ってきた支援は、施設型支援だったことと、困難ケースがそれほどなかったことから、ひたすらに本人の味方となっていればよかったため、時に、彼らが憎んでいる親御さんへの気持ちに共感することも多くあった。しかしアウトリーチで同じ感覚でやってしまうと、彼らを加害者としてしまい、自立を阻ませてしまうという可能性もある。ここにこれまで気づいていなかったことを恥ずかしく感じた。いかに場当たりの対応であったかである。この気づきと学びを肝に銘じ、支援にあたっていきたい。

研修生レポート（17）

アウトリーチ支援における技法と思考だけではなく、関係する制度と社会資源の必要性和開拓をしていく事の重要性を細やかに説明していただき、大変学び多いものとなりました。また、佐賀県内における佐賀県庁とSSFが連携して行なってきた事業と今後の人材育成における取り組みは、公的機関と民間がそれぞれ持つ長所を最大限に発揮し、短所を補い合う形となっており、支援を必要とする人を第一に考えている佐賀県庁とSSFの取り組みに感動しました。また、谷口講師自身の体験談は、当時の現場における緊張感と一人の子ども・若者を自立に導いていくまでの過酷さが伝わってきました。社会から距離を置いた、もしくは置かざるをえなかった人間を伴走者として自立に導いていくまでには、多種多様な知識と経験、そして緻密な手順が必要である事を学びました。

上記のように、多くの技法と取り組みを講義及び演習で学びました。しかし、本職が一番感銘を受けたのは、谷口講師が体当たりで、多くの子ども・若者と向き合ってきた経験談でした。そして、大人も子どもも常に学び合い、同じ目線（チャンネルを合わせる）で自立を伴走者として支援していく事の大切さを学びました。

研修生レポート（18）

谷口さんやスチューデント・サポート・フェイス（以下、SSF）さんの取り組みはこれまでも知る機会が多く、その支援の圧倒的な実績を目の当たりにする中で、高度な専門性を有しながら、支援に当たられていると、これまで感じていた。しかし、語弊を恐れず言えば、専門的なスキルや知識というよりは、徹底的な「配慮」の積み重ねこそが、アウトリーチにとって何よりも大切であると感じた。この「配慮」というものは、極めて属人化されやすく、言い換えれば「センス」ともなってしまう場合もあるが、この「配慮」を突き詰めて言語化することによって、再現性や蓄積を可能にしている点が、他の支援団体との大きな違いだと感じている。

もちろん、職親制度も含めた地域における多種多様なネットワークや、web上で利用可能なツール、制度などの情報量やネットワークの広さというものは、経験を重ねていく部分が非常に大きいですが、この「配慮」という点においては、専門的に子ども・若者支援の知識があろうとなかろうと、突き詰めることができるもののように感じている。

今回の実地研修では、SSFさんにお邪魔させていただく。自分自身の感覚として刻み込むこともそうだが、言語化・可視化・再現性にこだわり、どうしたらその「配慮」ができるようになるのかという視点から、学びを持ち帰りたいと思う。

研修生レポート（19）

二日間に渡る講義は非常に内容の濃いものであり、学ぶことばかりであった。まずは、当事者にとって支援者という立場と言われる自分が、どんな存在であるかを自覚することである。支援者である私たちは、彼らがどのような状況に置かれているかを理解するのは容易であるが、当事者にとっては支援者がどういう人物で、どんなことをしてくれるのかすら分からず、彼らにとっては得体の知れない人物である。また、過去の経験から様々な支援者がいてネガティブな思考があった際には、より拒絶されてしまう可能性もある。そこで、この人だったらわかってくれるかもと当事者に思ってもらう為に、本人の興味関心事や好きなこと、「価値観のチャンネルを合わせる」ワンダウンポジションが有効であると、改めて学ぶことができた。

当事者と段階的な支援を行なっていく上で必要となる他機関連携については、お互いの主張をぶつけ合うのではなく、異文化コミュニケーションだと思ふことが重要である。お互いに譲れないことや価値観の違いはあるもので、目的を一つにして歩んでいくことが円滑な関係を生むとともに、有効な信頼関係を築いていける手段である。また、私の場合は他機関との連携でこのような問題は生じていないが、これらかの備えとして非常に有効な学びであった。

また、当事者と関わっていく上で、依存関係を生まないための工夫として、関わりの中で段階を経ていくことが挙げられていた。依存をうんでしまっただけでは、当事者にとって支援者がなくてはならない存在になってしまい、支援者がいない状態では何もできないという状態を引き起こし兼ねない。当事者の段階に合わせた、次へのステップを用意し橋渡しをすることが重要になっていく。

研修生レポート（20）

アウトリーチ支援を考えた際、当事者と接触する事前の準備を丁寧に行う必要がある。情報を集め見立てをしていくだけでなく、家族などを通して支援者についての情報を提供するなど間接的な働きかけを用いて、関係性を構築していく。また、場当たりの訪問にならないように支援のゴールイメージを持っておく。会うことができた場合、本人に価値観のチャンネルを合わせて、まずは本人の価値観や興味、関心を理解していく。また、場合によっては支援者の立ち位置も調整しながら、そうした会話の中から継続に向けたニーズを拾い集めていく。また、会えなかった場合も本人の心情に配慮し、言動、枠組みを微調整しながら関係を作っていく。支援者が入ったことで家族関係にマイナスの影響がでないように配慮する。関係が安定してきたら、徐々に小集団での活動など段階的に移行していく。そうすることで、支援者一人への依存を防ぐことにもつながる。また、展開期には複合的な要因から当事者に困難が生じている場合、様々な関係機関と連携して支援にあたっていくことが必要になる。その際の留意点として、大枠としての目的を共有し、連携する際はなるべく負担を軽減した形で行う。異なる背景、専門性を持つ機関同士が連携するので、共通言語を持てるようになることを心がけ、認識を共有できるものにする必要がある。

合同研修前期についての感想等

研修生レポート（1）

貴重な研修機会を与えてくださり、ありがとうございました。

全員の年齢を把握したわけではありませんが、参加者は若い方が多く、また、講師の方もエネルギーが豊富で刺激的な毎日でした。職種や職場環境も様々だったので、事例検討やグループワークをする際に、聞き慣れないワードが出てきたり、自分の地域にはない資源が出てきたりして、もっと自分自身が情報収集しなければと再確認する機会となりました。ケースによっては、今住んでいる地域以外の資源を活用して、自立につながるよう支援する場合もあると思うため、東京都だけでなく、他県の資源も幅広く情報を集め、適切に提供できるようにしたいと改めて感じました。

間もなく現地実習が始まるため、それまでにできる限り地域の資源について調べてから、臨みたいと思います。

研修生レポート（２）

事前に講師・講義内容、研修生の名前や所属先は周知されていたものの、当日は緊張と不安でいっぱいのまま研修に臨んだ。講義は、時間配分だけをみれば長く感じたが、実際はもっと時間をかけて受けたと思うものが多くあった。

グループワークは思うように進むか不安だったが、研修生の雰囲気も良く、演習内容を通して研修生同士の業務内容や経験を語る場にもなり充実した内容だった。

前期研修を通して自分に不足していると思った点を深めて、実地研修と後期研修に臨みたいと思う。

研修生レポート（３）

まずはこの研修機会を与えて下さった内閣府関係者の皆様、講義の講師で来られた先生方ありがとうございました。

全国の職種の違う素敵な仲間に巡り合えたこと、交流を深められたことにただただ感謝しています。

またアウトリーチに対する多面的な知識やアプローチ法を学べたことは児童相談所にて勤務する自身に新たな引き出しを得る絶好の機会になりました。

今後もこのアウトリーチ研修は全国で助けを待っている人々、支援方法で頭を抱えている仲間たちに必要な研修です。私自身が力になれることがあれば協力させて下さいお願いします。

研修生レポート（４）

今回の研修では、それぞれの立場で一生懸命に業務に努めている。様々な他機関の方々と知り合うことができたこと、更にアウトリーチの大切さを一緒に学び合えた時間となりとても貴重な体験でした。

各機関の皆様とは、職場環境は違えども、お互いに声かけ合い、励まし合えた事があってこそ頑張れた研修だったと感じています。この５日間は、研修での学びを通して「相手の興味関心事・今の感情を共有する気持ち」が育まれた時間であり、学びの多い、そして充実した楽しい研修でした。内閣府の方々始め、事務局の方には心より感謝しており本当にありがとうございました。

研修生レポート（５）

合同研修前期では、全国からさまざまな団体・所属機関の専門の方たちと出会い、一緒に学べたことが一番大きな成果となった。演習では、それぞれの団体機関がもっている役割、支援内容、各々がもつ経験や知識を出し合って一緒にシェアできたことがとても参考になった。立場の違いから視点が違っていたり、アプローチの違いも様々であり、いろいろな角度からアウトリーチについて考えることができた。

アプローチの仕方はいろいろあっても、社会で孤立している人たちをいかに支援していけるかという目指す目的は同じである。地域から自治体、そして全国へとネットワークが広がり、日本全体で取り組めていけたらもっと多くの人たちを支援していけるのではないか。この研修で全国各地の団体と出会えたことで、その一歩になれたらと思う。

今回の前期研修を通し、地元に戻って貧困の問題を抱える沖縄独自の課題、地域性、支援体制と支援機関についてもう一度考え直してみたいと思う。何が課題で、どんな支援を必要としているのか、また、沖縄の強みは何か？強みを生かして課題を解消できないか。実地研修先である sorae さんは、地元沖縄で幅広い年齢を対象に事業を展開しているので、沖縄特有の問題とそれに対するアプローチ、支援方法を実際に見て学んでいけたらと思う。

研修生レポート（６）

この研修会をとおしてアウトリーチの有効性を実感することができた。これまで必要と思っ
ていても実践に結びつけなかったことが多々あったが、この研修をとおして理論的に根拠があり、何より数多くの事例をとおしてアウトリーチの可能性を確認できたことが嬉しい。今後、実施研修などで実践現場を体験することをとても楽しみにしている。

研修生レポート（7）

アウトリーチ研修の前期合同研修に参加させて頂き、講義では、それぞれの機関で支援を行なわれている先生方から説明頂き、より理解につながりやすかった。昨年の受講生の方の講義では、実施研修についてや、学びをどのように生かすかについて語られとても勉強になり、今後の見通しにもつながった。

今回のアウトリーチ研修では、アウトリーチに関わる様々な職種が参加したことで、それぞれの専門職からの視点を学ぶことができ、様々な視点から対象者を理解することの重要性を学んだ。また、日常の中で自分の関わりのある機関や職場についての知識はあるが、関わりが薄いまは関わることがないような機関で、どのような支援をどのように行なっているのかの学びにつながった。谷口先生の講義では、より具体的な事例を通して、支援の流れをご紹介頂いたことで、相談者への関わり方や他職種との連携、困難事例についてどういったことが必要かを知る事ができた。

講義だけではなく、グループワークの時間があつたことはとても貴重な体験であつた。グループについても事前に決定していたことで、同じメンバーで固まることもなく、研修期間の間に多くの研修生と関わる機会となつた。また、グループワークの中でも現在の職場や、職場での立場（専門性）、これまでの経験によって、視点の向け方や方向性の考え方が少しずつ異なり、1人では気づくことのなかつた方法や視点を知る機会となつた。

グループワークの中で本人と支援者に分かれてのロールプレイを体験したが、実際に自分が当人の立場になってみることで、支援者の存在や関わりについて当人がどのように感じるかを知る経験になつた。

研修の最後に行なつた色紙にポジティブなメッセージを書くワークは、とても新鮮な体験であつた。業務を行なう中で、なかなか自身のポジティブな面に目を向けることが少ない為、他者から見たポジティブなメッセージはとても心強いものであつた。

今回の前期アウトリーチ研修で学んだことを今後の業務に生かし、よりより支援ができるよう取り組みたい。

研修生レポート（8）

アウトリーチ研修を通して、様々な団体の方からお話しを聞く機会に恵まれ、多くの視点や支援方法を学ぶことが出来ました。地域特性もあると思いますが、自身が活動している地域では、どのような支援を組み立て、他機関と協同していくことが必要か、考える機会となりました。

また、自分自身の支援に関しても振り返る機会となりました。柔軟に学び続ける姿勢を常に持ちたいと改めて思います。

最後に、研修に参加された方々は、分野や職種は多岐に渡りました。他分野多職種の皆が、子ども若者の支援に強い思いをもっておられました。その思いに触発され、また支援について互いに思いを語り合えたこと、とても貴重な時間になりました。

研修生レポート（9）

5日間、密度の濃い充実した時間を過ごすことができました。講師の方、研修生それぞれに近隣地域の方が参加されていて、福岡周辺でも様々な活動をされていることを知ることができました。また、うきは市での取り組みや、「ふくおかライフレスキュー事業」が福岡全県で開始されることなど社会資源に対する貴重な情報も得ることができました。

参加者も皆さん熱心な方々ばかりで、雰囲気の良い空間で学習することができました。講師の方々の熱量の高さと合わせて、とても刺激を受けました。

谷口さんの資料の内容とボリュームには目を見張られるものがありました。詳細な分析力と組織のマネージング力に驚かされ、その行動力にも圧倒されました。

長期の引きこもりがアウトリーチでしか解決できない、となると大変な問題だと、改めて実感しました。

アウトリーチにかかる人と時間と労力とを考えると、まず引きこもりの状態を生み出さないような根本のところの対策をする必要性について考えざるを得ない状況にある、と問題認識を新たにした5日間でもありました。

研修生レポート(10)

・ジェノグラムや、エコマップ、ケア会議などの演習があり、医療保健分野では当たり前に行うことですが、他の研修性では今回が初めての方や、必要性を感じたという話が聞け、今回の研修を受けて、当たり前と思っていたことが違うことに気がきました。これからは他分野とも連携した地域支援が必要となる中、また新しいNPOなど民間事業者の方たちと協働して支援をしていく中、配慮をできるようにしていきたいです。

・とても、学びの深い内容でした。自分の中で、消化し実践に生かしていくこと、ボリュームのある内容を伝達講習をどのようにしていくと伝わるか模索中です。

研修生レポート(11)

私の今までの支援では、アウトリーチについての知識や心構えが無のまま家庭訪問を行っており、相談の継続が難しかったり、何もできないまま様子見をしたりしていた。今回の研修を受けることで、アウトリーチには、まず家族や関係機関からの情報収集など準備が必要であること、対象者に関わる様々な機関との連携が必要であること、アウトリーチをすることで起こる危険性について十分に配慮することなど、アウトリーチを実施する前に行うべきことから、実際の支援について、多くのことを学んだ。どの講義や演習からも、「信頼感」「関係作り」「連携」「伴走型支援」というキーワードが聞かれた。それらのキーワードを軸に今後の支援を考えていきたいと感じた。

また、この研修では、全国から様々な職種の研修生が集まっており、研修生との情報交換も大変参考になった。

大変多くのことを学ぶことができた。この学びを自分のもの出来るよう、実習や職場での業務に活かしていきたい。

研修生レポート(12)

5日間の研修を通して、アウトリーチの基礎を学ぶことができた。また、様々な職種の受講生の方たちと有意義な時間を過ごすことができた。グループワークなどを通して、それぞれの考え方や支援の在り方などを知ることができたのは私にとってプラスになった。

前期研修を通して、行政機関ではできることに限界があるがその限界の中でどのようにアウトリーチを行っていくのかを考えることができたように思う。また、行政機関では担えない部分をNPO団体と協力して取り組んでいくことができれば、支援の幅が広がってくるだろう。実地研修を通して、実際の活動を知り、そこで知り得たものを自分の職場で活かしていきたいと思う。

研修生レポート(13)

研修を行う前までは、アウトリーチについてフワフワとしたイメージしかなく、怖さや不安感しかありませんでしたが、今回の研修でやっとスタート地点に足が着いたような気がします。同じ研修生のなかには、すでにアウトリーチを行っている方もいて、それでもこの研修に参加されているのを見て、学びが多く本当に奥が深い支援なのだと感じました。沢山の方とお話しすることで、刺激を頂きましたし、自分が新たに頑張りたいと思えるものが見えてきた気がしました。沖縄では、まだまだひきこもりの実態が不透明なところが多く、需要はあれど支援が行き届いていない状態があり、自己流でアウトリーチを行ったがゆえに、傷ついている当事者・家族の声もあります。ここで学んだことを共有しながらも、こういった勉強の場がこれからも続き、広まってほしいと切に願います。

研修生に選んで頂いたことを改めて、感謝申し上げます。

今後とも宜しくお願い致します。

研修生レポート(14)

前期合同研修を通して、多くの有益な知識を得られた。普段自分が所属する機関の中にいるだけでは、自身の支援のあり方を当然のものと考え、振り返る機会をなかなか持てていなかったが、各地での様々な実践の話聞く中で、相対化して考えることができた。今回学んだことを所属機関にしっかり持ち帰りたい。講師の先生だけでなく、参加された他の研修生も意欲的な方が多く、刺激を受けるところが多かった。

研修生レポート（15）

講師のかたの取り組みや考え方等、大変刺激になりました。ありがとうございました。
他の参加者の方が普段どのような支援をされているのかが関心があったので、もう少しその点について掘り下げられるワークがあると嬉しかったです。
一つの事例をお題として設定し、チームメンバーで解決することを目的として、どのようにネットワークしていくかを考えるような演習等
事前に提出させていただいたケースワークの原則の課題を利用した演習
いずれも、後期に用意されていたら大変失礼いたしました。

研修生レポート（16）

講師の皆様のみならず、研修生同士でも情報交換が今後継続して行われそうな交流が築けたことはありがたく、今回のような機会を与えていただいたことに感謝いたします。ありがとうございました。

研修生レポート（17）

学び多く、他職種の方々と親睦を深める事の出来た研修となりました。
アウトリーチというテーマで、約5日間集中的に講義及び演習を受講する事でアウトリーチにおける基本的な知識と技能を深めることが出来ました。また、アウトリーチの実施における社会的背景と制度を通して、広域的な福祉に関する知識を習得する事が出来ました。
親睦に関しては、業務にアウトリーチ業務を含むという共通があるとしながらも基本的には全国から集まった他職種の方々と講義を受講する中で、多くの意見交換と各地域の状況と情報交換を行う事が出来ました。研修終了後に実施されていた講師と研修生の意見交換会でも活発な意見交換が行われていたのと同時に、研修生間の交流が深まったように感じています。
前期研修を振り返り、大変受講しやすい温かな雰囲気と環境を整えていただいたという実感があります。理由として講義だけではなく、宿泊環境の調整から意見交換会にいたるまで細やかな配慮をさせていただいたおかげであると思います。充実した研修となりました。多くの点での温かなご配慮、本当にありがとうございました。

研修生レポート（18）

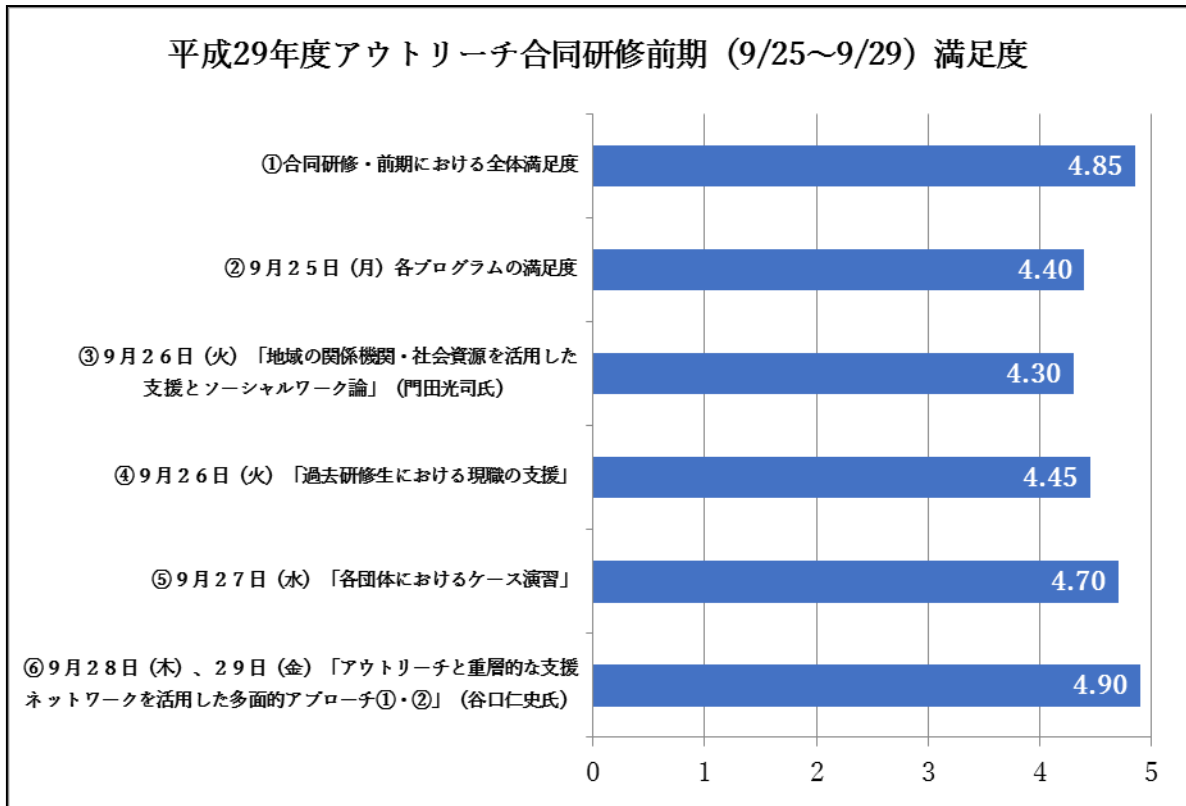
今回の研修参加にあたっては、「このまま、地域の中で、なんとなく支援が出来ている（気がする）状況では、いずれ大きな破綻が起きるのでは」という危機感を感じていた。どうしても地方にいと、こういった枠組みでの支援活動をNPOなどで取り組んでいると、先進的・先駆的のような言葉が付いて回り、注目していただいたり、取り上げていただくことが多くなる。しかし、そういう状況が続けば続くほど、失敗が徐々に許されなくなり、結果的に成長できる機会を失っていってしまうと感じる。その意味で、こういった全国から短期間で集中的に支援者が集まり、日常的な業務の関係性や地域のしがらみを超えて、素の自分も出しながら、安心して失敗できる環境があることは何よりありがたいと感じた。

研修生レポート（19）

これまで経験則に頼り、感覚的に支援をしていたことを感じた。経験年数が多くなればなるほど、成功ケースも増えていくため、自身のやり方を正しいと誤解し、それに固執してしまっていた。今回、研修を受けたことにより、これまでの自身の支援について振り返ることができ、「当たり前のことを丁寧にやる」ということができているのではないかと感じる事ができた。また、多職種・他機関の方とお話する機会も多くあったことで、これまでになかった考え方や視点を獲得する機会となり、地域の現状を知ることも大きな学びとなった。
本研修で得た学びを施設でも共有し、地域にどのような形で貢献できるのを考えていきたい。

合同研修前期の満足度についてのアンケート結果は図表 5 の通りであった。

図表 5 (合同研修前期 / アンケート結果)



(合同研修前期における各プログラムの満足度を研修生が5段階評価(1 が最も低く、5 が最も高い) で回答したものの平均値を掲載している)

2 . 実地研修

- ・ 期間：平成 29 年 9 月～12 月
- ・ 場所：9 か所の研修受入団体（図表 6 参照）

受入団体の研修計画書に基づき、アウトリーチについての実践的な知識や技法、当事者への対応方法、アウトリーチへの同行、関係機関との連携、アウトリーチを効果的且つ円滑に行うための組織体制や事業運営の方法等について、OJT 形式による実務を通じた研修を行った。

研修内容の詳細は、受入団体ごとによって異なるため、図表 7 に記載する。

図表 6（研修受入団体）

研修受入団体名（地域）
山武郡市広域行政組合教育委員会山武郡市教育相談センター
浜松市精神保健福祉センター（浜松市ひきこもり地域支援センター）
運営：特定非営利活動法人 サポートセンターゆめさき 実施機関：子ども若者みらい相談プラザ sorae
特定非営利活動法人 わたげの会（社会福祉法人 わたげ福社会）
特定非営利活動法人教育研究所
特定非営利活動法人北陸青少年自立援助センター
特定非営利活動法人ピアサポートネットしづや
特定非営利活動法人青少年自立援助センター
特定非営利活動法人 NPO スチューデント・サポート・フェイス

各研修受入団体の研修概要については、次頁から順に記述する（図表 7）

図表 7 (実地研修 / 各研修受入団体の研修概要)

<p>機関・団体名</p>	<p>山武郡市広域行政組合教育委員会 山武郡市教育相談センター</p>
<p>所在地</p>	<p>〒283-8505 千葉県東金市東岩崎 1 -17</p>
<p>機関・団体における アウトリーチの特徴等 について</p>	<p>公的機関であるため、学校との連携を密にしつつ、アウトリーチ（訪問支援）を行っている。本研修では、教育機関等における 3 市 3 町が連携した体制（山武郡市広域行政組合）での不登校等の相談対応や、適応指導教室に通級する生徒等の対応を主として扱う。また、困難を有する子供・若者の支援又は相談業務に携わる人材の養成に貢献することを目的とする。</p>
<p>機関・団体で運営している 相談・支援機関名</p>	<p>山武郡市教育相談センター 適応指導教室ハートフルさんぶ大網白里教室 適応指導教室ハートフルさんぶ東金教室 適応指導教室ハートフルさんぶ山武教室 適応指導教室ハートフルさんぶ横芝光教室</p>
<p>研修全体の概要</p>	<p>○本研修では、教育機関等における 3 市 3 町が連携した体制（山武郡市広域行政組合）での不登校等の相談対応や、適応指導教室の対応を主として扱う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山武郡市教育相談センターの活動概要について ・訪問カウンセリングについて（心構えと実践事例等について） ・訪問カウンセリングの計画について ・相談センターカウンセラーの活動概要について ・訪問相談担当教員の活動概要について ・訪問カウンセリングの実地研修 ・適応指導教室における通級児童生徒への教育支援（4 教室）
<p>研修内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション（受入団体の業務内容説明等） ・訪問カウンセリングについて（心構えと実践事例等について） ・訪問カウンセリングの計画について <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・相談センターカウンセラーの活動概要について ・訪問相談担当教員の活動概要について ・適応指導教室における通級児童生徒への教育支援 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・訪問カウンセリングの実地研修 （訪問カウンセラーと同行し、実際に行っているカウンセリングの様子を見る。また、該当児童又は生徒そして保護者との会話等を行う。） <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・適応指導教室における通級児童生徒への教育支援 ・実地研修の振り返り ・研修のまとめ

機関・団体名	浜松市精神保健福祉センター (浜松市ひきこもり地域支援センター)
所在地	〒430-0929 静岡県浜松市中区中央一丁目 12- 1 県浜松総合庁舎 4 階
機関・団体におけるアウトリーチの特徴等について	<p>上述のとおり、本市におけるひきこもり相談においては、第一次相談等を行政機関が、訪問支援や居場所事業等を NPO が行うといった官民一体でケースの支援にあたる「官民協働」の体制となっている。アウトリーチは、上記の研修実施場所に記載した NPO 法人に委託し、医療機関や福祉施設、教育委員会等での就業経験のある精神保健福祉士を中心に担っている。</p> <p>また、同 NPO 法人は、精神保健福祉士養成のテキストで数ページにわたり取り上げられるなど、高い実績を有しており、本研修においても協働で行う。</p>
機関・団体で運営している相談・支援機関名	<p>浜松市ひきこもり地域支援センター (浜松市と「特定非営利活動法人 遠州精神保健福祉をすすめる市民の会」が協働で運営)</p> <p>地域若者サポートステーションはままつ (「特定非営利活動法人 遠州精神保健福祉をすすめる市民の会」が運営)</p>
研修全体の概要	アウトリーチの同行や事例解説、居場所(フリースペース)及び地域若者サポートステーション等における当事者の対応、アプローチ方法、関係機関との連携、円滑なリファーやオファー等の実践を扱った研修を行う。
研修内容	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・センター概要、法人概要、事業概要、研修内容、留意点等について説明 ・研修生の自己紹介、職務内容や経歴等の概略について説明 <ul style="list-style-type: none"> ・精神保健福祉センターでのミーティング参加 ・ひきこもりケースの事例検討会に参加 ・連携機関の紹介・見学 <ul style="list-style-type: none"> ・訪問 ・訪問後、ケースについてのふり返し ・ひきこもりコミュニティスペース(居場所)での利用者対応 <ul style="list-style-type: none"> ・ひきこもり当事者グループでの利用者対応 ・実地研修のふり返し、まとめ ・意見交換

機関・団体名	運営：特定非営利活動法人 サポートセンターゆめさき 実施機関：子ども若者みらい相談プラザ sorae
所在地	〒901-2303 沖縄県中頭郡北中城村仲順 264 番地（法人住所）
機関・団体における アウトリーチの特徴等 について	<p>ひきこもり状態などにある子ども・若者に対し、緊急性・適時性（アウトリーチで直接会える状態にあるかどうか）を勘案し、当事者の自宅をはじめカフェ等（当事者の希望する場所で柔軟に対応）でのアウトリーチを実施している。</p> <p>また、保護者を通じた本人に対する声掛けの仕方を工夫するなど、本人に対する間接的な支援を行うことで、家族関係などの調整や当事者の動機づけを図り、アウトリーチにつなげている。</p> <p>このように間接的な支援と、アウトリーチなどの直接的な支援の両輪のかみ合わせに重きを置いたアウトリーチが特徴である。</p>
機関・団体で運営している 相談・支援機関名	<p>法人にて下記の事業を実施している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子ども若者みらい相談プラザ sorae ・ 地域若者サポートステーション琉球 ・ 地域若者サポートステーション沖縄 ・ フリースペースゆめさき ・ 学校法人精華学園沖縄校 夢咲学園（広域通信制・単位制高校） ・ 児童デイサービス ゆめさきクラブ ・ 相談援事業所 フローラ比屋根
研修全体の概要	<p>県設置の子ども若者総合相談センターとして実施している総合相談やアウトリーチの対応を中心に、相談の受理（インテーク）、実際のアウトリーチ、見立て（アセスメント）、関係機関との連携、就労・自立支援など、当事者が社会に参加（就労や学校復帰、社会復帰等も含め）するまでの段階（プロセス）を見通して研修を行う。</p> <p>また、不安障がい、自閉症スペクトラム等を有する子ども・若者へのアウトリーチ対応についても理解を深める。</p>

研修内容	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション (sorae スタッフ紹介、研修生の自己紹介《職務内容や経歴等の概略について説明》) sorae 業務概要、法人概要、研修内容、留意点等について説明 ・アセスメント会議への出席
	<p>基本的には上記の研修全体概要をもとに実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相談の受理、相談、他機関との連携など sorae の相談業務の流れに沿って各専門の領域で研修担当者からの説明を受ける。 ・sorae 休日(12月11日(月))に於いては、不登校、ひきこもり等の居場所についての連携事業所を訪問。事業内容等の説明を受ける。(サポート琉球、児童デイ、夢咲学園、夢咲農園、サポート沖縄) ・サポートステーションや事業所等との連携、フォローアップの同行 ・所内会議、アセスメント会議への出席
	<ul style="list-style-type: none"> ・前日のふりかえり ・アウトリーチ訪問に向けてのリサーチ ・アウトリーチの同行：状態像の共有、アウトリーチの実施 <p>【 1：実施時間について：アウトリーチ対象の状態像やタイミングを勘案し、実施が夜間に及ぶこともある。その際は、翌日の開始時間を適宜調整する。】</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・不登校・ひきこもり等の居場所についての連携事業所等を視察 ・研修7日間のふりかえり、フィードバック (研修担当者、sorae スタッフ)

機関・団体名	特定非営利活動法人 わたげの会 (社会福祉法人 わたげ福祉会)
所在地	〒982-0001 宮城県仙台市太白区八本松 1 丁目 12-12
機関・団体における アウトリーチの特徴等 について	<p>当法人は平成 9 年の設立当初から、ひきこもり等の困難を有する子ども・若者及び、その家族に対してアウトリーチを行ない、家族以外の人と交流できる居場所（フリースペース）や社会参加及び自立に向けた支援、相談支援を実施している。また、当事者に対する支援や相談のみならず、その家族に対する支援（家族支援）にも重きを置いて取り組んでおり、家族の勉強会においては、家族が「どのような関わり方ができるのか」を主たるテーマとして扱い、支援を行なう者とその家族が協力して当事者の社会参加を促すための環境づくりに努めている。</p> <p>アウトリーチにおいても、アウトリーチを行なう前に家族と丁寧な面談を行なうなど「当事者（本人）」「家族」「支援者」「関係機関」が協力・連携してアウトリーチを実践している。</p>
機関・団体で運営している 相談・支援機関名	<p>せんだい若者サポートステーション</p> <p>仙台市ひきこもり地域支援センター</p> <p>仙台市障害者小規模地域活動支援センター「わたげ」</p> <p>共同生活援助「わたげ寮」</p> <p>ひきこもり自立支援寮「メゾンわたげ」</p>
研修全体の概要	<p>アウトリーチの同行やケーススタディ、当法人が運営する相談支援・居場所支援施設（フリースペースや若者サポートステーション等）における当事者対応、家族への支援、関係機関との連携、円滑なリファーやオファー等について研修を行なう。</p>
研修内容	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション、法人概要、事業概要、研修内容、留意点について説明 ・当法人の支援方針や相談等の対応方法について説明 ・法人内の各相談支援施設等について説明 <ul style="list-style-type: none"> ・相談支援現場の同席、フリースペースでの利用者対応 ・家族教室の見学 ・スポーツ活動への参加 ・訪問支援についての事前学習 <ul style="list-style-type: none"> ・事前打ち合わせ (これまでの支援経過について同行スタッフより説明) ・訪問支援同行 ・訪問後、訪問支援記録の作成補助と振り返り <ul style="list-style-type: none"> ・実地研修全体の振り返り ・訪問支援についてのまとめ ・各機関との連携、ネットワーク、課題等について説明

機関・団体名	特定非営利活動法人 教育研究所
所在地	〒233-0013 神奈川県横浜市港南区丸山台 2 -26-20
機関・団体における アウトリーチの特徴等 について	教育研究所では過去 40 年にわたり、不登校・ひきこもりなどの若者の支援活動を行い、その累積したノウハウを基に、ひきこもり・ニートなどの訪問支援にも活用しています。
機関・団体で運営している 相談・支援機関名	いかわ若者サポートステーション
	自立援助ホーム うなづき
	宇奈月自立塾
研修全体の概要	当法人における宇奈月自立塾（富山県）において、研修期間中、困難を抱えた若者達と衣食住を共にした生活を行い、来所する形式での相談対応では見えにくい部分についても理解を深め、様々な視点を持ち合わせた訪問支援員としての心構えやスキルを身に付ける。
研修内容	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・ひきこもり・ニートの心理、対応等の理論の講座を受講
	<ul style="list-style-type: none"> ・アウトリーチの実践編 ・訪問支援者の心理背景・生育過程などの総合的な事前研修を行い、様々な支援ポイントを押さえ、禁忌事項なども伝える。
	<ul style="list-style-type: none"> ・ひきこもり・生活困窮者・生活保護者へのアウトリーチの実践編 ・スタッフと共に訪問支援を行う、1日で2、3件行う。
	<ul style="list-style-type: none"> ・事後研修を行い、現場出てきた問題点を考える。 ・7日間のまとめ

機関・団体名	特定非営利活動法人 北陸青少年自立援助センター
所在地	〒939-2204 富山県富山市万願寺 144 番地
機関・団体における アウトリーチの特徴等 について	当法人が運営する高岡地域若者サポートステーション等に誘導するためのアウトリーチを行い、学習支援や職場体験、ボランティア体験、職場見学、生活訓練等の支援を行い、社会で活躍するための可能性を広げる。
機関・団体で運営している 相談・支援機関名	高岡地域若者サポートステーション
	Peaceful House はぐれ雲
研修全体の概要	共同生活施設(寮)「はぐれ雲」において、衣食住を共にした共同生活や共同作業、入寮する若者の当番作業等を通じて交流し、来所する形式での相談対応では見えにくい側面についての理解を深める。 また、当法人が運営するサポートステーションに赴き、アウトリーチに同行する(または「はぐれ雲」からアウトリーチに同行)。
研修内容	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・法人概要、事業概要、研修内容、留意点等について説明 ・研修生の自己紹介、職務内容や経歴等の概略について説明を受ける ・当事者への対応(農作業、スポーツ、食事準備等)
	<ul style="list-style-type: none"> ・当事者への対応(農作業、スポーツ、食事準備等) ・利用者のケース検討等
	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問先(被支援者)のこれまでの支援経過について、同行スタッフよりレク ・訪問後の支援記録作成の補助 ・アウトリーチの振り返り
	<ul style="list-style-type: none"> ・研修期間の振り返り、今後の助言等

機関・団体名	特定非営利活動法人 ピアサポートネットしづや
所在地	〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿4-7-6 KTビル201
機関・団体におけるアウトリーチの特徴等について	事務所で家族支援訪問しているが、家族とのかかわりのみ家族にも、本人にも会えている本人との外出、付き添いができている、の4段階に分け、支援を行っている。原則、親には主任支援員が、本人には、若者支援員が対応する。ピアサポーターを支える主任支援員、相談員と専門職、アウトリーチを支える地域ネットワークを持つ。
機関・団体で運営している相談・支援機関名	該当なし
研修全体の概要	ともに学ぶことを大切に、当法人の行っているアウトリーチを含む全事業についての情報提供、実践、参加や見学を通して、それぞれが所属する団体との活動の比較や自らが求めていること、団体から求められていることなどを、対話しながら、気づきが生まれる研修にする。
研修内容	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・受入団体の業務内容説明 ・各実施事業についての説明 ・情報交換、振り返り
	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアサポート活動について ・支援している子ども、若者の状況 ・NPOと地域連携、ネットワーク形成について ファンイン（地域）活動への参加・見学
	<ul style="list-style-type: none"> ・家族支援について（訪問家庭の経緯、経過等） ・住居への同行訪問 ・情報交換、振り返り
	<ul style="list-style-type: none"> ・実地研修の振り返り ・情報交換

機関・団体名	特定非営利活動法人 青少年自立援助センター
所在地	〒197-0011 東京都福生市福生 2351- 1
機関・団体におけるアウトリーチの特徴等について	<p>当法人では開設以来アウトリーチ事業を基軸とした青少年自立支援活動を全国的に展開してきた。近年、景気の低迷等の影響もあるのか、地域に関係なくニート層が多く目につくようになってきた。しかしながら、実際にアウトリーチをできる機関は少なく、そのスキルも一定ではないのが現状である。そのような、状況に対して一定スキルを持った人材の育成が急務と考えられる。当法人では、年間 300 件超の訪問支援を実施していて、その臨床例も多く蓄積されている。20、21、22 年度においては、東京都委託事業のひきこもり支援「コンパス」で支援員向けの講座をおこなった。23 年度からは「東京都若者社会参加応援事業」でも民間団体・公的機関職員向けの講座を実施している。より実践に近い形で、座学よりはロールプレイの時間を多くとり、また訪問支援の同行も行った。それにより、各々の現場において有効なアウトリーチの実践をおこなえるようになったとのご報告をいただいている。</p> <p>そのような部分のノウハウも研修事業の中で生かして行き、研修後直ぐに役立つ内容としたい。そのような人材が多く輩出されれば、各地域において、早期対応ができるようになり、ひきこもり状況が厳しくなる前に対処できると共に、予防的な側面も期待できる。本事業において多くの人材が広域に展開されればと考えている。</p>
機関・団体で運営している相談・支援機関名	<p>あだち若者サポートステーション</p> <p>いたばし若者サポートステーション</p> <p>多摩若者サポートステーション</p> <p>フリースペースわかば（セーフティーネット足立）</p> <p>あらかわ就労サポートデスク</p>
研修全体の概要	<p>ニート・ひきこもり状況のトータルしたサポートを体験してもらう。入口のインテーク面接の重要性からアウトリーチの実際を座学・ロールプレイで体験してもらう。</p> <p>また、生活困窮者等の支援も視野に入れ、当法人で実施している生活保護家庭の支援・アウトリーチも体験してもらう。最終的には、出口の部分を理解する必要があるので、就労支援等の事業にも参加してもらい、支援の全体像を理解してもらえるように講習を実施していく。</p>
研修内容	<p>ガイダンス ひきこもりについての座学</p> <p>現場実習（就労支援現場の体験等） イベントへの参加 ロールプレイ（インテーク・訪問支援）困窮者支援に関する研修</p> <p>実施地は未定 終日訪問同行</p> <p>ふりかえりとまとめ</p>

<p>機関・団体名</p>	<p>特定非営利活動法人 NPO スチューデント・サポート・フェイス</p>
<p>所在地</p>	<p>〒843-0022 佐賀県武雄市武雄町大字武雄 7255 (武雄市事務所) 〒840-0826 佐賀県佐賀市白山 2 丁目 2 - 7 (佐賀市事務所)</p>
<p>機関・団体における アウトリーチの特徴等 について</p>	<p>「施設型」となる公的支援の補完的な機能を担うアウトリーチの必要性は従前より指摘されてきたが、支援手法としての困難性から多くの行政機関で敬遠されたため、民間組織が先行する形で取り組みが進められた歴史がある。その結果、公的支援としてのノウハウの蓄積・共有化は遅れ、地域によっては何ら専門的な研修・指導を受けることなくアウトリーチが展開される場合や、適性や効果性の検証もないままに一部の民間団体に頼った対策を講じる自治体も散見される。</p> <p>当該分野において、支援の対象となる若者は、自己確立が不十分で心理的にも不安定な特性を持つ思春期あるいは青年期にあり、その状態も経緯によっては自傷他害のリスクを帯びる深刻なケースも想定される。従って、事態の悪化を招くような安易な介入は避けなければならず、訪問に際しては専門性を伴った安全かつ確実なアプローチが求められる。</p> <p>当法人はこういった観点から、教育・医療・福祉等複数分野の知見の集約によって発展的に確立された訪問支援手法と連続支援行動を可能とする重層的支援ネットワークをバックボーンに、旧来の取り組みとは一線を画したアウトリーチ事業を展開し、全国トップレベルの実績を収めている。</p>
<p>機関・団体で運営している 相談・支援機関名</p>	<p>さが若者サポートステーション たけお若者サポートステーション 佐賀県子ども・若者総合相談センター 佐賀市生活自立支援センター</p>
<p>研修全体の概要</p>	<p>アウトリーチに携わる援助者として必要な資質能力の基礎を身につけるため、訪問活動に関する様々な論点を踏まえつつ、その支援形態の特殊性について理解を深め、機関誘導型、関与継続型のアウトリーチを中心に支援現場で求められる実践的なノウハウの獲得を目指す。</p> <p>アウトリーチへの同行は勿論のこと、同行日以外は実例を用いたケース検討、適応訓練機能を付帯したフリースペース「コネクションズスペース」における活動、子ども・若者育成支援推進法や生活困窮者自立支援法に係る総合相談窓口での相談支援、地域若者サポートステーション事業における職業的自立支援等、当法人が受託運営する各種協働事業における幅広い活動を通じて、インタークからアウトリーチの実践、社会参加・自立、支援終結に至るまでの各段階における留意点等についても共有する。</p>

研修内容	<ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション ・法人概要、各種相談支援事業、研修内容、留意点等について説明 ・各事業担当者等の紹介 ・訪問日程、スケジュール調整 ・関与継続型及び機関誘導型のアウトリーチに焦点を当てた集中講義など
	<ul style="list-style-type: none"> ・事前の面談から初回の訪問に向けた枠組みの設定、支援計画の策定 ・実例を用いたケース検討 ・ボランティア及び就労体験への参加 ・各相談支援事業における実施セミナーへの参加など
	<ul style="list-style-type: none"> ・同行訪問（相談支援概要、留意点の共有、課題設定、振り返りなど） ・事前の面談から初回の訪問に向けた枠組みの設定、支援計画の策定 ・ケース検討 ・保護者及び家族対応 ・次回訪問設定、支援段階の移行方法の共有など
	<ul style="list-style-type: none"> ・危機管理（個人情報の管理など） ・10日間の振り返りなど <p style="margin-left: 20px;">上記のほか、施設等での支援又は相談対応や各事業等を扱う場合もある</p>

図表 8 実地研修 研修生レポート / 一部抜粋)

実地研修レポート
<p>研修生レポート (1)</p> <p>研修内容概要 (実施概要)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 訪問カウンセリング同行 ・ 施設型カウンセリング同席 ・ アウトリーチ支援における有効性の検証 ・ 支援計画の作成と過去計画の検証 ・ 適応指導教室の実施状況の視察と確認 (実習形式) * アウトリーチ後の児童の現状確認と把握 (実習形式) ・ 不登校児童への復学支援方法視察 ・ 千葉県行政による不登校児童支援概要把握 (人員配置、環境、社会資源) ・ 山武郡市教育センターによる不登校児童支援事例検討 ・ 適応指導教室通級児童ケース検討会議参加 <p>実地研修を通して学び得た事柄 (印象に残っているエピソード等)</p> <p>1) 訪問支援時の緊張感。</p> <p>アウトリーチ支援に同行させていただいた際、訪問者である訪問カウンセラーが様々なケースを想定し、様々な準備をされていた。具体的には、学習教材、ボードゲーム、面会が出来なかった時にこちらの意思を伝えるための便せんと封筒。物以外にも、面会時のシュミレーション等を移動で使用している公用車から下車するまで行われていたことから、アウトリーチを行う際の緊張感が伝わってきた。</p> <p>* アウトリーチ実施時において準備の大切さは集合前期研修で学んでいたが、実地研修に同行することで、現場の緊張感が体感できた。</p> <p>2) 不登校児童の復学における社会資源の必要性。</p> <p>不登校児童が復学するにあたり、個々のケースや状態に応じて出来るだけ細やかなステップによって成功体験を積み重ねることが重要となる。適応指導教室での実習を通して、通級している子どもたちが同教室で多くの成功体験を積み重ねて復学への意欲や自己肯定感を高めていくことが確認できた。社会資源の必要性を強く感じた。</p> <p>考察・所感 (業務等への活かし方など)</p> <p>アウトリーチという一つの支援技法を長期にわたって学ぶことにより、このテーマを多角的な視点で見つめることができた。対象者が落ち着く環境である家庭へ直接訪問して支援を展開していくアウトリーチの有効性を確認することができた。一方、訪問支援者のリスクも感じた。理由として、対象者の生活領域に入っていくことから予期せぬ環境や不測の事態が起きる可能性もあることから、施設型支援以上にリスクが高くなるということを強く感じた。また、引きこもりの状態から帰属先や社会復帰をしていくには、多くの社会資源が必要となり、支援者は社会資源の開拓をしていく必要性を感じた。</p> <p>今後の本職業務への活かし方としては、子どもたちが円滑に帰属、社会復帰していくための社会資源を一つでも増やすべく、その開拓と情報収集をすること。そして、訪問支援的業務時には、本研修で学んだ計画立案や各技法を現場で活かしていきたい。</p>
<p>研修生レポート (2)</p> <p>研修内容概要 (実施概要)</p> <p>○ 浜松市精神保健福祉センターが連携している事業所の見学及び事情説明 それぞれの事業の取り組みや課題、他機関との連携についての工夫などの説明を受けた。</p> <p>○ アウトリーチ同行 センターでの事例検討会、当事者宅への訪問及び、交流スペースや当事者グループへの参加させて頂いた。</p>

実地研修を通して学び得た事柄（印象に残っているエピソード等）

アウトリーチ

○自宅への訪問は3件同行させていただいたが、当事者との関係性や家族関係、状態によって関わり方の工夫（会う場所や時間帯等）をされており、幅広い支援の仕方を学ぶことができた。

○訪問に際して本人の様子だけではなく、本人を取り巻く家族の状況や雰囲気にも着目すること、積極的に本人に関わる姿勢の大切さを学んだ。

○ひきこもっている本人にも自分なりの考えや思いが当然あり、本人が今できていることを評価し、動きを広げていく肯定的な関わりの重要性を実感した。

当事者グループ

○当事者の方の社会復帰に対する思いや、積極的に仲間に関わろうとする姿勢を実感した。当事者の方の「ひきこもってもやる時はやる」「みんなすごい能力を持ってる人たちだ」という力強く肯定的な言葉から、まず安心して一緒に過ごせる関係性の構築や、本人を肯定し受容することで、少しずつ自信につながっていくことを改めて実感した。

交流スペース

○他者との関わりに対する苦手意識を抱いている方は多く、その中で本人の趣味や興味関心のあることに寄り添いながら、まず、好きなことを共有出来る仲間づくりからはじめられる、交流スペースは素晴らしい取り組みであると実感した。

考察・所感（業務等への活かし方など）

今回の実地研修を通して、アウトリーチのやりかたにこだわるのではなく、本人の状態や気持ちにより添いながら柔軟に関わっていくこと、一つの場所が抱え混むのではなく、関係機関で連携をとりながら包括的に支援することの大切さを学んだ。そのため、今後業務において、従来のアウトリーチのやり方に固執するのではなく、より本人の状況やニーズにあったやり方を考えて実行していきたい。

研修生レポート（3）

研修内容概要（実施概要）

・浜松市精神保健福祉センターでのひきこもり支援を中心に民共同事業の見学、支援方法を学びました。

<精神保健福祉センター運営事業、見学参加>

- ・ひきこもり交流スペース「こだま」、若者サポートステーション（サポステ）
- ・アウトリーチ支援：1件、サポステ継続相談ケースへの自宅訪問
上記は NPO 法人 遠州精神保健福祉をすすめる市民の会 E-JAN に委託
- ・ひきこもり家族教室、引きこもり当事者グループ「ゆきかき」
- ・天竜地域自殺対策事業：（天竜厚生会：精神相談支援事業所ほくえんに委託）

<その他見学先>

- ・ひきこもり支援事業：サポステ職場体験事業「はままつフラワーパーク」
- ・医療法人至空会：乳幼児から成人までの地域包括ケアシステム
（多機能型診療所：一般・児童精神科、乳児～成人デイケア、地域活動支援センター相談支援事業所・相談支援センター、障害者就労支援センター、就労移行支援、就労継続支援 B 型、就労支援・児童発達支援発達支援センター）
- ・発達相談支援センター「ルピロ」
- ・ひきこもり当事者の働く場「せいぶぼいんと」：ネットリサイクルショップ
- ・パーソナルサポートセンター（伴走型就労・生活支援就職相談センター）
- ・生活自立相談支援センター「つながり」（困窮者事業）

実地研修を通して学び得た事柄（印象に残っているエピソード等）

- ・多様な機関を見学し事業説明をしていただいた。
- ・80万都市の中で精神保健分野のネットワークがあり、連携、共同での企画検討により地域でお困りの方がいないよう、多機関で検討し、事業や支援をされていました。
- ・そこで、地域の仕組み、機関連携、支援者としての共通理念を共有することで、地域の精神保健が充実していくことを学びました。
- ・地域の仕組みについては、子供の心身の健康を保つための取り組みだけに、とどまらず、自殺対策など多様なメンタルヘルスの仕組みに発展させ、地域の様々な問題に困る方へ、支援が行き届くような仕組みが構築されていた。
- ・機関連携として、官民共同で連携していました。各機関に連携の工夫などを質問すると、どの機関においても同様の回答がありました。内容は食事の共や、ケースを通じての事例検討、ネットワーク会議、企画会議など顔の見える関係を維持し、互いに対等な関係を維持する工夫がされていました。これは、色々な連携を通じ、それぞれ機関のボリュームや役割を明確にし、互いに理解しあう努力の積み重ねにより、民間の柔軟性、機動力と公的機関としての公平性、公共性による幅広い事業や知識が生かされていたようでした。
- ・そして各機関の共通理念として「これは、うちのケースじゃない」「この人にはこの事業が適切でなない」といことはなく、「せっかく に来たんだから、関係を作ってから適切なところへ橋渡ししよう」と各機関の方が意識して当事者の方に対応されていました。
- ・の個別支援においても「無駄なことを大事に」「対等よりも踏み台にしてほしい」との話を聞き、どの機関も当事者を中心とした支援をされていました。
- ・常に当事者、地域住民の安全、安心が保たれるためには、どうしたらよいのか、地域のために、各機関、支援者が枠を決めず、相手のためにどうしたら良いかという、共通理念を持ち、互いに少し枠を超えた取り組みが、地域で安心、安全な居場所、相談先につながり、地域の風土になると感じました。

考察・所感（業務等への活かし方など）

- 今回の研修を通じて、自分は「アウトリーチ支援」に捕らわれていることを感じました。アウトリーチ手法に関わらず、必要なことをしていく先に、訪問支援があり、様々な支援のバリエーションの可能性があるのではないかと、自分自身を振り返る機会となりました。
- また、一緒に実習をした研修生と普段の支援方法や実習の振り返りを深めることができた。個別的には、地域のストレングス、機関のストレングス、当事者のストレングスを組み合わせ、対等な関係を意識することを活かしながら、当事者、機関が安全・安心を保てるような支援、対応、居場所、対策、事業を考え業務に取り組んでいきたい。
- そして、所内においては、浜松市精神保健福祉センターの取り組み、官民共同の連携のほか、業務体制など伝達講習をしていきたいと考えています。

研修生レポート（４）

研修内容概要（実施概要）

- ・アセスメント会議
（スタッフ間で意見を出し合ったり、スタッフのもつ専門性を共有したり、一緒に見立てを行っていた。また、会議の内容をホワイトボードに記録することで、視覚的に捉えて共通理解とポイントの整理、状態像の把握をしていた。最後にホワイトボードを写真に撮り、記録の時間削減をはかっていた。）
- ・アウトリーチの同行
（学校訪問、自宅訪問および自宅外での当事者、家族との関わり、関係機関との関わり等を見ることができた。担当スタッフによってアプローチ方法が異なり、様々なアウトリーチ手法を学ぶことができた。）
- ・DVDによる講義
（認知療法・認知行動療法カウンセリングの中の構造化を踏まえた実践について、ワンステップスクール伊藤学校の取り組みについて学習した。）
- ・sorae 法人機関訪問、居場所訪問、事業所説明
（特定非営利活動法人 サポートセンターゆめさきが運営する機関の見学と事業所の説明、県内にある居場所の見学と事業所の説明を受けることができた。）

実地研修を通して学び得た事柄（印象に残っているエピソード等）

- ・モニターやフォローアップ、伴走のあり方について、実際にアウトリーチの同行の場面やアセスメント会議の場面の中で確認することができた。
- ・やわらかい締め切りを提案することで、必要性を高めるアプローチが可能になること、自己決定の促し、動機付けの重要性、指導的にならないドラマ作りやきっかけ作りについてなどの話を聞き、とても参考になった。
- ・「必要性」と「自信」の二つの要素で動機の理解をする点が今後に生かしていきたいと思った。
- ・状態像の把握についてアセスメント会議で行われていた手法が勉強になった。

考察・所感（業務等への活かし方など）

- ・どのようなアプローチをするのか、どのツールを使ってアウトリーチをするのか入り方は様々で、児童相談所ではできない権限とあわせて、ケースに合わせた多様なアプローチがとれるようにしていきたい。
- ・行政だけでは制度の縛りを受けてしまうなど行政の限界を感じた。すべての子ども、若者を対象にした柔軟な対応を可能にするためには、民間の力をかりることで自由度をもたせた新しい取り組みが必要だと感じた。社会とつなげて社会で取り組む体制が今後求められるのではないかと思う。
- ・引きこもりや不登校などが生じる要因として、大人がつくってきた枠組みに当てはめようとした結果、そこに問題が生じ、孤立、不適合になったのではないかと感じた。自分が自分であることを認められる（自己理解）、他者も相手を認められることがまず大前提で、それが可能となるような社会の仕組みが必要だと痛感した。これからは、子ども達が自ら考えて動いていけるような環境、社会の体制が必要だと感じた。

研修生レポート（５）

研修内容概要（実施概要）

アウトリーチ同行

非行の子ども達へのアウトリーチ、ひきこもり・不登校の子ども、若者に対するアウトリーチ、どちらのケースにも同行することが出来た。支援において気をつけること、アウトリーチの目的などの説明を受けたうえで、同行を行った。

アセスメント会議

アセスメント会議では、ケースの見立てだけでなく、アセスメントとプラン実行のために必要な知識についても細かく説明がなされており、全スタッフが一定の水準をもってケース対応が出来るよう、所内で知識を蓄積する風土が根付いていた。

施設見学

ゆめさきだけでなく、他の連携施設・団体についても見学・説明を受けることが出来た。

実地研修を通して学び得た事柄（印象に残っているエピソード等）

アウトリーチ

非行の子ども達へのアプローチでは、子どもたちと信頼関係を育むこと・出会うことの重要性について学ぶことが出来た。信頼関係が育まれると、子どもたちからSOSを出してくれ、また人をつないでくれることが分かった。信頼関係構築には、支援者として、何かを行うスタンスではなく、まずは子どもたちを知る、子どもたちの世界を見せてもらう、という姿勢で子どもたちに向き合われていたように感じられた。

ひきこもりの子どもたちへのアウトリーチでは、なぜ支援者が彼ら/彼女らに出会うことになったのか、出会うことへの理由づけを綿密に設定されていた。また出会った後の展開では、『自信VS必要性』の考え方をもとにして、外的な締め切り（時間の区切り）も設けながら、次回の展開を決定されていた。また、アウトリーチは家だけでなく、公園や車での移動内、ファミリーレストランなど様々な場所で、その子の負担にならないかたちで行われていた。

アセスメント会議では、ケースの見立てや支援方針において、どんな理由や理論に基づいてその決定が出されたのか、支援者の感覚を普遍化する取り組みがなされていた。

考察・所感（業務等への活かし方など）

今回の実習を通して、『何となくこんな感じ』で支援を行っていた自分自身に気がつくことが出来た。なぜこの行動をするのか、この行動はどんな理論に基づいているのか（理論に基づかない部分も、もちろんある）を整理し、知識を積み重ねていく事と同時に、若者に関わるうえで、自分自身がどんな眼差しをもって関わるのか、支援者としての原点にも、再度目を向けることが出来た実習であった。

研修生レポート（6）

研修内容概要（実施概要）

受け入れ団体の行う事業に関する講義

NPO法人「わたげの会」と社会福祉法人「わたげ福祉会」を総称した「わたげ」の活動は多岐に渡る。講義では20年に及ぶ活動の経緯や活動における理念、現在の活動における課題や今後の活動のビジョンなど幅広い説明があった。またフリースペースや親の勉強会、就労継続活動支援B型等の活動の現場に実際に参加することで、利用者の方やご家族との交流の機会を持つことができた。

アウトリーチの同行

今回同行をすることは出来なかった。改めてアウトリーチ訪問の難しさについて考えさせられた。実際にアウトリーチをメインで行っている二人のスタッフから事例についての話を聞き、また元当事者で現在わたげのスタッフになっている斉藤氏からご自身の経緯について話を聞くことが出来、アウトリーチのことだけでなく、引きこもり支援の全体像について、当事者の視点も含めて理解を深めることが出来た。

実地研修を通して学び得た事柄（印象に残っているエピソード等）

アウトリーチ

アウトリーチに同行することは出来なかったが、「わたげ」では、アウトリーチが、当事者をフリースペースへとつなぐファーストステップ、家族に働きかけて家庭環境を調整するファーストステップ、の手段ととらえられており、

活動のメインはフリースペースでの活動や家族支援、ととらえられていた。前期研修で学んだ、アウトリーチが家族支援・家族関係の調整という視点を確認することができた。

組織・事業運営等

当事者のニーズに寄り添い、社会福祉法人・NPO法人の二つの法人組織の特性を上手く活用して、相談窓口・フリースペース・学習支援・自立訓練の為のショートステイ・グループホーム・就労継続支援B型・家族勉強会等、多様な支援体制を構築していた。当事者に必要な支援は何か、どうしたらその支援を実現することができるか、というアプローチの積み重ねの結果として、現在の支援体制になっていることが分かった。理事長が「40代以上の当事者のために、今後グループホームのような住環境が必要になってくると思う」と話されていたのに、その一端が伺われた。

「わたげ」では家族的なかかわりを大切にしており、特にフリースペースではそれが特徴的に表れていた。スタッフ（支援者）とメンバー（利用者）は名札もつけておらず、服装も皆私服で接し方もカジュアルなため、一見しては違いが見分けられない。実際、お昼休みに近くのコンビニに昼食を買いに行った際、私達を率先して案内してくれたスタッフの斉藤氏をずっとメンバーだと認識して接していたことは、印象に残るエピソードの一つである。各事業に元メンバーのスタッフが配置されるなど、支援する・されるという関係にならないような配慮がなされており、とてもフラットな関係性がスタッフとメンバーの間で築かれていた。

考察・所感（業務等への活かし方など）

『家族的な関わり』

「わたげ」の全ての活動は、ここから始まっているように思われる。家族だから一人も見捨てない。継続して長期的に関わる。安全・安心の場所となる。このような視点で、具体的な支援の形が出来上がってきたのだと感じた。

「わたげ」の支援ではフリースペースでの活動と家族支援を軸にしている。

当事者は安全な場所が自分の部屋にしかなく、当事者の家族は自分の家に引きこもり社会から孤立している。このような状況に対して、家族勉強会を通して家族が社会とのつながりを取り戻す。また家族の関わり方が変わること、家の中が当事者にとって安全・安心な場所へと変わる。アウトリーチはこのタイミングで、有効に働くツールとなる。訪問者が、部屋から出てきた当事者に、ひきこもりの仲間が集うフリースペースという安全・安心な場所につなぐことで、当事者の活動の範囲が広がっていく。

『「遊び」の意味』

「わたげ」の特徴は「遊び」の活発さにある。私がフリースペースを訪問した日も芋煮会のイベントがあり、近くの川原で自分達が作った芋煮を食べ、川に向かって石を投げ水切りをしたり、バトミントンや長縄跳びをしたりして過ごした。また、次の日は週に一回のスポーツデイで、フットサル場で選手交代しながら休み無く紅白戦を行った。フリースペースでは卓球をし、カードゲームに興じた。その隣では麻雀卓を囲んでいる姿があった。壁沿いには釣竿やギターが並んでいた。

遊びや、スポーツ、季節ごとのイベント等これらはスタッフが得意なこと、熱中していることにメンバーを巻き込みながら現在の形になっているという。一見すると無駄に思えるようなこれらの活動が「わたげ」では必要な経験として大切にされている。スタッフがメンバーを集団の中に巻き込みながら、同じ年代の人達が過ごしたであろう、日常の体験、みんなと遊ぶ喜びや楽しみの体験を少しずつ積み重ねていく。それにより心の中にある「やり残し感」が埋まっていき、自信や自己肯定感が取り戻されていくのだという。スタッフの遠藤氏が「これらの活動が本当に意味のあるものだ、と腑に落ちるまでに3年かかった」と言われていたが、私の会で関わる当事者の子ども達も体育に苦手意識を持つ子やご飯をみんなで一緒に食べるのが本当に難しい子が多く、「わたげ」のメンバーの元気な様子には驚かされた。

『親子のズレを修復する』

家族勉強会では、引きこもりの状態を、「心のガス欠」として説明する。子どもがストレスに対処するエネルギーが切れて動けない状態にある時、親は早く元の状態に戻そうとあせり、親の期待値と子どもの現状とにズレが生じてしまう。このズレに気づくことが早期の回復につながる。

家族勉強会では家族のエネルギーを上げ、子どものエネルギーが上がるような、家庭の中で出来るちょっとした工夫を具体的に説明していた。「花を飾ってみましょう」「食事のお皿やお箸を変えてみましょう」「楽しんでやってみましょう」等々。そして、それぞれの家庭で実践した工夫とその効果について報告が行われる。「ここは私たちの居場所になっているんですよ。」と参加者の親の一人が話されていた。

親同士で関係性が築かれると、一人のお宅に集まってお茶会が開かれる。そうやって家の中に風が送り込まれ、当事者が動き出しやすくなるきっかけ作りにつながっていく。アウトリーチはこうした家族への一連のアプローチや家庭の環境調整があった後に、はじめて当事者本人との接触に結びつく、息の長い取り組みの一つだと感じた。

ソーシャルインクルージョン、ソーシャルビジネス的な取り組み

高齢者や障害者が気軽に集える居場所づくりからスタートした「わたげ」は、色々な世代や立場、障害のあるなしに関わらず、みんな一緒に社会の中で暮していけるあり方を目指している。スタッフはメンバーに対して特別扱いではない、自然な関わり方を常に意識している。一方で、発達障害や知的障害など、個別的で専門的な関わりが必要な当事者も年々増えてきている。二次障害としてのひきこもり症状から初めて障害に気づくこともあり、個人がどこまでの社会復帰が可能かを見極めるのは非常に難しく、精神科医との連絡会を持つなどの必要性も生じていた。個人のニーズに合わせていくと、個々が分離分割されていく方向に向かいがちであり、スタッフの方々は、それぞれが期待と現実のはざままで揺れながら日々の活動をされていた。

現在、「わたげ」のスタッフはすべて職員である。これもスタッフが安定した生活基盤がなければ、安定した長期的な支援を行うことが出来ない、という考えが基にある。実際、スタッフは長期で勤めている方が多い。メンバーが来たいときにいつでも来られるように、フリースペースは平日には毎日開けている。就職した元メンバーは、会社帰りに顔を出して仕事の愚痴を話していったりする。20年に及ぶ「わたげ」の活動は、「人」を中心として、持続可能な社会環境の調整による社会問題解決のための取り組み、といえるかもしれない。

研修生レポート（7）

研修内容概要（実施概要）

施設見学、わたげの会の組織・沿革
「ほわっと・わたげ」仙台市ひきこもり地域支援センター（相談業務）
「わたげの家」自立訓練（通所型） 宿泊自立訓練、短期入所
「フルハウス」共同生活援助施設（グループホーム）
「わたげの樹」就労継続支援 B 型事業所
地域活動支援センター 第 2 フリースペース
メゾンわたげ
せんだい若者サポートステーション
就労支援体験・交流【わたげの樹】
母親勉強会

週に 1 度、ひきこもりの当事者の家庭にいる母親・父親に向けた勉強会を行っており、2 度の勉強会に参加した。内容はひきこもっている家の環境から居場所と感じる空間にすることであり、家族支援の体制を整えることである。外部でいくらポジティブな関わりをしたとしても、内部である家の中の環境が整っていないとその関わりも意味をなくしてしまう。だからこそ、まずは家庭の中から当事者が居やすい空間をつくるために、家族も一緒に向き合うことの重要性を学んだ。

第 1 フリースペース-芋煮会準備・実施-芋煮会（メンバー・職員）運動

相談から繋がったメンバーが、それぞれに合った機関に通所する内の一つが第 1 フリースペースである。ここではどちらがスタッフなのかメンバーなのかも分からないほど、両者の間に上下関係などはない。こちらの施設ではメンバーと一緒に同じ時間と空間を過ごして、芋煮会やゲーム、スポーツなどをして自然とコミュニケーションを図った。

学サボ見学

わたげの会では、第 1 フリースペースに通っているメンバーの中で、学習に意欲が向いた子供達を対象に学習サポートを行っており、世の中課という取り組みを行っていたところを見学した。

フリースペース第 1 朝礼

第 1 フリースペースでは、メンバーの気になったところや、共有しておきたいことを確認朝礼でしており、実際に参加した。

スポーツデイ

わたげの会では毎週木曜日、体を動かす「スポーツデイ」が行われており、フットサルやバドミントンなどを中心に一緒に活動をした。

アウトリーチ実施者からの説明

家族支援に重きを置いて活動をしているわたげの会も、アウトリーチを行っており、その中で遊びを中心にした関わりを心がけていたり、必ず二人でアウトリーチを行い、役割を分担したりして取り組んでいることなどの説明を聞いた。

卒業スタッフとの情報共有

わたげの会のスタッフの中に、メンバーから卒業した方がおり、ひきこもっていた頃からの話を伺った。

施設長との意見交換（各施設長）

各施設長が集まり、それぞれの取組内容やメンバーの情報共有などを中心に行った。それぞれの機関での運営に関する情報共有なども行っていた。

フリースペース第 1 厚生会

わたげの会では卒業したメンバーとスタッフ、現メンバーを交えた交流会を定期的に行っており、その中でロールモデルとなる卒業生との関わりを通して刺激を受けている様子であった。

実地研修を通して学び得た事柄（印象に残っているエピソード等）

アウトリーチのその先・家族支援

アウトリーチ研修ということで、アウトリーチに関わる知識やスキルを習得していく実地研修になると考えていたが、アウトリーチに移る前の事前準備として行なっている家族支援を中心に理解を深めることができた。

ひきこもり当事者にとっては、部屋がある自宅でさえも居づらい場所であり、その環境から変えてくことで、心のガソリンが溜まっていき、意欲を持つことができるのだと感じた。

ニーズに合わせた受け皿の多さ出口の多さ

わたげの会では相談機関から、就労継続支援、グループホームなどの生活支援、居場所としてのフリースペース事業など各種ニーズに合わせた受け皿が多く、多様な特性を持ち合わせているメンバーに対応できる体制が整っているので、様々なケースへの柔軟な対応ができる。

スタッフの諦めない心

連携している医療機関から何らかの特性の診断があっても、そのメンバーにとってのよりよく追求する姿勢を持ち続けていた。その姿勢はどんなメンバーと関わる上でも、非常に重要なことで忘れてはならないと感じた。

スタッフとメンバー間のフラットな関係性

支援する側、支援を受ける側との関係がなく、スタッフとメンバーがわからないこともあり、その関係性が良い変化を生んでいるのだと感じた。

遊びによる充電

ひきこもっている当事者にとって、就労や就学が一つの目標であることもあるが、あえて遊びでの関わりを行う。これは例え当事者がひきこもった後すぐに就労就学に移行したとしても、ひきこもっていた期間に失われた意欲や経験体験がある為に、すぐに充電が切れてしまい、長続きしないことを防ぐ為の取組である。

考察・所感（業務等への活かし方など）

自分の責任に委ねる（自分が〇〇したいから一緒に行こう！）

通所してそれほど時間が経っていないメンバーに関わる際に、メンバーに対してやりたいことを聞くのではなく、スタッフ自身の都合を相手に提示した上で、関わることで、たとえ何か起きてしまったとしてもスタッフのせいにして、安心してすぐことができる。これを普段関わっている子どもたちにも適宜、盛り込んでみようと考えている。

遊びの効果

遊びに期待されている効果として、感情が動きやすいこと、遊びを共通言語にメンバー同士でも交流が持てたり、感情が突き動かされるきっかけとして、非常に良い取組であると感じた。日常の業務の中にも活かしていく

研修生レポート（８）

研修内容概要（実施概要）

講義：ひきこもりの状態像や対応、アウトリーチのために必要とされる連携機関、統計からみるひきこもりの実態、若者サポートステーションについて講義をしていただいた。

アウトリーチ同行：内訳 20代 1件、30代 1件、40代 2件

最近関わり始めた本人の意思確認が難しいケース、本人が困っていることへの支援継続をしているケース、継続した関わりを持っているが外出が難しいケースと様々なケースに同行させていただいた。最近関わりを始めたケースでは、家族面談にも同席させていただくことができた。

連携機関や提携している体験先の見学：アウトリーチに必要な連携機関や就労体験先の見学をさせていただいた。

塾生との座談会：本人の経験談を基に、研修生の質問に答えていただいた。

実地研修を通して学び得た事柄（印象に残っているエピソード等）

アウトリーチの同行や塾生との会話の中で「このままではいけない」「今の状況をどうにかしたい」という思いを、皆が持っていたことは印象的だった。その思いを聞けたときには、言葉を引き出すまでの関わりの大変さと支援者として言葉の重みを感じた。また、就労の面では企業と提携するために様々な機関との連携が必須であり、訪問支援と言えど幅広い分野の知識が必要になることが分かった。

塾生との生活の中で「自分のことを話したい、聞いてほしい」と感じる場面が多々あり、これまでその人自身と向き合って話していたか、個人が持つ背景や病気の有無に捉われがちな自分の業務の在り方に、反省する日々だった。

考察・所感（業務等への活かし方など）

アウトリーチ支援をするために必要だと感じたこと。

支援者個人の人間力を高める：自分を知ることも含め、職種の経験に限らず人として経験値をあげることは考えが柔軟かつ豊かになると感じた。

枠組みの活用：前期研修では、先生方のような関わりができるか不安が大きかった。しかし、今の立場でできることできないことの見極めをし、枠組みを上手く活用すれば、抱え込みも少なく、当事者にとっても可能性が広がるのではないかと実地研修を通して考えられるようになった。

繋がりへの継続：細く長くでも、繋がる方法を考え、見守り続けることは必要だと感じた。ではどのように、というところは課題であるが1人で抱え込まずに関係者と考えていきたい。

研修生レポート（9）

研修内容概要（実施概要）

- ・オリエンテーション
- ・法人概要、事業概要、研修内容、留意点等について説明
- ・研修生の自己紹介、職務内容や経歴等の概略説明
- ・当事者への対応（農作業、スポーツ、食事準備等）
- ・利用者のケース検討等
- ・アウトリーチ先の支援経過についてのレクリエーション
- ・アウトリーチの振り返り

実地研修を通して学び得た事柄（印象に残っているエピソード等）

実習初日、はぐれ雲を訪れた瞬間から寮生の雰囲気、熱意あるスタッフ、田んぼに囲まれた家、全てに魅了されました。

特に印象に残っているのが研修2日目に入寮しもうすぐ1年になる若者が脱走したことでした。私自身施設職員として勤務していた際に脱走する若者を多く見てきましたが、その施設は自立支援施設であり非行少年が多くいたため、驚きもなかったのですが、今回の脱走はひきこもりの若者であったため驚きを感じました。脱走した若者は富山県から実家のある他県へと移動し、その市町村にて生活保護を申請していたことが分かり。その行動力に驚かされました。

考察・所感（業務等への活かし方など）

川又代表の話で「夜寝て朝起きる、ご飯を食べ、汗を流す、これが出来るだけである程度の支援は達成している」。実際に若者やスタッフと共同生活をし汗を流す過程でその言葉を理解しました。

基本的な生活習慣の獲得から自立（就労）までは個人差はあるが、一歩ずつ前に進んでいる。ただその土台にのらない限りは前には進まず停滞と後退の日々が過ぎていく。今は本人の意思に任せて、その内になんとかなる、あせる必要はない。そう言っていた日々が過ぎ去り、支援者本人、家族が気づいた時には膨大な年月がたち焦るが、年月の分だけ腰が重くなる、就職先が、受け入れ先が見つからない等、二重苦三重苦の状態に陥ってしまう。

そうならないためにも、いかに初期の段階でヘルプコールを拾えるか、相談支援体制を作り上げるか、セーフティーネットを形成するか、そのためのアウトリーチの重要性を再認識できました。また、自身は児童相談所に勤務していることもあり、若者の初期支援に重要な関わりを持つ機関であると考えます。いいかげんなケースワークをせずに、子どもの未来を見据えたケースワークが出来るようにアウトリーチを活用していきたいです。

研修生レポート(10)

研修内容概要(実施概要)

教育研究所宇名月自立塾で実施している各事業に関する講義

- ・事業内容の説明と事業間及び職種間の連携体制
- ・事業を活用しての人材育成
- ・新規事業においても支援間のネットワークを大切に【連携】【情報共有】を重要視する体制

アウトリーチ同行 全4ケース実施

(生活保護世帯2件・ひきこもり世帯2件)

訪問場面は自宅内での面談が2件、自宅外での面談が2件のアウトリーチに同行させて頂いた。面談場面では、当事者等の状況に合わせた配慮をしながら対応し、近況報告を聴き取るとともに、今後のスモールステップアップに繋がるような提案も事前に検討した上で訪問に臨むことができた。

実地研修を通して学び得た事柄(印象に残っているエピソード等)

アウトリーチの実践について

・父子関係がこじれているケースにおいては、スタッフが両者に気持ちを代弁しつつも、本人との信頼関係の構築のために安心感を抱いてもらえるように穏やかな空気感と、語りかけるような声かけを意識していること。また、本人と少しでも関わりのある方からの情報も収集しながら対応している。

・自宅での面談では、本人が第三者との会話を緊張しながらもまだまだ話しをしたいとの様子が伺われた。このことを踏まえても「自分の存在を理解して欲しい、誰かに解って欲しい」との願望は心理的に感じていることだと思った。

・生活保護世帯においては、本人の性格を把握した上で食料支援を行ったり、アルバイト情報だったり、住宅情報などを提供しており、本人のニーズに合った支援の実際であった。

・本人の困り事については、関係機関への同行なども速やかに行い人間関係トラブルも、こじれないように細やかな調整役としての配慮があった。

自立塾の存在効果について

・寮生達が規則正しい生活を過ごす中で、我慢を覚え、他者に対し優しくなれる自分へと成長している。

・心を閉ざしている寮生も、少しずつ他者と寝食を共にすることにより笑顔が増えてきている変化がある。

・寮生の女子の変化はわかりやすく、前髪で顔を隠していたのだが眉毛が見える程度にまで短くし笑顔と会話が増えていること(内面的回復が表面的に現れてくる)。

・サポステ事業等も受託しており、様々な角度からの支援が可能になっていること。

・職場体験先の開拓を常に考えていること、また、本人の特性にあった企業へと協力を促す営業活動や情報を見落とさない配慮と努力が見受けられた。

考察・所感(業務等への活かし方など)

今回の実地研修では、日々の相談において当事者のニーズよりも所属する組織や職種としての枠組みに沿って支援の繋ぎ先とし、それを「連携している」としていたが、もう少し踏み込んだ同行支援や関係機関への外勤などを増やして行くべきではと感じた。また、アウトリーチのスタンスでは、本人に「会える・会えない・拒否がある・拒否がない」で決めるのではなく、家族が支援を臨んだ場合は実施する方向で対応しており、そこには事業スタッフの信念として、声なき声をすくい上げ支援から漏れてしまう人がいないようにとの強い使命感と優しさが感じられた。

また、実際の寮生とのふれあいから感じたことは、一人ひとりが安心できる生活環境が得られた時には、本来備わっている「考える力・悩む力・回復しようとする気持ち」が生まれ、生きていく上で必要な生活力も鍛えられていく「場所」になっていること。また、そこから巣立ち今度は「安心して帰れる場所」へと変化し、スタッフの卒業生に対しての見守りも変わらないところが、簡単なようですごく難しいことを普通に対応していると感じた。そこには支援員としての立場ではなく、人としての関わる姿勢があり、改めて自身の支援の在り方を振り返ることができる機会となり、本研修で学んだ実体験から支援に幅のある柔軟な対応を業務に生かしていきたいと思った。

研修生レポート(11)

研修内容概要(実施概要)

事業に関する講義(座学・実習)

宿泊型支援施設の特性とその効果について、映像資料を用いつつ、代表から講義を受けた。実習中には、スタッフ及び寮生からの視点も交えながら多角的に理解を深めることができた。

地域連携に関する講義

地域企業・高校や、地域住民との関わりを交えて、地域連携に関する学びを深めた。

アウトリーチ同行

前回の訪問から数年のブランクが空き、困難度が増しているケースに同行させていただいた。本人とはドア越しの声かけにとどまり、母親に話を伺った。

支援対象者への関わりについての講義

共同生活寮での支援対象者との関わりは、マニュアルや理論だけではフォローできないものであることを学んだ。寮生同士のやり取りのなかで生まれる表情や成長を目の当たりにした。

実地研修を通して学び得た事柄(印象に残っているエピソード等)

アウトリーチ

・アウトリーチで重要なのは闇雲に回数を重ねることではなく、ポイントを絞ったアプローチにすることを学んだ。また、「親がその気になっていないと(現状を変える覚悟ができていないと)意味がない」と話し、意欲喚起を促す様子が印象的であった。

地域連携に関して

・川又代表が総代を務める町内会の秋祭りに参加させていただいた。地元民ではなかった代表夫妻が地域に受け入れられ、協力を得ることができたのはなぜなのか、住民の方たちに話を聞くことで理解を深めることができた。

宿泊型支援施設が与える効果について

・共同生活寮生だけではなく、サポートステーションの利用者とも関わらせていただけたおかげで、通所型と宿泊型の違いを明確に感じ取ることができた。同じレクリエーション(ビーチバレー)を行っていても、通所型よりも宿泊型の利用者のほうが活力が高く、表情も豊かであり、動きも機敏である。

・研修開始とほぼ同時に入寮した寮生があり、初日は歩くことさえまならず「足をどう動かしていいのかわからない...手もどこに置いたらいいのか...」所在なげに立っていることが多かった状態から、日に日に笑顔が増え、声も大きくなり、数日経つころには、寮生同士でじゃれ合い、冗談や歌を歌いだすまで変化していた。

・アウトリーチを行う支援対象者は、長期化しているケースが多くあり、困難度が増しているだろうことが予測される。引きこもりに逆戻りさせないためにも、アウトリーチが成功したその後の選択肢として、宿泊型支援施設の果たす役割は大きいと感じた。

地域若者サポートステーション 集中訓練プログラムについて

・集中訓練プログラム(1か月)に則って寮生活を送る若者と関わることで、サポステ利用者が部分的に共同生活を体験することが及ぼす影響について学ぶことができた。

・ある程度の就労準備性も整っており、今後の進路についても具体的に担当者と話し合っているとの事であったが、寮生からの助言で視野が広がっている感じが感じられた。

考察・所感（業務等への活かし方など）

今回の実習を通じて、自らが所属する通所型支援施設の限界と役割について再考することとなった。宿泊型支援施設では、「こうすればこうなる」というような定型通りの支援は通用しない。ヒューマンスキルが、日々の暮らしの中で培われていく。

“わけあり”で寮に集った若者たちは、各々特有の地雷を持っており、日々の些細なことで傷つき、表情を曇らせる様子をたびたび見かけた。ネガティブな体験をした際に、自己理解を深めるきっかけとして転換できるのはごく僅かな若者であると思われる。（多くは抑圧してしまう）アウトリーチが必要な状態に陥った若者は、言わば抑圧の集大成と呼べるのではないが、代表の言葉である「出してみればなんとかなる」が印象的である。

現状の業務は通所型支援であるが、相談支援のみでとどまっているケースを積極的にイベントやボランティア等の、不確定要素が強い講座への参加をより積極的に行って行こうと思っている。

また、集中訓練プログラムの実施・集客についても多くの学びを得た。相談員のみとの関わりだけで、宿泊型のプログラムを提案するのは厳しいものがある。集中訓練プログラム参加を見据え、計画的な講座参加や他の利用者との関係性構築を意識して行く必要性を感じた。

研修生レポート（12）

研修内容概要（実施概要）

- ・ピアサポートネットしゅやが行っている全事業についての説明
- ・ピアサポートについての学び
- ・ピアサポーター定例会の見学
- ・居場所への参加(原宿ファンイン・子ども食堂・女性向け居場所・いくカフェ)
- ・アウトリーチ同行2件(家族との関わりの視点 本人を“次へ繋ぐ”視点)
- ・親の会(家族会)の見学
- ・ネットワークづくりの学び

実践、参加、見学や対話を通して、それぞれの所属団体との活動の比較や求められていること、自らが求めていることを整理していく。

実地研修を通して学び得た事柄（印象に残っているエピソード等）

私が研修のなかでも特に印象に残っていることは、ピアサポートネットしゅやが大切にされている「ピアサポート」についての学びです。上下の関係でなく一緒に考えていくことができる“対等な関係”のピアサポーターは、地域のコミュニティが薄くなっている現代でこそ必要になってくる存在だと感じます。ピアサポートネットしゅやでは、地域の方々や大学生ボランティア、当事者の保護者などたくさんの人々が、それぞれにできることを行いながら、ゆるやかにネットワークとしてつながっていました。「自分自身・家族・仲間・地域社会」とのつながりを再構築することで、その人が持つ力を活かし、自分の生き方を社会で見つけられるためのリカバリーとなる支援が大切だと感じました。

考察・所感（業務等への活かし方など）

サポステでは就労支援がメインで訪問支援は行っていませんが、当法人では沖縄県の事業で「子ども・若者社会適応促進事業」という0歳～39歳までの“ニート・ひきこもり・不登校”への居場所や訪問支援などを行っています。その枠組みを活かして、アウトリーチや障害の有無ではなく自分の困難に対してピアサポートに視点を持ちながら、リカバリーができる支援ができればと考えます。居場所においては、小さな成功体験が実感できるプログラムのなかに、男性のみ女性のみなどさらに困難に特化したバラエティのある居場所もつくることで、隙間にこぼれてしまう当事者も拾っていきたい。本人・家族・支援者の小さなネットワークから、支援機関や学校などのネットワークも改めて見直し、スタッフ間でのアセスメントも改めて大事にしていきたいです。

研修生レポート（13）

研修内容概要（実施概要）

・NPO法人ピアサポートネットしぶやの行う各事業に関する講義
法人の設立経緯・概要及び各事業の内容について説明を受けた。また、質疑応答をして、内容について深めていった。

・アウトリーチ同行(2回実施)

1回目の目的：家族から今までの経緯や思いを聴き、どのように家族と信頼関係を築き、共同して支援をしていくのかを知る。

2回目の目的：今後、本人の次のステップをどのように設定するかを考える。

同行訪問は、事前にケースについて説明を受け、どのような目的で訪問するのかを確認した。2回目の訪問後は、ピアサポーターを加えて同行訪問の振り返りをした。

・各事業の見学、体験

子ども食堂2か所、女性の居場所、子ども・若者の居場所の見学及び体験を実施した。それぞれの場所で雰囲気も違っていたが、楽しそうに参加しているようだった。子どもの主体性を大切にしている様子がうかがえた。

実地研修を通して学び得た事柄（印象に残っているエピソード等）

・同行訪問

家庭に訪問するだけではなく、本人や家族のニーズに合わせたアウトリーチを行っていることが分かった。また、家族の話から行政の在り方について考えることができた。アウトリーチは、家族と共同して取り組んでいく必要があるため、家族の信頼を得ることが大切であることや、本人をどこに繋いでいくのか等を考えながら関わっていくことが必要であることを学んだ。また、家族は本人が安定しているとしても就労などの不安は拭いさられることはない。支援者は家族の思いに寄り添いながら、支援をしていくことも大切なことであると再確認できた。

・子ども、若者の居場所

子どもが主体の居場所であることが重要であることを学んだ。大人が関わり過ぎてしまうと子どもや若者の主体性が損なわれてしまう。子どもの成長を妨げないように大人は関わっていく必要があると感じた。

考察・所感（業務等への活かし方など）

今回の研修を通して、アウトリーチの基礎を学ぶとともに、子ども食堂や若者たちの居場所が、どのような場所であるべきかについて学ぶことができた。大人が関わり過ぎてしまうと、子どもたちの成長を妨げてしまう恐れがあることを親の会でも話をしていた。今後、日々の業務の中で、子どもの主体性や成長を妨げないような関わりを心掛けていきたい。

各事業の見学に行き、子ども・若者がいつでも来ることができる居場所を作りたいと思った。しかし、行政だけでは限界もあるため、地域と協働で取り組むことが重要であると感じた。まず、地域にどのような団体が存在し、どのような活動をしているのかを知るところから始める必要がある。それぞれの活動の目的や具体的な活動内容を踏まえた上で、ネットワークを作り横の繋がりを作っていきたい。

研修生レポート（14）

研修内容概要（実施概要）

ニート・ひきこもり状況のトータルしたサポートの体験。入口のインテーク面接の重要性からアウトリーチの実際を座学・ロールプレイで体験する。

また、生活困窮者等の支援も視野に入れ、研修先法人にて実施している生活保護家庭の支援・アウトリーチも体験。出口の理解のため、就労支援等の事業にも参加、支援の全体像を理解することを最終目標とする。

実地研修を通して学び得た事柄（印象に残っているエピソード等）

概要のとおり、入り口から出口までの支援の全体像を、各機関のスタッフによる現場の声も含めた具体的な説明でわかりやすく理解することができた。

ひきこもり対応のフローチャートや、インターク時のアセスメントポイントなども資料として把握・判断しやすいようまとめられており、全体で共通認識を持つことの重要性を明確に認識した。そして、スタッフの発言の統一性から、その実現化が図られていることに大いに感銘を受けた。

訪問支援時に必ず発生する保護者対応についても、丁寧にロールプレイで学ぶことができ、事業所でもぜひシェアしたい。

考察・所感（業務等への活かし方など）

人を支援することと、支援現場の現状には大きなギャップがあり、支援を受ける人がその支援機関の対象者でない場合、相談者や当事者のその後には関与しにくいという現状に疑問を抱いていた。今回の実施研修では訪問支援の必要性を学ぶことはもちろん、中途半端に支援をせず枠にとらわれない柔軟な思考で行動する、というその疑問への一つの回答を頂いたと感じている。

すべての相談者と当事者を孤立させない、その想いが、必要な機関がなければ作るしかない、という発想の実行力となり、センターの一元化した支援システムの構築につながっていることを目の当たりにし、そこに至るまでの尽力は何う限りでも敬服の思いであった。

関連資料も頂戴することができ、今回の研修に向かう目的の一つであった、共通認識をもつための材料も得ることができた。

また、訪問支援ではふとしたことで支援が継続困難となりえる緊張感の高い状況から、当事者や相談者を尊重する誠実さの表し方や、支援者間の共通認識の共有、提供できる情報資源の獲得とそこにつなげる力など細部に渡ってより強く意識することにつながっていると感じたが、その意識はどの支援においても重要なことであり、日々の支援業務においても入口とその緊張感を意識した就労支援業務を行おう、という自身の意識改革にもつながったと考えている。

研修生レポート（15）

研修内容概要（実施概要）

- ・オリエンテーション（法人概要説明・施設見学）
- ・講義（学校復帰を目指した OR について、学習支援員について）
- ・セミナー（学習会、ボランティアへの参加）
- ・不登校対策会議への参加
- ・ケース会議への参加
- ・アウトリーチ（ICT 学習支援、自立支援、就労支援、学習支援、施設見学同行等）

実地研修を通して学び得た事柄（印象に残っているエピソード等）

これまでアウトリーチに対し、効果が高い介入方法である反面、リスクの高さやコストパフォーマンスの悪さなどデメリットを感じていた。しかし、本実地研修を通し、支援方法の一つとしてアウトリーチを上手く取り入れることで、それらのデメリットを解消し、対象者に対し、必要な時に必要な支援を提供できることを実感した。アウトリーチにより、既存の社会資源に対象者を当てはめるのではなく、対象者が必要としている社会資源を提供するオーダーメイド型支援が可能となり、従来の「来所型」「施設型」支援の限界を超えたアプローチが可能となることが考えられた。

考察・所感（業務等への活かし方など）

当施設では、フリースクール・サポート校・カウンセリングルームなど、「来所型」「施設型」の支援が主となっており、自発的に相談行動を行えない方々には支援が行き届いていないという現状がある。そのため、来所が中断した方へのフォローは出来ていない。今回、実地研修を通し、当施設でのシステムや支援方法から整理していく必要性を感じた。上記でも述べたが、既存のシステムに当てはめるのではなく、利用者が必要としているものを提供できるようなシステムへの変換が求められている。これまで個人個人が感覚的に支援を行っていた部分が大きいですが、今回、支援の流れについても職員内で今一度共有する必要がある。特に、アウトリーチに対し、ネガティブイメージで捉えているスタッフも少なくないため、まずは、職員内での伝達講習を行い、効率的で有効な手段であることを周知していく必要があると考えている。

研修生レポート（16）

研修内容概要（実施概要）

< 受け入れ団体で行う事業に関して >

個別相談・訪問支援だけでなく、生活・就労支援、就職後の支援と、入口から出口までを継続して支援できる環境を整えていることについて説明を受けた。

入口のインターク面接の重要性からアウトリーチの実際を、座学・ロールプレイで体験させていただいた。

被保護世帯数が23区内で最も多い足立区で、被保護者就労準備支援事業を実施しているYSCスタッフのアウトリーチに同行させていただいた。

その他、受け入れ団体での文化祭の時期と重なったため、準備の段階や当日の役割の中で、当事者と交流させていただくことができた。

また、多摩サポでは研修生3人でアイスブレイクを担当し、利用者のグルーブトークにも参加させていただいた。

実地研修を通して学び得た事柄（印象に残っているエピソード等）

座学を通して、ひきこもり状況が長期化し、親子関係も一定のパターン化した状態になってしまうと、家族だけではそこから抜け出せなくなってしまうため、第三者（ひきこもり支援に精通した専門家）の訪問支援が重要であることを学んだ。受け入れ団体が実施する寮生活について、事前のイメージでは、暗くてコミュニケーションが苦手そうな方が多いのではないかと考えていたが、実際は話しかけられれば自分のことを話してくれたり、文化祭の準備に直向きに取り組んでいて、仲間同士で楽しそうに過ごしている姿が印象的だった。

寮生活を通して、基本的な生活習慣が身に付くだけでなく、多種多様な価値観に触れ、失敗できる環境の下で、自身で物事を判断する経験を繰り返すことが、各自の自律する力に繋がっているということを理解することができた。アウトリーチのロールプレイでは、選択肢を対象者に提供できるだけの情報を自分自身が持ちあわせていること、手段を伝え続けながら自己決定を促すこと、それでも変化がなければゆさぶりをかけることなど、すぐに実践に生かせるポイントを学ぶことができた。

研修中に同行させていただいた訪問では、スタッフが言葉を使ったゲームを通して、対象者の認知力の見立てをする工夫をしていたり、行動を伴いする中で対象者を多角的に観察し必要な支援に繋げるなど、柔軟な支援をしていた。また、CWと情報共有し早めに支援に入れるように、福祉事務所に定期的に常駐するなど、上手く支援に結び付けられる体制づくりを工夫していることに感銘を受けた。

多摩サポでのグルーブトークは、自分の考えだけでなく、他人の意見に耳を傾けることのトレーニングになっていること、仲間に愚痴をこぼしたり、がんばりを認めてもらうことで励みとなり、働き続ける活力になっていることを学び、出口支援について理解を深めることができた。

考察・所感（業務等への活かし方など）

今回の実地研修を通して、アウトリーチの進め方について具体的に学ぶことができたため、今後の訪問に生かせるよう、大島町の自立支援サポートチームメンバーと共有したいと思う。

現在、居場所の整備はでき、ボランティアやイベント参加など細々と続けているが、それだけでは自立につながらないため、YSCの地域での職場実習のように、大島町でも出口支援のための地域でトレーニングできる環境作りが必要であると強く感じた。また、町の資源だけでは限界があるため、YSCでの寮生活や合宿型集中訓練プログラム、職業能力開発センター、その他世の中には様々な選択肢があることを、当事者に情報提供できることが大切であると改めて実感し、自分自身も情報収集し学ぶ必要があると実感した。

研修生レポート（17）

研修内容概要（実施概要）

- ・事業に関する講義、および実習での参加

本部、および足立区被保護者就労準備支援事業、多摩若者サポートステーション事業の各事業の概要、ひきこもり支援についての考え方、寮生活についてなどの説明を受けた。また文化祭やその準備、サポステでのグループトークなどに実習として参加。また、本部の寮生活、文化祭に向けての練習や準備の取り組みの様子を見学した。

- ・アウトリーチ支援の同行、ロールプレイ

家族からの要請を受けて、自宅に訪問を重ねていくという設定でのロールプレイを実施した。時期に応じて訪問の中での対応も変えていくことを实际的に学べた。また、足立区で行われているアウトリーチ支援に同行した。限られた情報を事前に吟味して準備したうえで、現場で起こる事態に柔軟に対応する様子を見学した。

実地研修を通して学び得た事柄（印象に残っているエピソード等）

- ・寮生活の様子、寮生の研修生に対する関わりから、寮生活が与える効果、影響の大きさを実感した。集団生活を通して、自然な形で社会性など自立に必要な力を身に付けていくことがうかがえた。

- ・アウトリーチによる支援の開始から、就労などの社会的自立までの流れを一貫した考え方で支援できることの強みを感じた。しかし一方で、一団団で請け負ってしまうことで他機関、団体に広まっていけないというデメリットもあると聞いたことも印象的であった。

- ・ロールプレイで当事者役をやった際に、自分からドアを開けることはとても難しかったが、支援者役を開けてもらったことで助かったように感じた。当事者も同意なく訪問されることに対する抵抗だけでなく、身動きが取れなくなった状況を打開してもらえたと感じうると気づいた。

- ・同行したアウトリーチ支援では、必ずしも十分な情報が得られた状態で支援が始まるわけではないようであったが、様々な点に配慮しながら、慎重に訪問を行っていた。現場で出てくる新たな情報に柔軟に対応しながら、その場で見立てを改めていく必要性が分かった。また、そのためにゲームなどもアセスメントのために行っていたことも印象的であった。

考察・所感（業務等への活かし方など）

今回の実地研修を通して、改めて私自身の所属機関での支援の現状、課題などを振り返ることができた。まずアウトリーチに関しては、何を目的としてどういう形態で行うかということを確認する必要があることがわかった。現状では相談員各自の判断で行っているが、方針を明確にして共有することが必要であろう。また、それがアウトリーチから先の支援にどのようにつながって、支援の終結に向かっていくかという全体像を整理しておくことも同時に求められるように思う。

次に、他機関との連携を行っていく際には、支援者の顔が見えるつながりを持つということがとても重要であることを改めて感じた。職場実習の受け入れ先を見つけていくときに、信頼を得られた事業所が知り合いの事業所を紹介することで地域に根差したネットワークが広がっていることが感じられた。機関の持つ役割に応じた連携というのが前提であろうが、それだけでなく支援者ひとりひとりの人間性に対する信頼感のようなものがあることで、より魅力的な関係づくりが進むことが分かり、参考にしていきたいと思った。

研修生レポート（18）

研修内容概要（実施概要）

- 受け入れ団体の行う各事業に関する講義

不登校・ひきこもりの相談や支援事業の内容についての講義や施設案内だけでなく、学習支援員（不登校傾向のある子どもを学校の中で支援する）や大学生の学習支援ボランティアのミーティング、事例検討にも参加させていただいた。また、S.S.Fの事業外であるが、関係機関として不登校経験者を受け入れている太良高校や子ども食堂の見学等もさせていただいた。スタッフの研修のための資料（生活保護制度について）や、対象者に渡す資料（高校進学のための手順や費用等を詳しく記載してる冊子）についても説明を受けた。また、電話の受付の用紙等、S.S.Fにおいてスタッフが連携するためのシステムについても説明があった。講義の時間以外にも、事業や施設等に関して質問をするとどのスタッフの方も快く答えてくださった。

アウトリーチ同行

自宅へのアウトリーチの他にも、対象者の状況に合わせて受診に同席したり、一緒に食事を摂ったり、公園でスポーツをするなどの支援に同行させていただいた。また、自宅へのアウトリーチも、学習支援を行ったり、部屋の掃除を行ったりするなど、対象者のニーズに合わせた支援がなされていた。アウトリーチの前には、対象者の経過や、訪問の主旨について丁寧な説明があった。また、アウトリーチ後に振り返りの時間を設けていただき、アウトリーチに同行させていただいて気づいた点や質問点を共有することが出来た。

実地研修を通して学び得た事柄（印象に残っているエピソード等）

アウトリーチ

アウトリーチを通して得た一番の学びは、「一回一回の訪問に目的を持つ」ということである。このことについて一番身をもって体験をしたアウトリーチは自宅の清掃をしたケースである。その対象者である母親は生活能力の低さがあるため今後家事ヘルパーの利用を視野に入れていた。しかし、母親は初対面の者を家に入れることに対して拒否感があるため、「関係のできたスタッフが掃除を手伝い、人を入れることで部屋がきれいになったことを感じ、ヘルパー利用への拒否感を低減する」ということを目的とし、母親と一緒に掃除を行った。「掃除が出来ていないから掃除を手伝う」という安易な目的ではなく、対象者の今後の展開を見据えて、一回一回のアウトリーチに目的をもつことの大切さをこの訪問を通して学ばせていただいた。また、アウトリーチの中では、1人だけでなく、同じ趣味を持つ対象者を集めた小集団のアウトリーチにも同行させていただいた。その中には、アルバイトをすることを考えている対象者と、そのアルバイトを以前経験したことのある少し年上の対象者が一緒にフットサルをする場を設けており、活動後にスタッフが仲介役となってアルバイトの話をしていった。このアウトリーチでは小集団の支援は「同じ趣味を持つ同志の集まり」というだけでなく、対象者の目標に合わせて対象者同士のやり取りなどを目的とするなど、先を見据えたスモールステップの場となるという側面があることを学んだ。また、どのアウトリーチでも、対象者の興味・関心に合わせた会話や活動がなされていた。どの対象者も好きなことの話をしているときや、好きなことに取り組んでいる間は穏やかで楽しそうな表情を見せていた。スタッフの方も、ただ傾聴するだけでなく、対象者が好きなゲームと一緒にして情報共有をしたり、好きな音楽や動画を視聴して話題にしたりするなど、実際の体験を元に話しをするため、対象者スタッフに対する信頼感が増しているのではないかと感じた。実際にそのような場面を経験させていただき、前期研修でS.S.F代表の谷口先生がおっしゃっていた、「価値観のチャンネルを合わせる」ことを実際のケースから理解することが出来た。

組織・事業運営等

S.S.Fでは、年齢や状態に関わらず、困難さを抱える対象者を自立へ導くため、伴走型の支援を行っている。伴走型の支援を可能にし、新たな不登校やひきこもりを防ぐため、様々な関係機関と連携したり市や県の事業を受託したりして情報共有や人材育成をしていることを今回の実地研修で学んだ。

講義や見学の中では、個人を訪問するアウトリーチだけでなく、アウトリーチから支援に繋がった方を自立へ繋げるためのスモールステップとして、学習会やボランティア等の小集団活動を設定したり、就労へ向けて就労体験をするために「職親」を地域の企業等にお問い合わせするなど、自立へ向けた細やかな活動が設定されていることを知ることが出来た。

また、S.S.Fの正規スタッフ以外にも、市の委託事業で小・中学校に派遣されている学習支援員や学生ボランティアに対しても、研修やケース検討がなされており、アウトリーチや支援方法についての理念が地域で支援活動をする方にも理解され、活用されていることを学んだ。

関係機関との連携については、頻繁に会議をするのではなく、担当スタッフがこまめに連絡を各機関と取り合い、S.S.Fが中核となって情報共有をしているということを知った。また、困難ケースの他機関とのケース会議では、アセスメント指標を利用して、今後の対応方法を明確に示している例についてのお話しもあり、他機関との連携の仕方についても大きな学びがあった。

考察・所感（業務等への活かし方など）

アウトリーチ

今後の私のアウトリーチ支援では、「目標設定」を明確にした支援を行いたいと考えている。今までの支援では、漠然とした目標はあったが、明確ではなかった。長期目標を対象者の希望や現状に沿った形で明確にし、それを達成するためのスモールステップの目標設定、またその下に一回一回のアウトリーチでの目標設定をし、支援をしていきたい。また、対象者へ会うことが難しいケースやまだ関係が築けていないケースでは、まずは信頼関係を築くことを目的として、対象者の価値観にチャンネルを合わせ好きなことをきっかけに支援をしていきたい。その際には、実際に対象者の好きなことを自分も体験してみたり、対象者に教えてもらって一緒に体験をするなど、対象者に合わせた柔軟な支援をしていきたいと考えている。

事業運営

今後の事業運営としては、地域の関係機関との連携体制作りをしていきたいと考えている。現在、地域の民生委員へのアンケートを元に地域にいるひきこもり者の情報を民生委員から保健所へ教えてもらい、支援につなげるという事業を実施しているが、ひきこもりへの理解が十分ではないと感じている。そのため、今後は民生委員や、高齢者の支援や母子の支援で地域において家庭訪問を行い、ひきこもり者の把握がしやすいと考えられるケアマネージャーや、市の保健師等へのひきこもり者への支援の必要性や、支援のポイントについて啓発を行っていくことが必要であると感じている。また、訪問支援ができてその後、就労（自立）に向けてのステップとなる居場所や職業体験の機会が対馬にはないので、地域と協力し合いながら自立に向けての道筋を作っていくことも必要であると考えている。

研修生レポート（19）

研修内容概要（実施概要）

10日間の実習期間、毎日1～4件のアウトリーチに同行させていただいた。初日のガイダンスで「何を学びたいのか？」を聞いていただき、その内容にそって同行先をセッティングして頂いた。同行したアウトリーチの形態も様々であり、家庭訪問・外部施設（フードコートやファミレスなど）・セミナーなどの送迎車内・ドライブ（助手席などに利用者が同乗）など、多様な形を見せていただき、年齢も小学5年生～67歳までと幅広い利用者への支援を見せていただいた。

アウトリーチ同行以外にも、関係期間とのケース会議、支援員と行政担当者への研修会にも同行させていただいたり、S.S.F.の事業についての説明や、過去の利用者の事例などを用いたケース検討など、職員の方々にご指導頂いた。

初日、最終日には歓送迎会も催していただき、温かい10日間を過ごした。

実地研修を通して学び得た事柄（印象に残っているエピソード等）

現場での職員の方々の利用者への対応についてと、S.S.F.の運営・組織体制とそれぞれについて学びがあった。

前者については、意図を持った関係性づくり、次への展開を意識した「布石」としての声かけや情報提供をタイミングをみて行なっていることでした。単純に仲良くなるという「関係性」ではなくて、本人の自立に向けての「関係性」であり、導入段階から展開段階に向けての転換を行うことで、次回以降に接触する理由や立てつけ、枠組みをつくっていることが印象的だった。

後者については、S.S.F.のスタッフの皆さんが徹底的に支援や現場を中心に仕事をされており、相互の相談やケースの共有が活発に行われていること、チーム対応の原則が理念レベルで徹底されていることが非常に勉強になった。

考察・所感（業務等への活かし方など）

支援現場への落とし込みはもちろんのこと、ケースに対して複数人で支援にあたる体制づくり、シフト制を導入した職員があらゆるケースに関わるチームづくり、客観的に支援の現状や本人の状態を見極め、関わり方において徹底的な配慮を行うこと、この3点はすぐに導入したいと思った。

また、S.S.F.の法人運営や職員同士の関係性（何かあった時にすぐに相談できる、お互いへの配慮ある言葉がけなど）が、支援現場の理念をまさに体現していると感じ、現場での支援と運営の両輪の中で、なかなか余裕をなくすこともあるが、「支援」の関わりを組織の中でも徹底したいと思う。

研修生レポート（20）

研修内容概要（実施概要）

講義

SSFの事業説明

佐賀県・佐賀市の不登校・ひきこもり対策の取り組みなど

アウトリーチ

家庭訪問

病院同行

小グループ活動

農業体験やボランティア体験

施設見学

武雄サポステ、青少年センター、学習室

学校見学：太良高等学校（不登校生徒受け入れなど）、城東中学校（相談室運営、学習支援員の活動など）、くすの美（適応指導教室、ICTの活用など）

地域の子ども食堂見学

ほっとけーき（居場所）見学

SVや研修

精神科医による職員SV

学習支援員研修

不登校対策会議

ボランティア研修

実地研修を通して学び得た事柄（印象に残っているエピソード等）

施設の環境整備

SSFでは、施設の来客者に配慮し、誰かが出入りするたびに職員が顔を出して迎えることにしていた。人に会わずに出入りしたい利用者に対しては商店街に面した入口ではなく、駐車場の入り口を確保している。待合室となるロビーには就労や生活相談窓口など公・民機関に渡る資料が配置されており、利用者が気軽に手に取れるよう空間を活用した情報提供がされていた。

アウトリーチの様々な形

ORの形は家庭訪問をはじめ夜釣り、学習、食事、ゲーム、公園散歩、フットサル、病院同行、家の掃除など様々であり、利用者との関係作りや社会参加に少しでもツールとなるものをフルに活用していることが分かった。研修生の同行においても単に同行させるのではなく、研修生を一つの資源として活用する工夫がされていた。組織として様々なツールを確保し、開発していくことに投資を惜しまないことがSSFならではの強みだと思った。

アウトリーチにおける配慮

ORを行う際にスタッフは目的を持つことを大切にしていた。ORをとおして利用者に関わることが単に仲良くなるためだけではなく、利用者の社会参加を目指すという目的意識をしっかりと持っているからこそORとして評価されることを学び得た。

ORの際にスタッフは利用者の些細な変化に注意を払いながら臨機応変に対応していた。それらの配慮は、スタッフの個性ではなく組織の中で共有する価値観であり、SSFのやり方でもあることが分かった。対人援助における配慮は専門性の一つであることを改めて実感した。

小・中学校支援組織

佐賀市の小中学校は児童生徒支援において既存のSC,SSWの他、学習支援員（不登校対応：別室の学習、家庭訪問など）サポート相談員（不登校対応：家庭訪問）生活指導員（発達障がいなど個別の特別支援）をおいている。その中、SSFは学習支援員を派遣し、ICT（不登校の通信教育）による学習支援も行っている。これらの事業は佐賀県・市教育委員会の委託、連携をとおして行っている。不登校支援における学校行政との連携と手厚い支援体制が印象的だった。

戦略的な人材育成

SSFでは、大学生のボランティア活動を推進し、教育や福祉、心理などにおける人材育成に励んでいた。単にマンパワーとしてボランティア活動に参加させるのではなく、学びをとおしてSSFの価値観やノウハウを広げていく仕組みを作っていく。

考察・所感（業務等への活かし方など）

SSFの価値観

SSFの事業は年齢や対象など多岐に渡って展開していたが、利用者への「丁寧な姿勢」「利用者の最善の利益を追求する工夫」「利用者の現状に合わせた柔軟な対応の仕方」など、どの事業においても支援における価値観が共通していることが分かった。これらの価値観は、これから自分の業務においても大切にしていきたい。

対人援助の中のアウトリーチ

SSFは、対人援助においてORだけにこだわらない。利用者が外出や来談など、どこまでできるかを見極めながら目標を設定していく。自分の支援においてもORだけではなく利用者の状態や意思を尊重し、利用者に必要な支援を行っていきたい。

価値観の輪を広げる。

今回学び得たものを勉強会や交流会などをとおして地域の関係者や地域住民と共有していきたい。

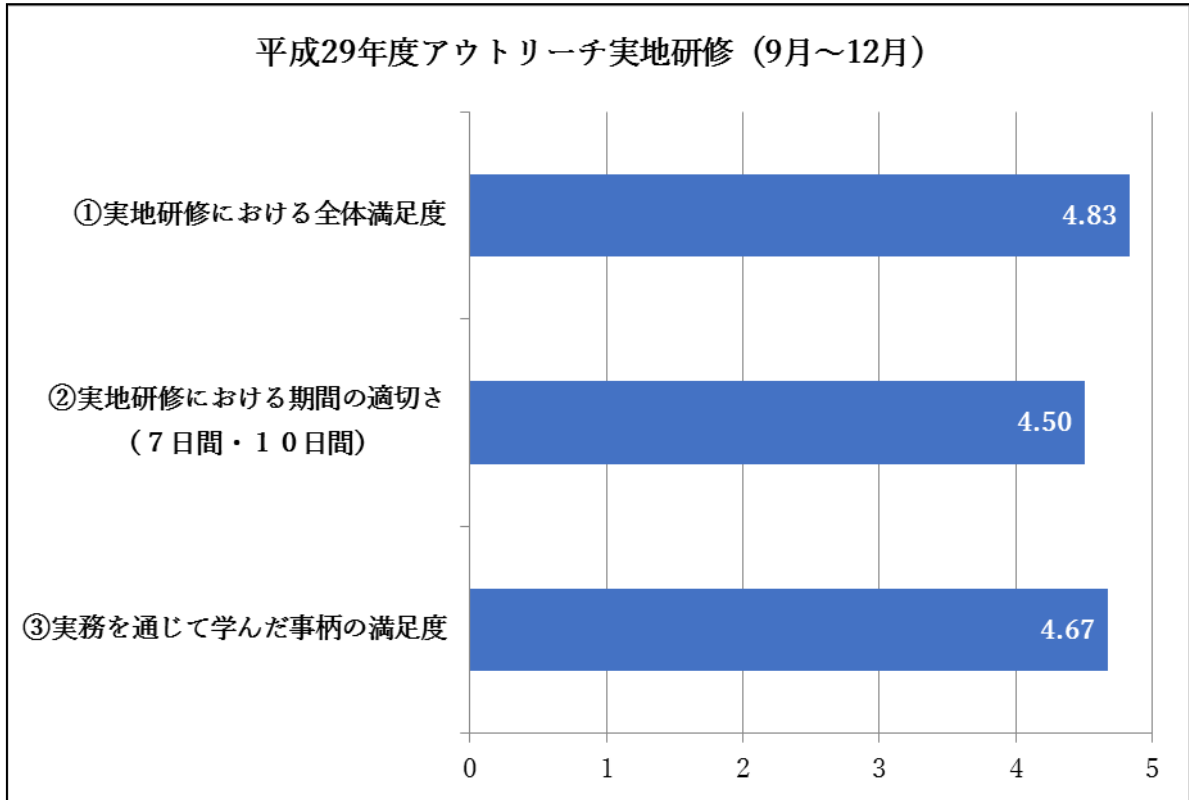
様々な支援ツールの確保

相談意欲が低い利用者ほど利用者が安心して楽しいと思える対応が必要だと感じた。そのために利用者にあったツール（引き出し）を開発していくことが大切だと感じた。自分の業務の中でできる個別援助の形を柔軟に考えていきたい。

また地域の関係者と協力しながら利用者が社会参加（学校復帰を含め）するための多様な選択肢を確保していきたい。

実地研修の満足度についてのアンケート結果は図表 9 の通りであった。

図表 9 (実地研修 / アンケート結果)



(実地研修における各事項の満足度を研修生が5段階評価(1が最も低く、5が最も高い)で回答したものの平均値を掲載している)

3. 合同研修後期

- ・ 期間：平成30年2月7日（水）～9日（金）（2泊3日）
- ・ 場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

合同研修後期は、合同研修前期と実地研修を受講し、所定の課題成果物を提出した研修生20名を対象に実施した。本研修にて習得した事柄を整理及び研修生間で共有をした上で、今後の活用方法を模索・検討した。

図表 10（合同研修後期 / 研修日程一覧）

平成29年度 アウトリーチ(訪問支援)研修【合同研修-後期】
日程表

於：国立オリンピック記念青少年総合センター

平成30年2月7日(水)	
13:30～	開会の辞
13:40～19:30頃 ※発表に進捗状況によって変動が生じる	各研修生による報告(実地研修で学んだ事柄) 研修生20名発表(各自15分程度) ※適宜小休憩等
19:30～以降	事務連絡
平成30年2月8日(木)	
9:00～12:30	班別演習① (実地研修の省察と研修成果共有を図るグループワーク) ファシリテーター:(平成28年度受講生) 宮古島市役所 福祉部 児童家庭課 家庭支援係 相談室 社会福祉士 下地 慶司氏 株式会社九州コミュニティーカレッジ みやざき若者サポートステーション 総括コーディネーター 小原 尚美氏 一般社団法人 彩の国子ども・若者支援ネットワーク 学習支援員 渡会 真琴氏 独立行政法人 国立重度知的障害者総合施設 のぞみの園 発達支援課 課長補佐 保科 華氏
13:30～18:30	班別演習② (実地研修の省察と研修成果共有を図るグループワーク) ファシリテーター: 特定非営利活動法人 NPOスチューデント・サポート・フェイス 代表理事 谷口 仁史氏
18:30～	事務連絡
平成30年2月9日(金)	
9:00～12:30	班別演習③ (実地研修の省察と研修成果共有を図るグループワーク) ファシリテーター: 特定非営利活動法人 NPOスチューデント・サポート・フェイス 代表理事 谷口 仁史氏
12:30～	開会の辞

2月8日(木)、9日(金):

班別演習 ・ (実地研修の省察と研修成果共有を図るグループワーク)

特定非営利活動法人 NPO スチューデント・サポート・フェイス

代表理事 谷口 仁史 氏

資料

* 合同研修前期と同様の資料を使用

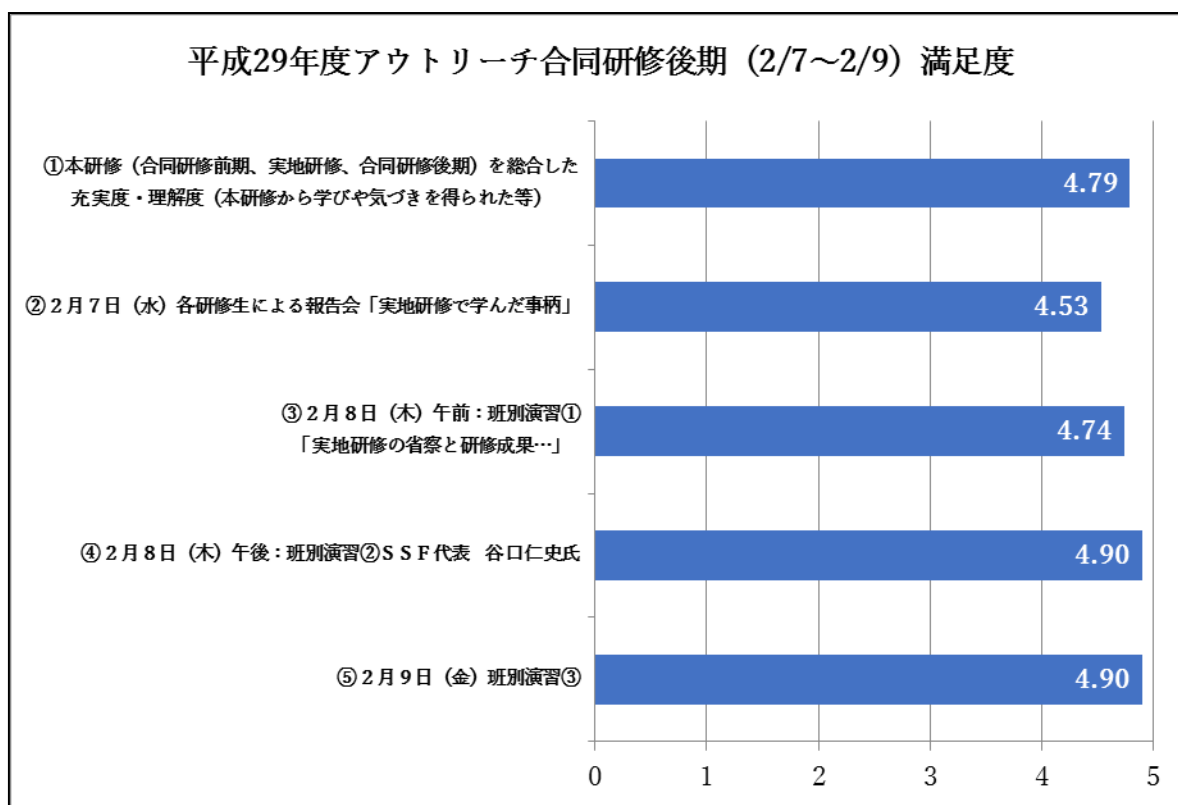
図表 11 (合同研修後期及び本研修総合を総合した感想 / 一部抜粋)

合同研修後期及び本研修総合を総合した感想
<p>研修生感想 (1) 普段気にしていなかった配慮など気づくことができた。また、具体的なアプローチ方法を知ることができ良かった。</p>
<p>研修生感想 (2) 実地研修報告で皆さんの報告の中から、自分では学べなかったことを沢山学ぶことができました。谷口先生のグループワークも事例検討の訓練になってるなと思いました。</p>
<p>研修生感想 (3) 先生方やみなさまからの学びや刺激が多く、とても充実した研修で1年があったという間でした。至らない部分が多く、反省しっぱなしでしたが、だからこそ、みなさんとのつながりや多角的な視点が必要なのだと強く感じました。これからも、この研修で学んだことを心に留め、伝えながら自分を磨いていきたいと考えています。</p>
<p>研修生感想 (4) 実地研修や具体的な事例をグループワークで話し合うことによって、学んだことが多い研修となりました。研修生同士のつながりも深まり、とても有意義な時間を過ごすことができました。今後も、自分の職場で活かしていきたいと思います。</p>
<p>研修生感想 (5) アウトリーチについての基礎から、困難ケースへの対応など、様々な方法や素敵な考え方や取り組みを学ぶことが出来た。同じようにアウトリーチに取り組みされる方の思いや考えを知り、自分のモチベーションの向上にもつながった。</p>
<p>研修生感想 (6) 前期・実地・後期を通して、本当に充実していました。この学びを今後にも生かしていけるよう色々と現場で策を練っていききたいと思います。</p>
<p>研修生感想 (7) アウトリーチの基本的な知識だけでなく、困難ケースへの対応方法、実習を通じてアウトリーチの実際を身をもって知ることができた。</p>
<p>研修生感想 (8) アウトリーチに対する自身の考え方や活用法と幅が広がりました。何よりも、全国で頑張っている仲間ができたこと、感謝です。これからも続けてほしいです。</p>
<p>研修生感想 (9) アウトリーチに関する知識や、他現場の実践を見られたことは、とても学びになりました。一方で資源やシステムの違いもあり、今の場所でどのように生かせるか、考えていきたいと思ひます。</p>
<p>研修生感想 (10) 期間も長く、内容も充実していて、満足度のとても高い研修でした。私の経験・理解力が追いつかず、まだまだ内容の消化ができていませんが、これからも勉強していききたいと思ひます。</p>

上記はアンケートの自由記入欄にあったもの (未記入の者もいる)

合同研修後期及び本研修を総合した満足度のアンケート結果は、図表 12 の通りであった。

図表 12 (合同研修後期 / アンケート結果)



(本研修を総合及び合同研修後期における各プログラムの満足度 (充実度・理解度) を研修生が 5 段階評価 (1 が最も低く、5 が最も高い) で回答したものの平均値を掲載している)